
ブロックバスターオライオン

權若俊和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブロックバスターオンライン

【Nコード】

N0368Z

【作者名】

權若俊和

【あらすじ】

“世襲エリートを狩る超能力者の前にロボットが乱入。混沌が吹き荒れる！”

金持ちエリートに憎悪を抱く深大寺達はDr毒島により、超能力を得てエスパーテロ組織を結成。復讐すべく、エスパーのみ融通されたエスパー格差社会の完遂を目論む。

……しかし、人間と同じ体格のロボット「テクノドウル(TD)」5機が阻止すべく参上！遠隔操作するのは5人の高校生「テット、ヨシヒロ、コウスケ、ノリカ、ミヤ。更に驚く事に、テットは「恵

まれた環境に縋る奴も、そいつら如きを妬む奴もクズ」と嘲笑し、
両成敗的な行動を取る！

登場人物／マシン紹介

キャラクター紹介：主な登場人物／メカ

T D コマンドーズ

▼星渡 徹人（ホシワタ テツト）（16）

頭脳明晰でクール。マイペース俺様リーダー。合理的に動く。が、根は優しい。賢いが庶民生まれな為、エリートには遠い。しかし、マイペースな俺様な為、気にしていない。「恵まれた環境で勝った奴」ズルして勝った奴に負けているとは思わん」という考えを持つ。己の勝ち負けは自分で決める主義。

▼相馬 美博（アイバ ヨシヒロ）（16）

イケメンアクション俳優志望の美男子。ナルシストで、ヒーロー番組ファン。自己流ヒロイズムを持つ、美学に煩い男。ヒーローは皆の為にあるべきという考え故、恋愛には興味が無い。

▼瀬戸 航助（セト コウスケ）（16）

サッカー少年だが、スポーツエリートで無い為、プロを断念。友人がスポーツエリートに復讐するエスパーになる。自身も内心スポーツエリートを妬むが、自制心で抑え、昇華している。少しスケベ。一番ナチュラルな青少年。

●楠 法華（クスノキ ノリカ）（16）

明朗快活な美女。短気で行動的。面倒見の良い姉御肌。竹を割った性格。元子役バックダンサーの芸能人だったが、金を使って申し

上がるライバルのゴリ押しに嫌気が差し、引退。ヨシヒロにはしょっちゅうあしらわれ、やや犬猿。

●鳳 御矢（オオトリ ミヤ）（16）

控えめな性格。TDを開発した故・Dr鳳の孫娘。祖父の遺書を読み、TDで戦う事を決意。Drと違い、機械には疎く、その件を気にしている。主張は苦手。献身的。しかし、芯は強い。小柄で巨乳。

▼Dr鳳（66）

寿命により、本編では逝去。TDの基礎システムを開発した天才科学者。Dr毒島とはライバルだった。

敵・エスパーテロ組織・リッチプレッシャー（RP）

▼深大寺 正十郎（34）

庶民生まれながらも努力で一流大学合格し、政治家になったが、金コネの無い彼は選挙に敗北。政界から消えた。Dr毒島により、エスパーになる。庶民・貧乏人・負け犬をエスパーにし、世襲に復讐する事を企て、エスパーを仕切る。

▼倉岡 卓（27）

元、営業マン。庶民生まれで、5流大学卒だが、会社で優秀な成績を納めていた。しかし、自分よりも無能なのにコネ持ちが社内です通され、憤慨。金・コネ持ちを妬むように。おちゃらけた印象だが、かなり狡猾。

▼Dr毒島（66）

超能力を与える注射・薬剤を開発。恵まれない環境の人間を救うべく、エスパー化アイテムを開発した。

▼三島 秀徳（ミシマ ヒデノリ）（16）

コウスケとはサッカー仲間だった。自身は幼い頃父を失っており、スポーツの英才教育を施されなかった為、親にスポーツ英才教育を施されたスポーツエリートを妬む。

【テクノドウル・通称TD】

■コマンドオライオン

テット機。メタリックブルー＆ブラック。狩人型。射撃型。

装備：ビームマグナム×2、シオルダーマシンガン×2、レッグミドルライフル×2、バストベルトライフル。

■リュミエルシュヴァリエ

ヨシヒロ機。メタリックシルバー＆イエロー。騎士型。剣術型。

装備：キャリバー、シオルダーマニユピュレーター×2、レッグマニユピュレーター×2、マスクホーンブレイド。

■グランデバンディッタ

コウスケ機。メタリックグリーン＆ダークブルー。海賊型。砲撃型。

装備：バズーカ、アームアンカー×2、レッグアリゲーターハン
グキャノン×2。

■ウィザースロット

ノリカ機。パールパープル&ワインレッド。魔術師型。中距離遊撃型。

装備：アームガトリング×2、アームビームニードル×2、カードビット×8。

■エンゼクロス

ミヤ機。パールホワイト&ピンク。天使型。空中高速型。

装備：シザービームアロー、ウイングホーミングミサイル×6、リングビット×2。

EP・01 〈ロボットVSエスパー〉 前編

プロローグ

——それはある日行われたロボットコンテストの事だった。

出場選手準備室。

自分が創意工夫込めて作ったロボットの最終調整に入っている。

その中の1人「星渡徹人」テット」。

ややオールバック気味に頭髪を逆立てた端整なフェイスの持ち主の彼は、全長30センチほどの格闘ロボットを一旦分解し、最終確認を行っている。

「おやおや、埃臭い模型店で売っている安物のパーツばかりだねえ」

テットの隣から嫌味ったらしい口調が割り込む。

無言でテットは反応。

邪魔臭そうな前髪が真っ直ぐ前に飛び跳ねた小物臭そうな少年であつた。

「可哀想に、良質なパーツを購入するお金が無いんだねえ」。その点、僕は海外製の高級パーツを使用しているんだよ！ 見たまへっ！」

自分はお坊ちゃまであると言い切ったこの男は自分の机に置いてあるエントリーロボットを見せ付けた。

ティラノサウルスを模したロボットであつた。

大きさは40センチそこらである。

輝く金属フレーム……。薰る良質金属の匂い……。

しかも、装飾も派手で、ゴールドメッキを牙や爪に塗装されてある。

「今更分解するのも面倒だから、出来ないけどモーターなんて、定

価2万のハイブリッドモーターなんだよ？ どうだい？ 凄いだろう」

彼の自慢と裏腹にテットは無視しており、無言で愛機を組み立て直している。

そのスカした態度に坊ちやまは眉毛を歪ます。

「く……。フン、まあせいぜい強がりたまえ。どうせ、優勝は僕だからね！ ここに居る諸君！ 今ここでハッキリ言おう！ 今回のコンテストで優勝するのはこの僕だ！ 敗北して惨めな思いをしたくなければ、すぐに辞退したまえ！ 恥をかかさぬよう、エリートの配慮を受取るのだっ！」

他の出場選出は険悪な表情を示す。

何だこいつ……。敵意の視線が飛び進む。

「偉そうにしたければ、結果を出してからしろ」

テットはマシンを組み立てなおし終え、しれっと口を開いた。

「何っ……？」

「結果が全てを語るさ……」

そう言い残し、テットは背を向け、出場ロボット&ツールボックスを持って退出。

坊ちやまは齒軋りを奏でた。

「庶民の分際で生意気な……。だけど、吼え面掻くのは絶対あいつだ。僕は大手自動車メーカー・トヨハラ幹部の息子なんだぞ……。初出場・初優勝という栄誉は揺ぎ無いんだ……」

大会が始まった。

お坊ちやまのエントリーした恐竜ロボットは高機動で動き、更には尻尾を発射し、飛んだ先のダンボール箱を突き刺す。

高評価が多く、優勝候補ではないかと会場内はざわつく。

しかし、テットの人型ロボットは何と器用にも腰のホルスターから玩具の銃を取り出し、ガンⅡカタを採る。

終いにはバク転までもやってのけた。

まるでアクション映画俳優さながらの動きのキレであった。
会場はこのガンマンロボットに心奪われ、絶句――。

評価が纏まり、結果発表の時間となった。

優勝〃テット、準優勝〃お坊ちやまという結果に終わる。

顔を赤くし、憤慨するお坊ちやま……。

「そ、そんなバカな……。審査員に根回ししたか、あいつ？ いや、貧乏人如きにそんな事は出来ない……」

そんなお坊ちやまの姿を他の出場者は「ザマー見ろ」としか言いようの無い態度を示していた。

テットは「フツ……。金で技術知恵まで買えると思うな」と、鼻で笑い、坊ちやまを横切る。

――この結果では拙いと思う輩が坊ちやま本人以外にも居た……。

マスコミ及び、彼の血族〃大手自動車メーカー幹部のメンツである。

取材に来ていたマスコミの連中は困り果てる。

「参ったなあ。大手自動車メーカー・トヨタの坊ちゃん、優勝候補だったのに」

「華々しいニュースになる筈だったのになあ」

そこへ堅苦しいスーツ姿の男……怒号を顔一杯で示している高齢男性がマスコミの元へ巨象の如く、荒々しくやって来る。

「おい！」

マスコミへガン飛ばし、話し掛けるその男。

ビクつき気味に反応するマスコミ。

「は、はいっ！ ……って、トヨタ会長じゃないですか！」

「優勝した奴はこれまでもこの大会に出場したのか？」

「ほ、星渡君ですか……。そうですね。2年前から出場して、今回初優勝ですか？」

「そうか。3回目なら勝って当然だな。ようし、お前ら、我が孫・トヨハルトミ才は“初出場” 初準優勝を飾ったと報道しろ！ いいな！？」

「いや、それはちょっと……」

「つていうか、トミ才君、余所の大会にはこれまでも出場しているじゃないですか？」

拒絶的反応を示すマスコミ勢。

ならば仕方ないと、会長は舌打ちをし、マスコミのうち1人に耳打ちをする。

「後で知り合いの芸能人の暴露ネタ、提供してやる」

この餌にマスコミの耳と脳は完全に釣り上げられ、「分かりました。仰せのままに」と承諾するマスコミであった。

この様子をピンク色の派手なスーツの男はじつくりと見ており、「ふふふん。やはり、世襲エリートはクズだよ〜ん」

と、呟き、そのまま会場を後にする。

——夕方。会場近くの公園ベンチに座っているテット。

小腹に菓子パンを食べていた。

そんなテットに人影が被さる。

誰かが彼の元へ来た。

「いやあ、気の毒ですよん君は」

パンを食い終え、テットは冷然とその声の主へ目を向けた。

「何がだ？」

「私、ロボットコンテストを観戦していて、偶然見たのですが、マスコミは優勝した君より、準優勝のお坊ちゃまの方を大々的に取り上げるそですよん」

「下らん。マスコミなどどうでもいい。俺はロボット作りが楽しいから腕試しただけだ」

意外に思ったのか、ピンクスーツの男は目を丸くする。

「ほほう、そうですかよん。……ところで、生まれながらに優位に

立っている奴つてムカツキませんか？」

ピンク色スーツのド派手な服装の男がいやらしく囁く。

「ほらあゝ、恵まれた環境なんてえゝ、本人の努力で得たものではない訳じゃないですか？ それにおんぶに抱っこの人間ばかりがイイ思いをし、反対に我々庶民が不利な立場を味遭わなきゃいけないなんて、オカシイと思いませんか？」

曲芸師や昔のお笑い芸人の如く、派手な色の服を着たその男が、悪徳商人めいたマシンガントークを展開し、胡散臭い笑顔でそう問うた。

「確かにそうだな……。否定はせん」

その反応ににんまりと不気味に顔を歪めるスーツの男。

コテコテな揉み手を始め出す。

「ですよねえゝん。今や、学歴エリートは金持ち生まれが独占！ スポーツ選手も幼い時に親に英才教育を叩き込まれたような人間以外なれいアリサマツ！ 未だに根強く残るコネ！ 何ともまあ、夢の無い社会ですよゝ。嘆かわしや、嘆かわしや……」

男は表情をわざとらしく酸っぱくし、道化師の曲芸の如く、不気味にダンスしながらそう、謳い上げた。

「——だけど、そんなのは努力不足の甘えとか思われちゃうんですよえゝ。でも、そうだとしたら、なゝんで、ここ最近居ないのでしょう。金持ち生まれじゃないのに、エリートに昇りつめられた人間・親にスポーツ叩き込まれなかったのにスポーツ選手になれた人間が。オカシイですよねえ」

「そういった類の公式調査は見たことがある。……少し前までは少なからず居たらしいけどな……。確かに、去年〓西暦2060年に入ってから全くそういった人物は聞かない。全ての人間が不利な立場だからといって、諦めるとは限らんしな」

「これは「囲い込み」らしいですよん。金コネ持ち同士の癒着。同族がつるんで、席を独占し、下剋上を完全封鎖。んでもって、金コネ持っていない人を馬鹿にする。あゝ、ヤダヤダ！」

「……で、結局何が言いたいんだ？ 愚痴を言うだけではあるまい」
ややオールバック気味に髪を逆立てた青少年・テットは冷然と答えを促した。

「察しがいいですねえ。流石、星渡テット君、庶民生れながらも卓越した技術力と頭脳を誇る存在です。先程の全国ロボットコンテスト優勝者が何よりの証拠です。……ですが、残念ですよ。貴方は素晴らしい技術力と知恵を持っていらっしゃいますが、社会は家柄やコネで評価して、貴方のような存在を過小評価する。汚い、大人の社会ではロボットコンテストのようにはいきません……」

テットはさぞ興味なさ気に、冷然と鼻で笑った。

「フン、御託はいい。結論を言え」

「ふふふ、そうでした、そうでしたあ。このコンタクトの目的……エリート共に復讐するチャンスを与えに来ましたよ。超能力を与えてねえ！」

テットは驚く事も嘲笑う事もせず、淡々と真偽を問う。

「ほう、それは凄いな……だが、勧誘は断る。興味が無い……」

「おや？ 君は悔しくないのですか？ 金コネ持ちが有意な世の中に」

「下らん。優位な立場に居ないと勝てない連中なんぞに劣等感は抱かん」

「本当ですかあ？ 意地張ってるだけじゃないですかあ？」

「……ああ、その通りだ。だが、俺はそれでいい……。自力で優位に立っている連中をブチのめす快感が味わえる。ロボットコンテストでは実際味わったしな」

淡泊にテットは一瞥を送り、背を向け、足を進めた。

「え？？ これ、本当に参加しないんですかー！ 勿体無いですよーん！」

後ろから響く男の声など、聞く耳持たぬテット。

涼しい顔して公園から消え去った。

極自然にテットは住宅街の道路を歩いていく。

テットはふと、ミッドナイトブルーの空を見上げた……。

「奴らが目指すのはエスパーが天下を取り、世襲エリートをこき下ろす……。優位に立つ存在を入れ替えた、エスパー格差社会とでも言うものか……」

テットはノートパットのようなデバイス「スマートボード」を手にし、画面を開く。

画面には左右に分割されたタイプのゴーグルを装着した頭部、胸部にタスキ状に左上から右下へ斜めに巻かれたライフルを持つロボットの設計図面のようなものが……。

その図面の上部に、

「TECHNODOLL 001 COMMAND ORION」と、表記されている。

ふわりと、夜風が吹いて来た。

周辺の木枯しを踊らせ、テットの髪や服を揺らす。

テットはエッジの利いた眼を細める。

「……悪いが、エスパー格差社会は撃破だ……」

テットは自身の持つSボードを手元でクルリと回し、ガツシリそのデバイスを掴み直す。

テツトはある廃墟内にある、極秘裏に造られたラボトリへ入室。
「何だ、皆ここに居たのか」

室内には各々フリーダムに過ごしている4人（2人の男・2人の女）の姿が。

「あ、星渡君。何か飲む？ 持って来ようか？」

一番に気付いたセミロングヘアーにカチューシャを乗せた美少女

【鳳御矢（ニミヤ）】は声を掛ける。

「そうだな。アイスコーヒーでも貰うか」

「いいよ。待ってて」

ちよこちよこと小動物的にミヤは小柄な身体で冷蔵庫へと向った。

「まあ、一応僕達の秘密基地なものだからね。暇さえあれば、皆ここへ来るよ」

長髪の美男子【相馬美博（ヨシヒロ）】が鏡を見てヒーローポーズの練習をしながら、応答する。

「ってか、お前ロボットコンテストどうだった？ 俺、ゲームに集中するあまり、大会中継見るの、忘れててよお」

後頂部を束ね、チョンマゲを持つ青少年【瀬戸航助（コウスケ）】はサッカーの形態ゲームをプレイしながら質問する。

「念願の優勝……だな」

「おっ！ 遂にか。やったじゃんか」

クロスするスレンダー美脚。

爪を赤紫色に塗っている、艶やかな唇・大人びた顔立ちのポニーテール美少女【楠法華（ノリカ）】は息を爪に吹きかけ、ネイルを乾かそうとする。

「へえ」。まあ開発途中のTDを全部作り上げる星渡君ならそんなに出来て当然かあ」

「全ては結果論さ……」

テットはそのままラボの居間内を歩み、空いているソファへ腰を落とした。

「皆、聞いてくれ。今日、俺は奴らにスカウトされた。勿論断ったがな」

ピタリとビデオを停止するヨシヒロは、穏やかな口調でテットを見やる。

「おやおや、そんな事が……」

足を滑らせ、思わずずっこけるコウスケ。

「どわ！？……ててて、マジでか！？」

ヨシヒロ・コウスケ・ノリカはテットに注目する。

「断つてもあつさり向こうは逃がした……。つまり、既に必要な人員は整っているようだ」

「だからそろそろ敵は動くかもって事？」

アイスコーヒーの入ったグラスを持って来た長い髪を揺らし、ミヤが機微を傾げる。

「そっか、いよいよ戦うんだな、俺ら！」

「フッフ、待ちわびたよ全く……」

「せっかく、訓練したんだもんねえ。暴れなきゃ損だわあ」

ゴクリと息を呑み、じわじわと高揚するコウスケにヨシヒロ、ノリカ。

「……そうだな、準備も長かったからな」

5人は結集までの経緯を回想する……。

02

——遡る事、それは1年ほど前。

学内休憩時間。とある教室。

「はあ、微妙な点数……。まあ、酷過ぎでもないんだけど」
そう落胆するのはコウスケ。

微妙な点数のテストを取ったようだ。

「奇遇だねあ。僕もそんなトコさ」

無駄に爽やかな口調でヨシヒロがコウスケの隣にぬっと現われる。

「お、ヨシヒロもかあ」

「まあね！」

ヨシヒロはカッコ付けた感満載の珍妙なポーズを披露し、首肯。

「な、何だよそのポーズ……」

コウスケは白けた表情でヨシヒロのポーズの意味を問う。

「これはイケメンヒーローポーズの練習さ。僕は将来アクションモノ中心に活躍するイケメン俳優になる予定だからね」

「へえ、俳優かあ」

「そう、例えば……」

ヨシヒロ、空いている教室後部へ移動し、助走を付け、駆け出す。

次いで、ジャンプ！ そのまま特撮ヒーローチックなカッコ付けた感じの飛び蹴りの形を取った。

「イケメンヒーローキック！」

そう叫び、虚空へ飛び蹴りし、そのままスタツと着地。

両腕を広げ、体操選手よろしく、直立着地をした。

コウスケ、思わず拍手。

「おお、やるなあ。流石新体操部」

「ま、来年からは演劇部をやるつもりだけだね」

「……でも、なれるかどうかは分かんないんだよなあ。嫌なこと言っちゃうけど」

コウスケは悄然と呟く。

「俺のサッカー部では今、スポーツエリートをブツ潰そうと猛特訓してんだ。だけど、勝てる気はしないんだよなあ」

「スポーツエリート？」

「ほら、ココ最近のスポーツ選手になれたり、学生のスポーツ大会で功績を残す奴って幼い頃から親にスポーツ叩き込まれた奴ばっかじゃん？」

「ふむ、そういう話、よく訊くねえ」

「でもそれって、夢ねえじゃんか。親に恵まれないとなれないなんてさ。だから、そのスポーツエリートに勝って、スポーツに夢を与える為に猛特訓してる訳。けど……」

「現実問題、手強い。だから、諦めモードって訳かい？」

「そういう事。この前も、聖アスリート学園の連中にボロ負けしたんだよな」

「ああ、プロスポーツ選手を最も多く排出している学校だね？」

「だから夢なんか持っても辛いだけだと思って来出したんだよなあ。お前の目指す俳優業界も他人事じゃないぜ？ ああいうトコも金コネ持ちの方が有利とか言うじゃんか」

「そうだねえ。最近二世タレントが増えてるらしいし……」

「ほんと、こういう現実あると嫌になるよなあ。恵まれない環境に生れた奴はどうすりゃいいんだよって話。しょうがないと思うしかねえのかねえ」

コウスケは更に表情を萎えさせ、思い溜め息を落とした。

「……だからといって、努力をしなかったらもつと悲惨だろうな」

そこへ新たに男の声が参入。

オールバック気味に髪を逆立てた、クールな印象の生徒「テットである。」

「お、テットかあ。ロボットコンテスト上位保持者は言う事が違うねえ。金持ち出場者をも打ちのめしたんだって？」

「あれは何かギリギリってトコだ。だが、それ以外は何も勝っていないけどな」

テットは乾いた笑いを受かべた。

「そっかあ、でもあれだよなあ。不利な立場にいと諦めたくなくなるし、優位な立場の奴を妬みたくなる。そんな事しても無意味つてのは分かっているけど……」

ぼんやりとコウスケは天井を眺める。

「でも、卑屈にはなりたくないよねえ。って、トコだよねえ」

左右上へひよいと両手を上げ、ヨシヒロは失笑を漏らす。

「……そうだな。仮にテロを起こして、金コネ持ちを虐殺しても、残った人間の中での格差が出来る。だから、抵抗は無意味だろう。……だから、庶民は諦めるか、一矢報いるべく、野心燃やすしかない……。俺はある程度は諦めて、勝てそうなベクトルへ一矢報いるけどな」

端正な顔を歪ませ、テツトは不敵に笑んだ。

それもそうだな。と、ヨシヒロとコウスケは釣られて笑って魅せた。

「ねえ、ちよつとお」

そこへ割り込んで来た新たな声。

それは一転して女子の声。張りのある活発な声であった。

それはモデル体系のすらっとした美女「ノリカと、彼女より小柄な少女「ミヤ。」

「楠に鳳、何の用だよ？」

コウスケは頭部を傾け、質問。

「ああ、ゴメン瀬戸君じゃなくて、星渡君に」

「俺にか？」

「う、うん……」

フランクに話しかけて来たノリカとは違って緊張した様子で口を開くミヤ。

「実はね……」

02

放課後、この5人「テツト・ヨシヒロ・コウスケ・ノリカ・ミヤ」はある研究所へ足を運んだ。その研究所とは鳳ラボラトリ。

鳳ミヤの祖父の研究室である。

その研究所まで街中を歩く5人。

「……にしても、突拍子も無い話だなあ。鳳のじーさんロボット開発者で、そのじーさんの知り合いの科学者が作ったエスパー開発薬を使って良からぬ事をしようとしている連中が動き出しているので、鳳のじーさんは対エスパーロボを作っていた……とはなあ」

「だが、完成に間に合わず、鳳の祖父は逝去。なので、技術力のある俺にそのロボットを完成させて欲しいという訳か……」

テットに向って、ミヤはこくりと頷く。

「うん……。遺言にあったの。敵に感付かれないようにしないといけないから、警察や有名な人へは伝えちゃいけないって……。だから、ロボットコンテストで上位の星渡君に頼もうかなって……」

「フ、実に面白い話だ。どんなロボットが待っているのか、楽しみだ……」

獲物を前にした狩人の如く、生き生きとテットは高揚。

「……で、何であんた達も来てんの？」

ノリカは渋い顔でついて来ているヨシヒロ&コウスケへ話を振る。「バーカ、そんな厄介な話、無視出来るかよ。敵とされるエスパーつてのが俺達を苦しめるかもなんだろう？ むざむざやられるのを待つより、立ち向かう方がいいと思っただよ」

「瀬戸君……。相馬君は？」

「僕はイケメンヒーロー俳優に憧れている。だから、本物のヒーローになる又と無い経験をしたいと思っただよ」

「はあん、ナルホドねえ……」

「つーかよ、鳳自身で何とか出来ねえの？ だって、科学者の孫だろ？」

「無理だよ……。あたし、全然機械弄りとか出来ないし。そもそもお爺ちゃんはおたしに手伝えって無理強いしなかったから……。研究所もお爺ちゃんが死んでから初めて見に行ったぐらいだし」

「そっだったのかあ」

「んで、研究所を見に行ったら、エスパーと戦う事に備えていたと

分かったんだよね？」

ノリカの顔を見て、ミヤは頷く。

「うん……。お爺ちゃんはおたしに手伝えとも戦えとも言わなかったけど、知った以上は放っておけないから……」

だらだらと話しながら、目的地へ到着。

住宅街より離れた湾岸地域にポツンと聳え立つ研究所。

ミヤが鍵を開け、小汚い研究所のドアが開かれた。

少々古びた設備だが、パソコンや製造機など、充実した設備がそこにあつた。

入室した5人は部屋を見回る。

「うつひゃあ、スゲエな」

「うーん、まるで秘密基地みたいだねえ」

コウスケにヨシヒロは感慨耽る。

「どおん？ ビックリした？ これ、ミヤのお爺ちゃんの研究室なんだよお」

……と、会話しながら奥の部屋へと歩き進んでいく。

先頭のミヤがスイッチを押し、到着したドアを開く。

「皆、ここだよ」

「ほう……」

両腕を組んでいるテツトが淡々と感心しながら目線を持っていた先……。

そこには5つの人型ロボットが確認出来た。

どれも、素体フレームは完成しているが、装甲の取り付け具合がまちまちで、装着されていない部分に相当するパーツも見当たらない。

紛れも無い未完成品である。

「おお……」

「これだね？」

ヨシヒロの問いにミヤは無言で首肯。

テツトはいつの間にか、近くのデスクにある紙束「企画書」を閲覧

している。

「『機種名・テクノドウル(TD)……遠隔操作式ロボット。エスパーと戦い、相手をデジタルデータに変換させる(データコンバート)という、形で鎮圧するマシンである』……だそうだ」

そう資料の最初のページを読んだテットはページを捲り、詳細を知っていく……。

「どう？ 星渡君、残り作れそう？」

テットへ不安そうな表情でミヤは訊ねた。

幾らロボットコンテスト優勝者といえど、兵器レベルのものを造れるというのは無謀だろうか？ と、改まって思い、実際どうテットは判断したのか気になるミヤ。

テットは厳然と、それでいて黙々と企画書を閲覧……。

暫し緊張の沈黙が続く。

ミヤに、ヨシヒロ、コウスケ、ノリカは返事を黙々と待った。

「ふむ……」

「ど、どうなんだよ……？」

息を飲む一同……。

テットは4人の緊張などいざ知らず、マイペースにもデスクの引き出しを開けていき、物色をし出す。

「何か」を探している……。

「お、あったか」

4人は「何か」を発見したテットへ注目する。

「こいつだ」

テットはノートパットのようなもの「Sボード」を取り出した。

「これがどうかしたの？」

「TDを遠隔操作するコントローラーだ。そしてこれは……」

テットは企画書にあるテキストを読みながら、淡々とSボードを操作する。

「動かすのかい？ どう見ても完成していないと思うんだけど……」
ヨシヒロは顔を渋くし、華奢な素体フレーム剥き出しの未完成品

5機を見つめる。

「いや……動かす訳じゃないさ」

ミヤ達4人は意図が汲み取れず、脳裏に「？」を浮かべる。
テツトの持つSボードから赤外線のようなものが照射され、その光は未完成TDのうち、1機に注がれる。

すると、その光を浴びた素体フレームは0と1の羅列と化し、光に吸い込まれるかのように消えてしまった。

思わず、目を大きく開け、衝撃する4人。

「ちょ、おい！」

「消えちゃったじゃない？ どうすんの？」

慌てるコウスケとノリカ。

「大丈夫だ」

反対に落ち着き払っているテツトは再び操作し、再度赤外線のようなものを照射。

今度はその光から人型の0と1の羅列が形成されていき、先程消滅されたかと思われた未完成TD1機が「再召喚」された。

啞然。4人は目を疑った。

「これがデータコンバートシステムか……。要するに対象を自由にデジタルデータ化出来るという事だ。更に他の金属などを取り込む事で修復・パーツ開発も可能……だそうだ」

「よ、よく分かんないけど、とにかくスゴイメカなのね？」

ノリカなりに何とか解釈。

テツトは「量子変換力学が云々……」と小難しい解説をしてみてもいいところだったが、「まあ、そんな解釈でいいだろう」と、無言で首肯。

「……で、結局残りを完成させられるの？」

ミヤは一番気になる真相をおろおろしながら問う。

「完成させられる。それどころか、自分で設計開発して新たなパーツも造れる。余裕だ」

ほっと胸をなで下ろし、ミヤは安堵した。

「良かったあ」

取り敢えず、ほっとした5人は居間へ移動し、ソファアに座ってくつろぐ。

「いやあ、良かった、良かったあ」

ノリカがおっさん臭く首をコキコキ鳴らす。

「……けど、敵がどんな連中が分かってねえんだよね？」

「気掛かりだねえ」

コウスケとヨシヒロはふと気になり、考え込む。

テットだけは黙々と企画書を見ながらSボードを操作中。

「おい、敵が分かったぞ」

「マジでか？ 一体どうやってだ？」

「実は探索用ステルス衛星機もあり、それもこいつで遠隔操作出来た。そいつを通して以前撮影された映像の中にそれらしきものを発見した。皆のSボードからでも再生出来るからそれぞれ見てくれ」

4人はテットの言うとおり、映像再生コマンドを入力した。

その映像……。

30代そこらの男、深大寺正十郎がベッドから起き上がる。

これはある研究室で行われた映像。

「どうかね？ 深大寺くん。身体が完全に超能力に馴染んだ、生まれ変わった肉体は？」

そう声をかけるのは白衣を着た老人Dr毒島。

この姿にミヤは覚えがあった。

「あ！ この人！」

「知ってるの、ミヤ？」

「うん、お爺ちゃんの葬式に来ていた……」

「成程。知人の計画ゆえに知り得たのか博士は。だが、口で言っても無駄だと思い、独自で対策に動いていた……。とでもいう経緯だ

ったのだろっな」

「多分ね……」

ヨシヒロは整った己の顎をなぞる。

5人は映像の続きに集中する。

映像の人物2人のうち、若い方の男「深大寺。

彼は高揚感に満ちていた。

「……感じます。力が満ち溢れるのを」

「そうかそうか、それは良かったよ。では手始めにこいつでも！」

Dr毒島は近くのビーカーを掴み、深大寺へ投げ飛ばす。

深大寺は逃げる素振りなど見せず、平手を翳す。彼は開眼し、篤く拳を握る！

すると！ 突如ビーカーが盛大に粉々になる！

まるで、“握り潰す力をビーカーに飛ばした”かのように。

そう、これが“念力”超能力の1つ”である。

「ふむ。いいウォーミングアップだねえ」

「ええ。これも博士のお陰です」

「いやいや、人として当然の事をしたまでだよ」

「ところで、Dr毒島。同士は現在何人集まりました？」

「現在542人……もう少し集めるかね？ それとも、このまま侵略しちゃうかね？」

「いえ……1000人ほどは集めなくては。まだ、待つ時期ですよ。我らが理想、恵まれし者に鉄槌を下す、エスパー格差社会の遂行は……」

深大寺の脳内に5枚の写真が1枚1枚、順番に散らばった。

1枚目「悪政に憤慨し、自らの手で悪政駆逐すべく政治家を目指し、勉学に勤しんだ学生時代の深大寺の写真。」

2枚目「努力の成果あつてか、一流大学合格を決めた写真。」

3枚目「同様に国家公務員試験合格」政治家になった写真。」

4枚目「しかし、金コネの無い彼は選挙で劣勢を強いられ、大敗し

た写真。

5枚目「多額の借金を抱え、政界から速効で消えた惨めな深大寺の姿の写真……」。

その写真を脳内で踏み付ける深大寺。

憎き悪……世襲エリートへ逆襲出来る。

深大寺は過去の無念を思い起こし、再度闘志滾るのであった。

「フフ、そうかね……」

深大寺とDr毒島は互いに不気味な笑顔を送った。

テツトは黙々と映像を別のものに切り替え、4人にまた新たな映像を見せる。

同施設内で、血気立った他の超能力者達が戦闘トレーニングをしている部屋を捉える。

獣化したエスパー同士の取っ組み合いや、物体操作訓練に明け暮れている連中……。

「ぐふふのふー、この力で世襲エリート共をズンドコに落つことしてやりますよーん！」

興奮するド派手なスーツの男を中心に、総じて異常・怨念めいたテンションであった。

まさか、本当に超能力を披露されるとは……。

テツトが見せた、信じ難い事実を目にしたヨシヒロ達4人は絶句。黙々とテツトは考えた。

30代の男には覚えがあった。

確か、若手政治家「だった」男。深大寺正十郎。

「金持ち生まれが得する世の中であっていけない！」と真摯に訴えていた様子を以前テレビで見っていた。しかも、一時期メディアでは「非世襲・非富裕層育ちの政治家が日本を変革させるか？」とも謳われた逸材だった。

なので、テットにとっては印象の深い男であった。

テット自身も昔は政治家時代の深大寺と同じ意見を持っていた。しかし、金コネの無い深大寺が政界から敗れ去ったことを受け、一時絶望する。

が、しょうもない事でも一矢報いたい・得意なことなら勝ってみせると意気込んでロボットコンテストに挑み続け、ようやく勝利したテット。

しかし、世の中、自分のように一矢報いた人間ばかりではない。

努力の末、這い上がったが、諦めざるを得ない苦汁を味わった深大寺が復讐・テロへと踏み込むには相当な思いがあつたのであろう。ならば、自分が、深大寺たちが納得出来そうな落とし所は何所かと考え、テットは口を開く。

「……とまあ、敵はこういった連中だ。こちらは訓練しつつ、奴らが本格的・大々的なテロ活動を行い次第、成敗する」

「え？　なあテット。今のうちにチビチビと敵さん潰しといった方が良くね？」

コウスケ、案を提示し、テットの策に異議を唱える。

「そうよねえ」。確かに早いうちから潰しておく方がいいかも」
ノリカも深々と頷く。

「……いや……。奴らの行動は巧く利用するべきだ」

「ん？　どういう意味？」

髪と顔をだらりと横へ傾け、ミヤは疑問をぶつけた。

「わざと事件を未然に防がず、ある程度はエスパー共を好き勝手にやらせる。教えてやるのさ。エリート共に、恐ろしい存在に妬まれてしまったって事をな……。一種の警告だ。格差の酷さを大々的に示そう」

4人は圧倒されつも、意図を理解する。

「流石に見殺しや人生を脅かす程の負傷を負わせないが、ちょっと位は復讐鬼に甚振られて貰おう。多少の怨み辛みは晴らさせてやれ」

顔が引き攣るコウスケ。

「え、えげつないなお前……」

「憎しみを発散させる事のないまま、葬られる方がえげつないと思うが？」

「ま、まあ、そうだけど……」

「俺達はエスパー軍団の味方でも、エリート共の味方でもない。ただ、エスパーの野望、エスパー以外迷惑を被るエスパー格差社会を防ぐ……。ついでに、世の中の人間に考えて貰う。どうせ、変わってくれなくてもな。ただ、それだけの話だ。お前らだって、決して世襲エリート共といったセコイ連中を支持している訳ではあるまい」
「まあ、支持も糾弾もしても現実、意味ないしね……」

ノリ力は飄々と表情を酸っぱくする。

「いいよ。僕もそれに賛成さ！ やっぱり、ヒーローは古典的なピッチの時に現れないと！」

ヨシヒロはパチン、と指を鳴らし、爽やかに迎合の意を唱えた。

それ以降、TDの完成をさせていった。

5人の嗜好と戦いに必要とされる武装を考慮し、デザインを練り直したテット。

その後半年程度で完成させ、5人は操作訓練をしつつ、敵が本格的に動くのを待った。

EP・01 〈ロボットVSエスパー〉 後編

03

敵が動くまで準備をしながら、待つこと約1年後……。

——山の中にある高校の1つ、岩鉄高校——。

この高校を上空より捉える「ステルス化した衛星カメラ」……。

これはステルスサテライトと言い、校内をも解析し、映像を捉える事が出来る代物である。

大きさは一般軽自動車ぐらいの縦・横・高さ。

ステルスサテライトは校内の様々な部屋をチェックしていく……。

不可解な映像ばかりが見つかった。

どの教室も授業が始まる前にも関わらず、半数近くの生徒が居ない。

廊下やトイレなど、他の場所を確認するが、その半数を補う人数は見当たらない。

本日は特別何かある日でもないし、現在は秋なので特に病気が流行る時期でもない。

実に珍妙な光景であった。

旧校舎の人気のない階段にて、その事を確認する5人。

その5人はSボードと呼ばれるデヴァイスを使って、ステルス衛星機を遠隔操作している。

「ふむ。やはり、今日か……」

5人の中央に存在するテットはある事を確信。

次にテットは左へ顔を回す。

左には男2人。うち1人・ヨシヒロが美顔を爽やかに悩ませ、両掌をひよいと翳す。

「他のどの学校も同じだよ……。半数近くが学校へ来ていないアリ

サマさ」

「こつちもだあ。小中高に大学、殆どの学校の生徒が消えてらあ。こりゃ、マジで今日が決行日だな」

「ヨシヒロ、コウスケ……。そつちもか」

テツトは女子2人「ミヤとノリカの方へ目線を持っていく。

「うゝん、学校だけじゃなく、殆どの企業も人らもやつぱり、居ないよゝ」

「あちゃゝ、こつちもだわあゝ。ここまできくと凄いモンだわあ」

「都内企業もか……」

テツトは女子2名の様子より、結果を看破する。

——そうしている間に、授業開始のチャイムが鳴る。

「つて、もうこんな時間かよ」

苦い顔で予鈴の音を耳にするコウスケ。

舌打ちをするテツト。

「チ……。一旦教室へ行くか……」

5人は一斉に自分達の教室の階へ疾駆した。

……が、途中の廊下にあつた水入りバケツにミヤは足を引っ掛けてしまい、転倒。

床へプチ蒔けられる水。その水へ落ちるミヤ。

テツト達4人は、咄嗟に水被りを回避。一旦、走行停止する。

「あつちやゝ、やつちまつたなこりゃ……」

酸っぱい顔で髪を掻くコウスケ。

「どうする？ 拭く？ 無視する？」

ノリカは頬を引き攣らせ、仲間に意見を求めた。

が、いつの間にかテツトは無言で雑巾を踏み、スケート感覚で水を拭いていつていた。

「喋る暇があるなら行動しろって事かい？ ナイスヒロイズムだ。参考にさせて貰うよ」

キザったらしくパチンと指を鳴らし、クスリと笑んだヨシヒロ。

彼は水道付近にある雑巾を掴み、地面に落とし、テットと同様スケーティング雑巾がけをする。

「買いかぶるな。面倒事は合理的に駆除するに限る……それだけの話だ」

テットはさらつと解釈の訂正を促す。

ヨシヒロは長い睫毛のある瞼を降ろし、不敵に笑んだ。

「フフ、そうかい……」

「いったたた……」

ようやく立ち上がるミヤ。服はびしょびしょで、下着が透けて見える状態となっていた。

淡いピンクのブラジャーがくつきりと浮かび上がった。

「うわぁ〜びしょびしょぉ〜」

「あゝあ、世話焼けるんだから……」

「ゴメン……」

「次から気をつけなよ」

「うん……」

ノリカはスカートからハンカチを取り出し、濡れたミヤの肢体を拭く。

唯一いやらしい視線でミヤの胸元を眺めるコウスケはポケットからハンカチを取り出す。

「んじゃ、俺も鳳の濡れた身体を……」

しれつとわざとらしい笑顔で女子2名へ向うコウスケ。

だが、ぬつと襲来したノリカの2本指に、コウスケの両目が突かれる。

「ぐほぁーっ！」

「あんたは床拭きな……」

「チ……へいへい」

と、渋々、コウスケは雑巾を掴んだ。

水道前に投げ飛ばされる湿った雑巾。……後始末終了。

——とつくに予鈴の鳴り終えた頃。

5人は慌てて自分達の1の5教室へ駆け込んだ。
ここで、教師が遅刻に関して叱責する。

……と、というのが定番だが、それは無かった。

教室内は5人などお構いなしに、困惑に包まれていた。

テット達のクラスも半数近くの生徒が出席していない状態。

更に何故か教室のテレビが点いており、ニュース番組が流れている。

1時間目担当の女性教師が何度もリモコンで電源を切ろうとしているも、何故か点いたままという、妙な光景があった。

何でテレビ切れないんだろう？ と、眺める残りの生徒達。

テット達5人はこの珍妙で、不気味な教室を見やる。

「んあ？ テレビ？」

「何で点いているんだろ？ 授業で使うっけ？」

ぼんやりと疑問を呟くコウスケに、ミヤ。

「いや、そういう予告はしていなかったハズだが……」

テットは記憶と現状により、意図して点けられたものではないと看破。

彼ら5人の一番近くの席の加賀ナオキ君が、現状を5人に説明する。

「分かんないけど、さっき勝手に点いたんだ。で、先生が消そうとしているんだけど消えなくてさ」

「はあん？ 消えないってえ？」

「このテレビは最新のもの。誤作動とは思えない……。妙だねこれは……」

難しい表情となるノリカに、ヨシヒロ。

そんな時、突如淡々と女子アナウンサーが疾走事件を述べている
ニュース番組から、いきなり、内閣官邸が映る。

「む！？」

反応するテット達。教室内の皆も改めてテレビへ注目。
次に官邸を映すテレビから音声が発せられる。

「やつほゝ、テレビの前のみゝなさん！ ごきげん麗しゅう！」

ひょうきんな印象の若い男の声――。

テットにとつては聞いた事のあるこの声に、口調。

派手なピンク色のスーツを着用したあの男が、自分を超能力者へ勧誘したあの男の姿がテレビの向こう側にあった。

テレビの向こう……。

それはニュース等で御馴染みの内閣官邸である。

その官邸・会議場を背景にこの派手なスーツの男が居る。

その場違いな男がトリッキーに、タップダンスを始め、言葉を続けた。

「どもども、初めまして。私、倉岡と申しますよん。で、その私目がナゝゼ、内閣官邸に居るかと言うとですねえ……。ぐふふふ」

倉岡は軽快な足取りで、ぴよんと横へ移動。

彼が退けた先、そこには戦慄の光景があった。

ぐしゃぐしゃに凹んだり、破損が荒々しく広渡る室内。

顔には分り易く打撲痕や出血が見られる老人・中年達……。

コテンパンに打ちのめされ、グロッキー状態の政治家達の姿があった。

そして、そんな政治家連中を見下している人物が15人ほど存在している。

「じゃーじゃーん、クズやら、無能やらと叩かれまくっているもの何ゝだかんだで日本を統括している政治家の皆さんはこのとおり、ボッコボッコになっていきます。これがどういう意味が分かりますかよゝん？」

再びテレビの前に顔を出し、画面いっぱい陰険な笑顔を押し付ける倉岡。

「教えてあげます。テロっちゃったんですよ。ブクブク！ 実にお間抜けな姿ですねえ」

この映像は日本各地で放映されている。
テレビに注目している人々は衝撃を覚える他無かった。

04

小憎たらしい嘲笑をしている倉岡は詳細を更に伝える。

「ナ、ぜ、我々がこんな事出来たか気になりませんか？ 気になりますよね！？」

じりじりとこの人を不愉快にさせるのが得意そうな悪辣な笑顔を近づけながら尚も、倉岡はマシンガントークを連射する。

「実はですねえ……我々はエスパー」超能力者なんですよっ！」

カメラいっぱい近づけた顔を急に倉岡は遠ざけ、横へさささと消え入る。

「そしてそしてえ、お待ちかねえ。今回のテロの首謀者にして、我々エスパーテロ軍団・リッチプレッシャー（RP）のリーダー、深大寺正十郎様の登場なりい」

倉岡と入れ替えに30代前半そこの男性が闊歩して来る。

この30代そこの男、表情はやつれており、頬もコケており、まるで人間に戻りかけているゾンビのような風貌である。

深大寺正十郎と呼ばれたこの男は、見る物を呪いそんな程の邪念溢れる瞳をカメラへ真っ直ぐ向け、声を発した。

「テレビの前の諸君！ 我々は超能力を持っている。試しに1つの証拠を見せてやろう」

深大寺は後ろを向き、顔を血塗れにしている政治家1名へ向けて平手を翳す。

すると、牽引フックに吊られたかのように、その政治家が突如浮かび上がる。

ニタリと口元を歪ませ、深大寺は掌を左へ向ける。

それに呼応し、浮遊している政治家は左へ引っ張られる。そしてそのまま近くの壁へ激突するのだった。

元々気絶していたので、悲鳴を上げる事すらなく、更なるダメー
ジを喰らうのだった。

深大寺は鼻を突き上げ、自慢気な顔で再びテレビに顔を向けた。
「ふふふ、どうかな？ …… 諸君」

1の5強室内。

教師をはじめとする多くの生徒達が目を疑っていた。

信じ難い現実に、ざわめく。ざわめかざるを得ないのだった。

——で、テット達5人かというと……。
いつの間にやら、教室から消えていた……。

テレビ前の深大寺は声明を続けた。

「この通り、この国を指揮する政治家は武力で我々が捻じ伏せた。
理由は何か…… それは、この社会を変える事だ！ 現在の世の中は
生れた環境に恵まれし者が有利な格差社会である！ その立場を逆
転させるのだ！ 具体的には庶民・貧乏人である我々超能力者が、
恵まれし者共に天罰を与えるのだ！」

凜とした表情を以て、深大寺は拳を篤く握り締める。

「つまりは恵まれし者を徹底的にこき降ろし、貧乏人に没落させる
のである！」

倉岡はひよつこりと隣に映り、仰々しく拍手喝采を送った。

「いや〜！ 素晴らしいっ！ あの憎ったらしい金持ち共に天罰を
与えるのですねえ〜！ はい〜、拍手！ 拍手う！ パラリラパラ
リラァ〜！」

「そして、具体的にはこうなる。倉岡！」

「はいはい〜、皆さんに分り易く、紙芝居で説明しますねえ〜」
スケッチブックがカメラ前に浮遊して来、勝手にページが捲れて
行く。

これは倉岡の能力である。

——幼稚な作画にミスマッチな、えげつない紙芝居がスタートする。

1ページ目。自分達を模した人物達が政治家や警察を殺害する絵。「まずは政治家さんや警察さんを殺しちゃいます。つまりは我々がこの国のルールを作る立場になっちゃいます」

パリりとページが捲れ、2枚目に突入。

自分達が他の人間を踏み付けている絵に変わる。

「次にエスパーが融通された社会にしちゃいます。はい、エスパーじゃない人、かゝわいそぉっす！」

じわじわとおちよくった口調で倉岡は紙芝居を進める。

3枚目に切り替わる。

自分達が他者から金や物品を強引に奪う絵が出現。

「そしてそして、全ての勝利や財産・安定を我々が頂いちゃいます。我々エスパーは何やつても自由！ お金も地位も権力も全て力ずくで奪っちゃいます！」

最後の4枚目へ突入。

路頭にて、非エスパーと書かれた人物の死体の山が描かれている絵。

「これによつて、クソ金持ちエリート共は貧乏で不憫な生活しか出来なくなってしまうすよん！ ザマミロ・オブ・ザマミロですよんっ！ あーでも、「我々が恵まれていないと判断した人」には攻撃はしませんよん。それどころか恩恵を分け与えますよん。なので、ご安心をっ！ でも、どういう基準になるかは分りませんけどね〜ん」

ふざけていて、ねちっこい語り口での紙芝居を終えた倉岡。

操術念力から開放され、スケッチブックは床に落ちた。

再び、深大寺はやつれた不気味な顔を突き上げ、画面中央に映る。「……という事だ。これより、政治家共にトドメを差す……。つまりは公開処刑だ！」

気絶していた政治家勢……。

もとい、気絶したフリをしていた一同だったが、この言葉には流石に動揺。

情け無い悲鳴を上げ、ボロボロな身体引き摺って逃げようとする。

「フン、醜い悪足掻きだ……」

「た、頼む、やめてくれ！ い、命だけはっ！」

総理は裏返った声で命乞いを始める。

「総理、私の顔に覚えはあるか？」

「い、いや、知らん……」

「く……。そうか。記憶力の悪い老害が舵を握る世は正すべきだな」

何となく予想はしていたが、ショックであつた深大寺。

短い間ではあつたが、この総理と同じ世界へ立っていたのに……。

一瞥を贈呈する深大寺の後ろで黙々と待機していた仲間エスパー連中が一斉に姿を消し、逃げていく政治家の目前に出現。

——テレポーターションである。

政治家一同は深大寺達15名ほどのエスパーテロ軍団に囲まれた。深大寺は高圧的に総理を中心とした政治家へじりじりと近寄っていく。

「総理、終わりだ……。お前達金持ちの時代は。時代は我々エスパーのモノとなるのだ！ あの世で反省するがいい！ 世襲・英才教育を重んじ、不正を容認した醜悪な政治をな！」

彼らを映像として捉えるカメラは倉岡が操るモノ以外にもあつた。……それは透明「光学迷彩を装備した衛星機であつた。

「——いや、貴様達の時代も来ない………」

謎の電子音声を耳にするこの場の全員。

その声の発生場所を探さんと、辺りを見渡す深大寺達。
「だ、誰だっ！」

深大寺と総理の間に0と1の配列が人の形をし、出現。

それが瞬時にブルーを基調としたロボットと化した！
そのロボット、身長180cm前後。成人男性ぐらいの体格を誇る。

メインカラー・メタリックブルー、サブカラー・ブラックグレー、クリアーブラックのアンテナ付きゴーグル他、センサーを搭載。
ぱつと見の装備として、両肩上にマシンガン、両腰にマグナム、両脚に置まれたミドルライフル、右腕にシールド状になっているが、実質は折り置かれたロングスナイパーライフル。そして、胸部左上から右斜め下にベルトのように巻かれたライフルを持つ。

総じて全身銃器の機影が燦然と現われた。

——この機体こそが、さっきの電子音声の持ち主である。

「な！ 何だとっ!？」

予想だにしていなかった来客に、深大寺達は眉を潜め、身構える。

「多少の鬱憤晴らしなら、目を瞑るのだが……流石に殺害の領域になると止めざるを得ない」

「……何者だ？」

深大寺は怪訝な顔を形成し、謎の機影に問うた。

「機種名・【テクノドウル(TD)】、マシン固有名、【コマンドオライオン】。貴様らの野望を阻止する者だ！」

その言葉を言い終えると同時に両腰のビームガンⅡマグナムを手に取り、ガンⅡカタの如く構える！

まごう事なき、戦闘体制だ！

深大寺達エスパーテロ軍団・RPは察知した。

この、Cオライオンと名乗る機体が敵であり、自分らと戦う事を！
「ほう、正義のロボット気取りか！ 面白い！ 正義など子供の脳内にしかない事を我々大人が教えてやろう！ やれ！」

深大寺の指示の下、総勢15人の異能者が1機のTDへ飛び掛る！
「喰らえ！」

右側の3名が掌から火炎弾を連射！

これが彼ら3人の超能力のようだ。

瞬時に拳銃「マグナムのトリガーを絞るCオライオン！」

Cオライオンは無数の火炎弾へハンドガン「マグナムと右肩のマシンガンを外側へスライド、右脚を半分分割し、ミドルライフルを展開！ ビーム弾を連続で射出！

全ての火炎弾を撃ち抜き、相殺！ 爆煙が発生！

更にCオライオンは発砲！

爆煙を突き抜け、その先へ……。

火炎を操るエスパーへと向う光弾！

舌打ちをし、3人はテレポーションを図る。

しかし、1名遅れてしまい、Cオライオンのビーム弾の餌食となった！

攻撃を受け、悶えるその男……。

その悲痛の叫びに、思わず、エスパー一同は動きを止めた。

攻撃を喰らったエスパーは悶えながら、己の身体が0と1の羅列になっていく……。

見たことの無い症状ゆえ、深大寺は目を疑う。

「な、何だこれは……？」

「データコンバート……人間をデジタルデータに変換する……。先程の攻撃はコンバートショット。データ化プログラムを光弾にし、身体へ撃ち込んだものだ」

「そ、そんなデタラメな……」

「デタラメでも現実だ。そして、これからお前らも“保存”されて貰う」

「保存だっ!?」

Cオライオンは腕スリットからメモリーカードのようなものを射出。

そのカードは0と1になっていくエスパーの身体に突き刺さり、カードがそのエスパーを吸い込んでいった！

文字通り、そのメモリーカードに先程のエスパーというデータが

保存されたのだった。

「くそっお！ ふざけるなあ！」

激昂する残る仲間エスパー連中は血気立った表情で脚部と背中にジェットブースターを装備・拳を鋼鉄にする能力を発動！ メタリックブルーのTDへ飛び掛った！

四方八方から高速移動し、殴りかかって来るエスパー連中の攻撃をかわしては両手・両肩・両脚の銃器を大乱射して応戦するCオライオン。

「ほう、身体能力強化か……」

余裕綽綽のCオライオンの操作主「テット」。

ブルー＆ブラックの狩人型TDは重厚な外見に似合わず、軽快な動きで応戦。

しつちやかめっちゃかな画の中、動き回っているエスパー達は次第に自分らの動きのパターンを読まれ、追いつめられる。終いにはデータ化プログラムを撃ち込まれていく！

—— あっと言う間にエスパーは残り5人ほどになる。

あまりにも短時間に行われた事ゆえ、愕然となるしかない深大寺や倉岡をはじめとする残るエスパーであった。

「ぬ、やるではないかCオライオン……。だが！ 倉岡あ！」

「はいはいい」

倉岡はいやらしく、両指をくねくね動かす。

「さあて、問題ですよん！ テレビジャックを誰がどうやって行っているでしょーかつ？」

獐猛な大蛇の如し、目を開眼！

ドン！ と、両手を突き出す倉岡！

「正解はあゝ、私が操っているのです！ 私、倉岡は無機物を操る超能力を持っているんですよえゝ。つまり……ロボットである貴方も操れるんですよゝんだ！」

一変、血気立った印象になる倉岡は操るべく、念力をCオライオンへ飛ばす！

………カシャッ！

——Cオライオンはうるたえる様子は無く、額のアンテナ付きゴーグルを目元へセット！

そのゴーグルは実際には目に見えない「念力の流れを可視化」させ、自身へ迫る脅威を捉える！

確認！ 真っ直ぐにやって来る、操りの意を持った波動を！

Cオライオンは落ち着き払ったまま、床を足の裏で蹴り飛ばし、念力の流れから完全に逸れた！

その上で、低空中に位置するCオライオン、脚部ミドルライフルを下へ伸展させ、棒高跳びの棒の如く、床を更に蹴り上げ、完全に相手の魔の手から離れるのだった！

この、サーチングモードはゴーグルを額に上げたノーマルモードよりも、高度な演算能力が出来る反面、多くのエネルギー「電力やセンサー」の稼働率「マシン発熱量を上げる。

何が起こるか分からない戦場。

念の為、エネルギー温存や機体に負担を掛けないようにすべきなので、必要時以外には基本的に使用しない形態なのである。

アッサリ回避された倉岡の攻撃。

念力を回避するなどあり得ないと思っていた倉岡は何度も瞬きする。

「ありっ？ 逃げた？ 念力は見えないハズなのに？」

「見えるんだよ……。こちらには“貴様らの念力”がな！」

脳髓へ疾る稲妻！ 絶句する倉岡。

倉岡の真横には、青いTDが銃口を構えているのだった。

Cオライオンは即座に回り込んでいたのだった！

「うつしょお〜ん！」

倉岡は鼻水を吹き飛ばし、両頬を押さえ、ムンクの叫びとなった！
このままでは倉岡がコンバートショットの餌食になってしまう。

深大寺が倉岡の前にテレポーターションし、咄嗟に倉岡を連れて

姿を消す！

そして、危険な敵「Cオライオン」から離れた端へと再出現。

「ぐ……おのれ……。まさか、こんな敵がいたとは……。貴様、政府の者か？」

「違うな。俺はわざとお前らに政治家共をボコらせた」

「何……？ では一体、何者なんだ……？」

Cオライオンはむくりと深大寺らにマグナムの照準を向け、答えた。

「言った筈だ。エスパー格差社会を阻止するだけだと……。誰の味方でもない……」

掴みどころの無い存在……。

啞然となる深大寺と倉岡。

深大寺は数秒後、高笑いを開始。

「クハハハ！ それはご立派だな！ だが、面白い事を教えてやる！ 我々が政府を襲撃した同時刻、我々の仲間が警察や自衛隊を潰しに行ったぞ！ お前はそっちへ行った方がいいんじゃないのか？」

深大寺は眉毛を歪に動かし、悪辣とした顔で青いTDに揺さぶりを掛けた！

「フツ。……必要ないな」

まさか……仲間が？ と、悪寒を察知する深大寺。

焦燥の汗を落とす深大寺へ銃口を真っ直ぐ向けるCオライオン。

「そうだ。貴様らの脳裏に描いた通りの事だ……」

Cオライオンのコマンダー、星渡テツトは戦略通りと言わんばかりの、不敵な表情を浮かべた！

EP・02 〈混沌への入り口〉

EP・02 《混沌への入り口》

01

Cオライオンが深大寺らと対峙する同時刻。

自衛隊基地。そこは戦車などの兵器の死骸が散漫としていた。

……にも関わらず、激しい戦闘音はまだ響いていた。

空間を飛び交うボロ戦車！

念力で戦車を振り回す少年の仰いだ指示の下、戦車は急落下！

その先には……。

Cオライオン同様の人型ロボット〃TDの存在を確認。

こちらは騎士を髣髴させるデザイン。

メインカラー・メタリックシルバー、サブカラー・イエロー、ク
リアーブルーのセンサーを持つ。

装備は巨大なキャリバーをメイン武器に、Cオライオン同様肩や脚
部にビームソードを先端に出現させるマニピュレーターが折り置
まれている。

「可愛いねこの攻撃……。けどこの、【リュミエルシュヴァリエ】
には通用しないのさっ！」

Lシュヴァリエはキャリバーを大きく振りかぶり、目の前へ迫る
戦車を両断！

戦車爆散！ 騎士自身の左右に火球を作るのだった。

岩鉄高校旧校舎階段にて、携帯ゲーム機のようなものを操作して
いる5人の高校生。

そのうち1人〃ヨシヒロは貴公子を演じる舞台役者の如く、高ら
かに叫ぶ。

「フフツ、素晴らしい切れ味だ。さあて、Ｌシュヴァリエ！ 畳み掛けようじゃないかっ！」

ヨシヒロはＴＤを遠隔操作する装置「Ｓボードのキーボードに自身の指を舞踊させた。」

自衛隊基地にて、石化するエスパーはそのまま弾丸の如く特攻！
Ｌシュヴァリエに激突を試みる。

「次は石化能力か……。超能力は実に多種多様だねえ」

ヨシヒロはＳボードの液晶画面に表示されている２つあるアタックモードを「デス・アタックモード」から、「コンバート・アタックモード」へ切り替える。

そのコマンド入力を受け、彼の愛機「Ｌシュヴァリエはゴーレムエスパーへ向って、キャリバーで切り込む！

剣と騎士の織り成すハーモニー。

吹き起こる乱舞！ 空間に斬撃音が響いた！

……だが、岩石の肉体を持つエスパーは戦車のように真つ二つにされるのではなく、０と１の羅列で形成された切り傷を刻まれた！

「グア、何だこれは……」

「フフ、コンバートスラッシュさ……」

妖艶に微笑む美男子ヨシヒロ。

次第に刻まれた０と１の切り傷は身体に広がっていき、遂には０と１で彩られた人影となった！

——その周辺で、また別の戦闘が行われている。

ズン！ と、バズーカを構えるＴＤ。

カラーリングはメタリックグリーン＆ダークブルー、クリアーオレンジのセンサーを持つ、海賊型ＴＤ、その名は「グランデバンデイッタ」である。

装備は右肩に背負ったバズーカ、両腕に内蔵されたアンカー、両脚にはアリゲーターハングキャノンを持つ。

Gバンディッタは電撃を操る小学生エスパー2人へ肩に背負ったバズーカを放つ！

巨大な光弾にあつという間に呑み込まれる2人はそのまま0と1になり、直後に飛来したメモリーカードに吸収・保存されるのだった。

「へへへん、大漁、大漁お！」

鼻と口の間を指で擦る男。

Gバンディッタを操るコウスケである。

「調子に乗るなよ！」

「お前の動きは見切った！バズーカブツ放つだけの鈍重ロボだろ！？ だったら！」

Gバンディッタの真横より、新たに2人のエスパーが挟み撃ちに来る！

2人は瞬間移動し、突如Gバンディッタの目の前に出現したのだ！腕をガトリング砲に変換する超能力を使い、海賊ロボへ弾丸の雨を放つ！

「ハッ、嘗め過ぎだぜ！」

不敵に笑むコウスケ。

豆鉄砲攻撃など特殊装甲を持つGバンディッタには効かない。

Gバンディッタはバズーカの砲身で片方を叩き飛ばし、もう片方を開いた手で驚掴みし、小さな玩具を捨てるかの如く、放り飛ばした！

しかし、一息着くのも束の間、今度は腕をハンマー化したエスパー3人が3方向から切り掛かる！

「ハン、やられっかよ！」

コウスケが叫んだ後、Gバンディッタの両脚からワニの口のようなキャノン砲リアリゲーターハングキャノンが展開！

寧猛な口を開き、相手3人へ口内にある砲身から砲撃をお見舞い！

2人は回避するが、1人はコンバートキャノンの餌食になり、データ化していく。

その上で両腕に搭載されたアンカーをシュート！

ワイヤーに繋がれたアンカーが残り2人の超能力者を巻きつけ、捕え、そこからエスパー同士を激突させる。

相手が衝突に苦悶する今がチャンス！ Gバンディッタがバズーカの銃口を回す。

巨大な砲身より放たれる極太の熱線！

コンバートバズーカを喰らった超能力者残り2名はその変換熱線の餌食となった！

受け持ちの戦闘終了。

Gバンディッタはバズーカを背中中のランドセルへ連結させ、背部へ畳み、両腰スカートにあるカードケースから薄いメモリーカードを射出！

0と1に分解されていく3人分のデータへ差し込んだ！

3人のデータはメモリーカードへと吸い込まれていったのだった。そのメモリーカードはブーメランの如く、Gバンディッタの手元へ戻り、その手に握られるのだった。

「ワリいな……。事が落ち着くまで眠って貰うな……………」

フツと力を抜く緑の海賊型TD。

「そっぴやヒデノリの奴、どうしてるんだろうな……………」
何処か夢げにGバンディッタの電子音声は呟いた……。

所変わって、警察庁本庁。

捻じ曲げられ、使い物にならない拳銃や防具――。

死には至っていないが、打撲痕が造られた警察の身体が横たわる周辺。

パールパール&ワインレッドのボディ、クリアイエローのセンサーを持つ人型ロボットの脚部のカードホルダーから巨大なカードが8枚ほど発射される！

そこに縦横無尽に飛び交う巨大カードがあった。

これはデータ化したエスパーを保存するものとは異なり、こちらは大きく、淵がブレードのように鋭利になっている。

その自立遊撃マシンのカードが空中に待機している超能力者達を翻弄。

「く、くっそあゝ。何だよこれ……」

身構えている間に飛び交うカード1枚の側面が1人の異能者を切りつけた！

「ぐあ！」

操っているかのように、鋼の指がぐいぐいと動く紫のTD。

「ふふん、どあん？ ウィザースロットのカードビットは？」

超能力者連中を翻弄するカードビットを操る魔術師型TD、【ウィザースロット】が燦然と立っていた。

操る楠ノリカはニタリと舌舐めずりをする。

「くそっ！ こうなったら！」

飛び交うカードビットに、逃げ惑う一方のエスパー連中は一斉にテレポーテーション。

ウィザースロットの周囲に出現した！ 接近戦に切り替えた。

「こんのぉ！」

「俺達の邪魔すんなあ！」

困んだ5人は拳を金属化させ、紫のTDへ殴りかかる。

ウィザースロットは両腕を広げ、袖から光の針「ビームニードル」が飛び出す！

次に上半身を回転させ、押し寄せる拳に応戦！

回転しながら、針攻撃が吹き荒れる！！

“特殊な”針殺を受けた異能者は悶え、0と1の羅列と化していた。

ウィザースロットはニードルを袖内に戻し、脚部から扇状のカードコンテナをオープン。カードビットを回収した。

「ま、コンバートステイングってトコね。さっきのは……」

同場所にて、異能者を射抜く、電光弓矢が降り注ぐ！

白い装甲の右腕に固定された、弓矢型キャノン砲が光の矢を発射

していく。

この腕の持ち主……パールホワイト&ピンク、クリアーグリーンのセンサーといった配色のボディを持つ、唯一の飛行型・天使型のTD、【エンゼクロス】だ。

トリッキーに動き回るそのエンゼクロスは同じく空中を動き回るエスパイテロ集団の仲間を撃破していった！

「ふん、だったらこれならどうだ！」

残る4人の異能テロリストは姿を消した。

……とは言っても、今回のテレポーションでなく、存在はしているが見えなくなる＝透明化能力を使ったのである。

「テレポーションだったら別の場所へ出現する筈……周辺に現われないって事は……」

エンゼクロスを操る鳳ミヤは戦術を立て、キーボードを叩く。

天使型TDの顔横のある、イヤホンのようなウイング状パーツが前方に回り込みをし、目元へ覆い被さる。ゴーグルとなった。

Cオライオンのゴーグルと同様、通常では見えぬ念力の波動や透明化した物質を捕捉出来るものである。

周辺を見回すエンゼクロス……居た！

右斜め30度と、左斜め25度の位置より、透明化したエスパイが2人ずつ襲来して来る！

これに対し、エンゼクロスの細い両脚のコンテナからリング状の物体を発進！

これはリングビットと称される自立遊撃武器である。

その、まるで天使の輪のようなリングは伸展していき、透明の敵へと駆ける！

アクロバティックに動くそのリングは透明の超能力者を輪の中へ入れるや否や、輪の直径を縮めていく！

ガシッ！ と、鋼鉄の巨大リングに捕らえられる透明エスパイ4人。

更に拘束されたまま、意図しない方向へ移動させられる！

リングビットに捕獲された透明化超能力者はそのまま縦一列に並べられた！

捉えられたエスパー一同は鳥肌を形成し、悪寒を察知。

自分達の目前に電光の弓矢を向けている白いTDが構えている！
放たれた！ ビームアローが！

4人のエスパーが逃げようと思った矢先に葬られたのだった。

「ふう、ちゃんと戦えたあ……」

ミヤはほつと胸を撫で下ろす。無事、初陣を遂行した故。

02

官邸内。喉を唸らす深大寺が居た。

「貴様の仲間が我々の仲間と対峙しているという事が……」

「そうだ」

冷然と立つCオライオンが銃口を向けながら、深大寺・倉岡へ闊歩していく。

「Cオライオン、2つ聴きたい事がある」

「何だ？」

「データ化された我々の味方は今、どういう状況にあるんだ？」

「簡単に言えば、脱出不可能の監獄に収監されている状態だ。データに身体が変換されているので、空腹・便意などは発生しない。死にはせん。不老不死の状態でヴァーチャル世界の無人島生活をするようなものだな」

「ほう……ではもう1つ、お前は我々の仲間は殺された訳では無いのだな？ 復活させようと思えばさせられる……」

「正解だ。だが、貴様らの力では無理だな」

Cオライオンはそう告げた直後にトリガーを絞った。

データ化プログラムを撃ち込まんと、コンバートショットを放ったのである。

「ひいひいっ！」

涙をちびり、情け無い叫びを上げる倉岡。

しかし、深大寺はうるたえる事は無く、強気な顔をする。

「今はな……。だが！」

深大寺は倉岡を連れて姿を消した。

「お、俺達も逃げるぞ！」

と、残る数人も消え去った。

「逃げたか……。ま、牽制しただけでも十分か」

脅威は去った。

存命している、血祭りにされた政治家達は安堵に浸る。

「ふう、助かったあ」

Cオライオン、政治家連中の方を見やり、全員存命を確認。次いで、歩み寄る。

「さて……。ここからが本番だ」

静寂な空気に金属の足音が響く。

5秒ほどで政治家達の密集地帯に到着。

「ああ、ロボット君。助かったよ。君が来なかったらあやうく殺されるところだったよ」

政治家達は完全に安心し切っていた。

彼らは賢い。

だが、彼らも所詮弱き人間。絶対的な恐怖から救ってくれた存在に安心してしまう。というか、警戒したところで、ともに歩けないほどボコボコになった状態ゆえ、抵抗など出来ない。

しかし、ハツと思い起こす。

この青いロボットは「わざと自分達をエスパーにボコボコにさせた」とのたまった事を。

思い出した頃には既にビームマグナムの銃口が自分らに向いていた。

「1つ言っておこう。奴らを作り出した原因はあんたら政治家にもあると」

「ど、どういう意味だね？」

政治家のうち、1人が怪訝な顔で問う。

「世の中、不公平があるのは仕方のない事かもしれない。だが、ある程度の是正は出来なくもないハズだ。奴らに殺されたくなければどうしたらいいか、分かるよな？ ま、頑張ってくれ。あんたらの仕事だろ？」

Cオライオンを通したテツトの主張。

電子加工音声なので、特定など不可能な声でそう促した後、Cオライオンは0と1になり、姿を消す。データ化回収された。

政治家達は啞然となり、暫し沈黙に溺れたのであった。

同時刻、自衛隊基地のLシュヴァリエとGバンディッタも同様に消え去る。

警察庁のウィザースロットとエンゼクロスも同じく。

官邸・警察庁・自衛隊基地に待機していた無色の衛星機も飛び去り、退却。

これらはTD同様、テツトらの保有物・ステルス衛星機で、敵の監視追跡や、戦闘における視点をテツトらTDコマンダーへ与え、補助する役割などを持つ優れものである。

——5機のTDは帰還した。

テツト達5人の持つ端末機。Sボードによって……。

ミヤが持つ、シルバー&ピンクのSボード画面にエンゼクロス。

ノリカが持つ、シルバー&パープルのSボード画面にウィザースロット。

コウスケが持つ、シルバー&グリーンのSボード画面にGバンディッタ。

ヨシヒロが持つ、シルバー&イエローのSボード画面にLシュヴァリエ。

そして、テツトの持つ、シルバー&ブルーのSボードにはCオライオンの画面。

現在のTDはデジタルデータとして、このSボード内に保存格納さ

れている状態であつた。

戦いは一旦幕を閉じた。

旧校舎階段に居る5人。テツト達は一息つく。

「ふう、取り敢えず戦闘終了ね。あゝチ力れたチ力れたゝあ」
ノリカはおっさん臭く首を鳴らす。

威風堂々と両腕を汲んでいるテツトが場をぐんとする。

「ま、実戦でこのぐらいやれば上出来だろう。……これから徐々に潰していくぞ！」

4人は凜とした顔で首肯。

「おうよ！」

片方の掌へ豪快に拳を撃ち付けるコウスケ。

「格好よく、イケメンヒーローの僕が成敗していくさ」

モデル立ちをし、白い歯を輝かせるヨシヒロ。

「エスパ―が支配する世の中なんて冗談じゃないっつーの！ 絶対、潰すし！」

爺臭く、面倒そうな顔で首を鳴らすノリカ。

「うん……頑張ろうね！」

最後に、ミヤは皆へ向って、内向きにガッツポーズをとった。

03

——TDとエスパ―が戦いを繰り広げたその日の夕方。

夕陽に染まる廃工場。

ここには深大寺達エスパ―テロ集団・RPが集っていた。

負傷している彼らは回復能力を持つ女性エスパ―からヒーリングを受け、休養を取っていたのだった。

「大丈夫ですか？ 深大寺様？」

「ああ、根本君、君のヒーリングのお陰でな」

ほっと安堵する榎木という名の回復超能力を持つ女性構成員。

「……で、どうしますよん？ 奴らTDを……合計5機あるようですけど……」

しけた顔で倉岡は指導者へ今後の事を問う。

深大寺は顎を摘み、深刻な面持ちとなる。

「ふむ。そうだな……奴らは我々の障壁となる存在……だが、強い。我々は既に出向いた舞台の大半を奴らに滅ぼされたのだから……」
「もしかして、諦めるとか言わないですよん？ 冗談じゃないですよん！ 恵まれた環境でエリートになった坊ちゃん共の惨めな姿を見るまでは消えられませんかよ！」

倉岡は激昂しながら、思い起こす。

自身が金持ちエリートを妬む所以を……。

倉岡は現在26歳。

エスパーになる前は大手商社で営業マンをしていた。

彼はごく普通の家庭に生まれ、3流大学を出て、数々の就職試験に挑み、ようやく採用された1つの企業で一所懸命働いていた。

……しかし、努力虚しく、彼は冷遇されていた。

同年代の高偏差値大学出身の社員からは「お前、低偏差値クソ大学出身の癖に、よくこの会社に就職出来たなあ」とイジメ。所謂アカデミックハラスメントを受けていた。

彼は芸達者な性格で、口の巧さを駆使して学歴差別をする連中を見返そうと思った。

結果として、彼らに負けない営業実績を積み立てていった。

しかしそれでも、差別・苛めは無くならなかった。

社員として納めている成績は大差ないのに……。

それだけならまだしも、高学歴の同年代社員との出世競争にも負けてしまう始末。

成績に大差は無い。寧ろ若干倉岡の方が秀でている。なのに、この仕打ち。

理由は分っていた。出世競争に勝った相手は会社重役や取引先などのと血縁関係。癒着コネ持ちであった。

倉岡は理不尽を叫んだ。

くっそお、何がコネだよ。

ムキキのキー！ 冗談じゃないよん……。私が彼らより社員として劣っている所なんて無いのに。

と、何度も吐露。……倉岡は屈辱にのた打ち回ったのだった。

そういつた経緯ゆえ、エリート潰しを実現せずにはいられないのである。

——現在……。

倉岡は地面を憎き相手と見立て、チンケながらも、蹴り続けている。「安心しろ。断念という文字は私の脳裏に存在しない」

「ですよねえくん。その言葉を信じてましたよん！」

満面な笑顔で揉み手を繰り返す倉岡。

「しかし、奴等は強い。ゆっくり弱点を探っていく事にする。戦う場合、流石に拙いと思った時は逃げることを念頭に置け！」

残り・合計900人ほどいる、エスパー一味は無言で指導者の命令に御意した。

04

一方、テツト達5人は自転車で学校から帰っている途中であった。

「あゝ、チカれた、チカれた」

首を鳴らすノリカの目にある店舗を捉える。

メイドカフェを発見。全員自転車のブレーキをかける。

「あ、メイドカフェ！ ちょっと寄ってかない？」

コウスケは嬉々と指を鳴らした。

「お、いいねえ。初陣の疲れをメイドに癒して貰うってか？」

ミヤも笑顔で頷いた。

「うん！ 行こ行こ！ カオリに会いたいし！ 今日、働いてる日だもん」

「悪いけど、僕は水しか飲まないよ。無駄にカロリーは摂取したく

ないんだ」

ヨシヒロは鬱陶しい長髪を弄りながら主張。

「俺も水で十分だ……」

両目を閉じ、両腕を組んでいるテツトは歩きながら前以て言うておく。

「あ、そ。まあいいわ。決まりっ！ 『メイド・にゃんころ』へレッツらゴォー！」

5人はメイドカフェ・入り口へと向う。

が、入り口前の段差に、ミヤは躓き、転倒。

ミニスカートからパンツが捲れ上がってしまう。

「んぎゃっ！ ……痛たた……」

ニンマリと笑うノリカ。

「わお、ミヤったら、セクシー」

「うおおおっ！？」

コウスケは思わず赤面。

見てはならぬが、見たいものを目にしたのだった。

彼は普通に下心を持っている男のようで、こっそりと、内心悪いなと思いつつも、ミヤの薄ピンク色のパンツ及び、むっちりとした尻肉を脳内保存しておくのだった。

「フ、僕は空を見上げている……。今日の空は僕の次に美しいね……」

……

さらっと、紳士的に、「自分はパンツを見ていない」と、主張するヨシヒロ。

「この事態は短いスカートを履いていた点及び、足元への不注意が招いた。……ま、自己責任だな……」

しれっと箴言し、両眼を閉じているテツトは淡々と入口へ歩いていった。

「ご尤もだねえ。こういうので、『いや〜ん、見ないでエッチイ〜』と暴力振るわれたりするの是不条理だしねえ……」

ヨシヒロは爽やかな冷笑し、テツトの後に続いた。

ハの字になる眉毛。しょげた顔で唇を尖らせるミヤ。

「……いや、あたし別にパンツ見られても暴力は振るわないんだけど……」

怪訝な表情でスカした仲間の男2人を凝視するノリカとコウスケ。

ノリカは眉を捻り、首を傾げる。

「我らがリーダーさんは何が言いたい訳？」

「あれじゃね？ パンツ見られても怒るなっつか」

「え？ そういう解読？」

「間違いないって」

コウスケとノリカ、ぐだぐだ喋りながら、店内に進むのであった。客入りの少ない現在の店内の、大きなテーブル席へ腰を落とす5人。そこへメイド「ノリカとミヤの友人」川元カオリが注文を取りに来る。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「うむ、只今帰ったぞカオリ君！」

ノリカは男装の麗人のような、低音の声音を作り、“ご主人様”を演じる。

「すっかり板に付いてるね、カオリ」

ミヤが柔和にアルバイト中の友人に話しかける。

「まあね」

ストレートロングヘアーのメイド、カオリはにっこり笑み、

「では、ご注文をお伺いしますが……」と、注文に入った。

—— 10分程度の時間が経過。

テーブルにはパフェなどの食べ終わった、食器のみが並ぶ。

試着室のカーテンが開き、チャイナメイド姿のノリカとミヤが登場！

「ふっふっくん！ どおん!?」

「に、似合うかな？」

自信満々に胸を突き出し、モデルポーズを採るノリカに、嬉しそうな赤面でもじもじするミヤ。2人の太股がチャイナドレススリッ

トからチラリと覗かせる。

「わゝ、2人共、似合ってるゝ」

ノリカとミヤに予備のメイド服を借用させた力オリが嬉々とカメラで写真を撮る。

「ふふん、このノリカ様は何着ても似合うに決まってんじゃん？

男子達、どお、これ？」

只ならぬ自信を持つノリカは豊満な胸を突き出し、連れの男子3名に評価を仰ぐ。

テーブル席に座っているコウスケは恍惚な表情で2人を見つめていた。

胸の谷間ときわどいラインまで見える太股……。

健全な男子高校生にとつて、あまりにも刺激的であった。

「お、おう……。イ、イインじゃね？」

コウスケはちゃっかり、脳内保存し、今夜のオカズにしようところそり決意するのだった。

「ふふん、当然っしょ！……って、残り2人の反応は？」

「無いと思うよノリカちゃん、あれ見てよ……」

「んんっ！？」

ミヤの言う事を確かめるべく、ノリカは残り2人「ヨシヒロ・テツトを散策した。

ヨシヒロは写真撮影場の鏡に映る美麗な自分自身を凝視し、次々とヒーローポーズを行っている。

実に熱心だ。無駄に思えるほど……。

「うゝん、あのポーズも、このポーズもどれも素晴らしい……。しかし、ヒーローポーズは欲張るものじゃない……。どれかを取捨選択しなくては……。ああ、悩ましいよ全く」

啞然と顔を引き攣らせるノリカ・ミヤ・力オリ。

次にテツトへ目を向ける。

テツトは淡々と先程の戦闘映像を凝視していた……。

黙々と戦闘を振り返り、今後の戦闘の為にも分析を行っていた。

ああ、こちらですか……と、言わんばかりの呆れた反応を示す女子3人。

「な、何やってんの、アレ？」

唯一事情の知らないカオリは素朴な疑問を呟く。

「ロボットの設計……かな？ 次のロボットコンテストの……」

ミヤは何とかそれっぽい言い訳を捻出。苦笑いを交え誤魔化しに入った。

「ああ、成程ね。連覇を狙うって事ね」

言われてみればそうだな。と、しつくり頷くカオリ。

——今日は初陣も終わった事だし、後はゆったりするつもりであった……。

……しかし、そうもいかなかった。

テツトのSボードがエマーゲンシーコールを受ける。

他、4人のモノも鳴り始める。

ヨシヒロ、ノリカ、ミヤは即座にテーブルへ集合。

「む、ステルスカメラが察知したか……」

テツトはステルス衛星カメラから送られて来た映像を見やる。

すると先程、テレビを賑わせた深大寺の部下のエスパー集団の間が出現し、パーティ会場らしき所で大暴れし出すではないか。

「エスパーなら何やつても許される世界になるのも時間の問題だ！」

「俺達の恐ろしさを教えてやる！」

……と、盛大に鬱憤晴らしを始めた。

テーブルに集まり、その映像を見終えたテツト達5人。

「成程……。牽制といったところか……。ヤツラの行動原理を察するにこのパーティ会場は丁度ボンボン共の集まりなんだろう」

「ちょっと、ヤバいじゃんこれ！」

「今すぐ止めにいこうぜ！」

ノリカとコウスケは出勤を急かす。

真摯な表情で首肯するテツト。

「ああ。流石にこの場合はな……。行くぞ！」

司令塔の命令を受け、真摯な表情の4人は御意。各々のSボードを構え、操作すべく、手を動かす。

「……にしても、何かシニールよねコレ。遠隔操作式だから移動しなくていいから、こうなるんだけど……」

アクシオン創作物では一斉に駆け出すなどするのが通例。

ではあるが、この5人の持つTDには不要。

そのズレた行動な為、ノリ力は寒い笑いを浮かべてしまうのだった。

「シニール？ 便利と言え。便利と。こいつは都内限定でならどんなに離れていても遠隔操作は可能だからな」

テットは厳然と訂正を述べる。

「はいはい、そうですね」

苦笑いを交えノリ力は流れを濁す――。

―― 辺り一面に念力や火炎・電撃放射の、超能力が吹き荒れる。パーティー会場に破壊の嵐を巻き起こすエスパ―一味。

掌から火炎放射させて、狂乱的な笑いを上げる幹部。

外見的に地味でひ弱そうな男ばかりである。

「ヒヤッハッハハ！ 最高の気分だあ！ こうも、本格的な破壊が楽しいとは思わなかった！ 次は殺戮フェイズだぜっ！ 見せしめに数人ほどは殺しておかないとな！」

高級ドレスを着用した女性へ火炎弾を発射するエスパ―。

そこへ閃光の弾丸が乱入し、火炎弾を相殺する。

背筋がビクつき、反応するエスパ―一同。

一斉に向いた視線の先〃5つの機影・TDがあった！

「来たな！ TD！」

中央の青いTD・Cオライオンは一步步み、言葉を続ける。

「お前らとは直接会うのは初対面だな。なので、言っておく。俺達はお前達全てを否定しない。憎き相手を多少甚振るぐらいなら許容する」

「何……？」

「つまり、無闇な破壊・牽制活動は止めて貰おう」

エスパー一同は「ああ言ってるけど、どうする？」と、1か所に集まり、談合する。

信用出来ねーよ。

いやでも、あいつら、政治家をボコってるのを止めなかった実例があるぜ？

確かに……。

そうは言っても、俺らエスパーの楽園国家作りを邪魔する存在だ。戦うべきだろ。

それもそうだな。

ようし、殺ろうぜ？

……と、談合終了。

即座に5つの機影へ攻撃を開始！

Cオライオン、Lシュヴァリエ、Gバンディッタ、ウィザースロツト、エンゼクロスは戦闘態勢に入る。

それぞれ、同数ずつの敵と応戦開始！

「やれやれ、悲しいよ全く。彼らはチンケな鬱憤晴らし程度に留まっ
つてはくれないのか……」

迫り来る適を相手に、Lシュヴァリエは剣術を駆使！

次々とコンバートスラッシュで敵をデータへ誘った。

……しかし、真横のエスパーが姿を消し、騎士TDの真正面へ移動。真正面から透明化したエスパーが襲来！

Lシュヴァリエ、額の左端から左斜め上へ伸びているカッターの
ようなツノが折り畳まれていき、フェイスを覆う甲冑的マスクバイ
ザーとなる。

Cオライオンのゴーグル同様、これにより、見えないものを可視
化させる！

「学習が足りないなあ。味方から聴かなかったのかい？ サーチン

グ機能を！」

キヤリバーで敵の透明の拳を受け止め、その隙に脚部のマニユピユレーターを広げ、ビームソードを発生！

突っ込んできた相手を下から弧を描くように、コンバートスラッシュした！

「ずうおりやああっ！」

Gバンディッタは右腕のワイヤーで繋がれた腕部アンカーを発射！その攻撃は残念ながら回避される。

続いてもう片腕のアンカーを放つ。

こちらも並外れたジャンプにより、かわされる。

「おし！ 掛った！」

上空へ飛んだ相手に応じ、バズーカの向きを上30度に修正。コンバートバズーカ、発射！！

極太の光の一閃にエスパー勢は飲み込まれ、0と1になった！Wアンカーの陽動作戦成功である。

両腕を突き出すウィザースロット！

腕シリンダーが回転し、ガトリングモードに切り替える。

腕周りの裾リングからビームガトリングが掃射される！

攻撃を喰らい、吹っ飛ばされていくエスパー戦闘兵一同。

「テレポーテーションして囲むぞ！」

「おう！」

現場リーダーエスパーの指示の下、一同は姿を消し、ウィザースロットの周辺に出現した。

「喰らえ！」

囲んだ6人の超能力者は火炎・電撃をパールパープルの魔術師口ポへ放射！

「ふふん、喰らわないっての！ カードビットッ！」

脚部から扇状のカードケースがオープン！ カードビットが発進

する！

それらは表面を向き、火炎と電撃の「盾」となった！

瞳孔を開き、衝撃に誘われるエスパー勢。

「んなつ！？ こいつは切り裂く武器だけじゃなかったのか！？」

「ふふん、その通りっ！」

ウィザースロットはジャンプし、エスパーの作った円から出る。

次いで、腕シリンダーを回し、今度はビームニードルを出現させる。

「はい、コンバースティング！」

電光の針に貫かれた標的はデータ化のプログラムを打ち込まれ、0と1に分解されていった！

唸り上げ、超能力者達5人はそれぞれ、蛇・牛・ゴリラ・豹・鷲になる。

ビースト化能力を発動させた！

5匹の動物は天使型TD・エンゼクロスへ飛び掛る！

足の裏と翼先端のブースター、噴出！

エンゼクロスは軽快な身のこなしで、回避していく。

回避出来るのはいいもの、ちょこまか動く相手に照準を定め難い状況でもあった。

「うーんと、こういう時は……！」

ミヤは策を閃き、キーボードを叩く。

脚部装甲に収納されてある、拘束サポートアイテム・リングビツトを発進させる！

捕獲を試みる！

巨大な輪っ渦が飛び込んでくる牛を通過させ、即座に直径を縮ませ。動きの鈍い牛をまずは拘束！ 続いてゴリラも同じように捕らえた！

……しかし、残る蛇、豹、鷲は素早しっこく、中々捕まらない。

——かに思えたが、何時の間にか3匹の真横を取ったエンゼク

ロスがアローユニットの弧〓弓部を前方へ倒し、シザーモードにして一気に3匹をガツシリ挟む！

そしてそのまま、ゼロ距離コンバートアローを贈呈した！！

「ふう……」

データコンバートされた相手を見て、ミヤは安堵の息を捨てた。

折り畳まれた砲身が広がっていく〓ショルダーマシンガン&レッグミドルライフルの銃身が光の反射で輝く。

更に、両手に構えるマグナム&胸部ベルト状のライフルが前方へ立ち上がる！

「一斉掃射だ！」

Cオライオンは身に纏う銃器を展開し、一斉にビーム弾を射出！
対峙するエスパー達へ放った！

もはや、逃げ道の無い程、空間を埋め尽くす乱射であった。

それはまるで、虚空に星座を描くかのような広大なショット……。抵抗する間もなく、標的はデータへ“変換”されていくのであった。

——戦闘終了である。5機は淡々と姿を消した。

メイドカフェ店内で、先程の戦闘を終え、一息を落とすテット以外の4人。

「あゝ疲れた」

「まさか、連戦するとは思わなかったよ俺
げっそりとするノリカとコウスケ。

顔が一瞬、老化する程に。

「そうだな。それだけに、回復は小ママにな」

テットはSボードの裏蓋を外し、単3電池2本を新しいものに交換し、Sボードを操作。

オートリカバリーを選択し、画面を「NOW RECOVERING」と表示させる。

「それもそうだねえ。んじゃ、僕も」

ヨシヒロ、ミヤはテットと同様、バツテリー交換をし、各々のデータとなっている状態の愛機の回復を実行。

「じーっ……」

と、メイド店員、カオリがジトつと5人の所作を眺める。

その事に気付き、テット以外の4人は仰天。

「わああっ！ カ、カオリ！？」

「ノリカァ、あんたら何やってんの？」

「ゲ、ゲームだよ……5人揃って戦うヤツ……」

苦し紛れに、ミヤはゲームだと言い張る。

コウスケも焦燥しながら、作り笑顔で頷く。

「そうそう、ゲーム、ゲーム！」

「僕達の、マイブームなのさっ！」

無駄に爽やかなイケメンスマイルを送るヨシヒロ。

「ふうん、ま、いいけど、あくまでココはメイドカフェ、メイドで楽しんで下さいね、ご主人様♪」

快活な表情でウインクし、カオリはテーブルの空食器をお盆に乗せ、調理場へと、去って行った。

マイペースにSボードで、今回のまた新たな戦闘を振り返るテットを余所に、4人は「誤魔化せたか……」と、萎むように脱力するのだった。

EP・03 〈エリートデストロイヤー〉

EP・03 《エリートデストロイヤー》

01

旧校舎階段最上階にて、ラジカセからダンスミュージックが響く。ノリカの指示の下、ヨシヒロとミヤがエアロビダンスをしていた。

「はいー、ワンツー、ワンツー……。って、相馬君あんたはテンポ早過ぎ！」

ノリカはヨシヒロを指差し、一旦ダンスを止めた。

「うゝむ、難しいねえダンスって。イケメンヒーローになる為に必要だと思い、楠さんに伝授して貰っているけど……。ダンス……。実に奥深い」

一方で、ミヤは息を切らし、目を回している。

「で、ミヤは所々遅い。一定のリズムでやらないとダイエットにならないよっ」

「う、うん……」

階段に座り、ヨシヒロ、ノリカ、ミヤは汗ばんだ肌をタオルで拭く。

「……にしても、凄いねノリカちゃん、元子役バックダンサーだけの事はあるよお」

「色々あつて中学で辞めたけどね。でも、せっかく習ったモンだからたまには有効活用しないと、って感じ？」

ノリカはニヤハハと笑い、自身の巨乳を突き上げ、モデルポーズを決める。

——賑わう3人の一方で、テツトは淡々を思索にのめりこんでいる。

テットはデータコンバートしたエスパーを拘留させているメモリーカードを凝視していた。

残る敵は3分の2以上。

まだまだ多い。どうしたものか……？

現状、情報面・固体のスペックはこちらが上。

だが、手数の方の多さと何か隠し持っていてそうなDr毒島に警戒をしない訳にはいかなかった。

彼は幼き頃からマイペースで孤高な人間である。

基本的に並ぶ事も、他人と同じ事をする事も、他人に仕切られる事も、他人といざこざで纏れる事も、他人に迷惑掛ける&掛けられる事も嫌う。

彼は誰かの影響を受け、新しく何かを始める事は無い。

結果として、自分で選んだ事しかない。

機械工作も自身が小学生の時、ぶらりと立ち寄った模型店で、自分で見つけた趣味である。

親や友人・知人の薦めなどではない。

ロボットコンテストも単純に勝算がある上で面白そうだからやった事だ。

そんな彼は何より他人にペースを狂わされるのを嫌う。

故に仕切る。故により合理的な手段で厄介事を駆除する性分なのである。

そんな彼は何度も、より優れた戦略・解決手段をすべく、思案を重ねるのだった……。

旧校舍階段の、テットら4人より少し下。

コウスケは1人、携帯電話を使用していた。

コウスケのサッカー部仲間だったヒデノリはエスパーテロを行っていた日以来、連絡も取れず、学校に来ていない。

何度も連絡しても通じない……コウスケは携帯電話を閉じ、落胆した。

「またかあ。ヒデノリの奴、家にも居ないとはな。ホント、あいつどうしてんだろ？」

コウスケはヒデノリとの出会いを回想し始めた。

あれは中学1年時、サッカー部新入部員が揃って自己紹介する時の事だ。

「三島ヒデノリっす！ 野望は親にスポーツ叩き込まただけの糞スポーツエリート共をブツ潰してプロサッカー選手になる事っす！」

2年・3年の先輩陣もコウスケら他1年も、顧問もその突飛な言葉に目を丸くした。

「ほう、スゲー野望じゃねえか。理由は何だよ？ テメエをそこまです掻き立てる理由」

3年のキャプテン、村田がヒデノリを面白く思い、半笑いで訊ねた。

「それは……このままでは夢がないからっすよ。だって、悲しいじゃないっすか！ 親にスポーツ叩き込まれないとスポーツ選手にならないなんて……。だから、親に英才教育を受けていない人間がプロになって夢を与えなきゃいけないと思うんっすよ！」

コウスケは心臓から衝撃を受けた。

ヒデノリの意見・信念に感銘を受けたのである。

「はあ、そりや凄いな。……でも、無理だな。俺ら、超弱小だし」

「そうそう、だってスポーツエリートじゃねえもん」

キャプテンの村田をはじめとする先輩陣が失笑し、愚かな夢想だと告げる。

「そうかもしれないけど、悔しくないんっすか！？」

ヒデノリは腹から声を張り上げた。

「そりや、悔しくないと言ったらウソになるけどさ……。無理なモンは無理だろ。現実見ろ」

村田は本心と事実の狭間の結論をさらっと述べる。
複雑な空気が周辺に渦巻いてしまう。

「お、俺も……。エリート共に一矢報いたい！ 親の力を借りて勝つ

セコイ奴に勝利する爽快感を味わってみたい……。マンガみたいにさ」

ヒデノリの隣のコウスケが声を震わせながらも迎合。

「おお！ 本当か！」

ヒデノリは歓喜興奮し、コウスケと勝手に握手した。

「ああ。スポーツは正々堂々であるべきだかな！ 英才教育なんか打ち砕こうぜ！」

それ以降、打倒スポーツエリートを目指し、コウスケとヒデノリはサッカー練習に明け暮れた。

今更努力したところで、追いつけるかは分らない。

だが、次第とヒデノリのただならぬ執念に圧倒され、コウスケ以外も触発されて、打倒スポーツエリートへ燃えるサッカー部の面々。あらゆる時間を割いてサッカースキルの研鑽に研鑽を重ねた。

スポーツエリートに惨敗を喫し、自分らの努力が嘲笑されるまでは……。

——あれは聖アスリート学園との練習試合の事である。

試合は前半の時点で0対3と圧倒されるコウスケ達、岩鉄高校サッカー部。

コウスケ・ヒデノリ達はそれでも、諦めず挑んだ！

自分達だって一生懸命キツツイ練習に打ち込み、試合に臨んだ故に。

そして何より恵まれた環境で努力出来た憎たらしいスポーツエリートに一矢報いたくて、最後まで足掻いた。

……しかし、残念ながら少年漫画的な逆転展開はなく、リードを更に広げられ、0対4で無念の惨敗となった。

拳句の果てには相手チームの1人、一段と憎たらしい顔をした球城ダイスケから屈辱的な言葉を送られた。

「なあ、お前ら、この試合で俺らからボール取ったこと、あったっけ？」

ダイスケを中心としたこの試合の勝者にして、全員親に英才教育を施されたサッカーエリート一同は侮蔑嘲笑を負け犬達に贈呈。

「んぷつくくく！ 取った事、ねーよなあ！ コールドゲームだったモンなあ」

「つか、お前等体デカイだけの小学生じゃねえの？ レベル低過ぎ！」

「いやそれ、小学生に失礼だろ。あ、間違えた俺らのようなスポーツエリートの小学生に対してだったわ。ヒヤッハッハ！」

他人を馬鹿にする事に長けた一品の顔がそこに羅列されていた。

——流石にこの一言には憎悪を抱かざるを得なかったヒデノリ達だった……。

「このヤロ……。サッカー教えてくれる親の元に生れただけのクソが……」

「ハン！ 運も実力のうちなんだよ！ 生まれながらのま・け・い・ぬ！」

中央のダイスケが悪態一杯の顔でヒデノリを更に煽る。

「そうそう、クズの親はクズ！ 科学的に証明された遺伝だよな」

残りの面々も憎たらしさトップ争いに食い込める顔で侮蔑嘲笑の嵐を起こす……。

——翌日の教室で愚痴るヒデノリ。

「あゝ、クソムカつくぜ！ 特にあの球城ダイスケって奴！ 顔も言う事も全部カンに障りやがる！」

コウスケは欠伸をしながら、机上のサッカー雑誌を手取る。

球城ダイスケが『プロ入り間違いなし！ 元サッカー選手球城ダイサクの息子、唯我独尊のサラブレット、球城ダイスケ！』と大きな文字が羅列されたページを捲った。

「あいつ、親がプロだもんなあ。上手くて当たり前かあ。お、次のページもこいつの話か」

「何！？ コウスケ、どんな話だ？」

眉をうねらせ、詠み進めるコウスケ。

「……何々？ 父・ダイサクは語る。『僕はダイスケにサッカーを押し付けてはいません。僕が現役で活躍する姿を見て、3歳のダイスケはサッカー選手になりたいと思ってくれたようです。なので、そんな息子に應えるべく、自分がサッカーで培った全てを託そうと思いました。とは言っても、基本的な努力方法を教えただけなのですけどね（笑）。ですが、そのお陰か、サッカーだけでなく、学校の勉強も非常に優秀な成績を残してくれています。親としてこれほど嬉しい事はありませんね』……か……」

ヒデノリ、髪の毛を乱雑に掻き、憤慨を爆発させた。

「カツ、いいご身分だ！ 運良く教育上手な親の元に生れただけのクセしてよぉ」

愚痴々と吐露するヒデノリに、コウスケは苦笑いで諭す。

「まあまあ、ヒデノリ、その辺にしておこうぜ」

「わーってるよ。けど、納得いかねえ。スポーツを知り、努力するチャンスが不平等なのはどうかと思うっての」

「まあ、極端な経験差があるなんて、競技としてちよつとな……。つか、そもそもスポーツって気楽に楽しむモンじゃねえの？ 大人の英才教育介入自体が邪魔な気がする」

「だろ？ その上、エリートじゃないとプロになれないってのも、虚しいんだよな」

「ハハッ、まだ、あいつら全員がプロになるって決まった訳じゃないじゃん」

「コウスケ……。そうだけどさ」

「それに、不安定で寿命の短いサッカー選手になっても苦しいだけだつて。親にサッカー選手になるようプログラムされたサッカーエリートロボの哀れな末路を見て、馬鹿にしとこうじゃん？ そう思ってた方が気分いいって！」

コウスケはカラ元気な感じの笑顔を作った。

本人なりにヒデノリを励ましているのであらう。

しかし、肝心のヒデノリは釈然としない顔を形成していた……。

回想を終了したコウスケはハツとなる。

「……、と気になったコウスケはSボードが保存している全てのエスパー連中の映像を見てみた。

まじまじと凝視し、改めて探った……。

それは、まるで難易度の高いキャラクター探しゲームのようであった。

暫し、その地味な作業を続けるコウスケ……。

額から汗が一滴、流れ落ちた。

「……マジかよ……」

予想は的中。

友は今迄戦場に出向いていないだけで、RPの談合には参加していた。

「……なあ皆、ちょっと！」

コウスケは周辺に居るテット達4人を呼び、4人のSボードへ映像をアップリンクさせた。

——Dr毒島の研究室のトレーニングルームを映した映像。

そこでヒデノリが実にいきいきとした顔で、肉体武器化の超能力訓練を行っていた。

ヒデノリの笑顔は非常に真っ直ぐに、歪んでいた。

「……成程、スポーツエリートに対する妬みから、あちらに入ったかもしれない……と」

テットが纏めた要約に首肯するコウスケ。

「ああ。あいつ、スнгеエ悔しがってたからなあ。それに、幼い時に父親を亡くして、父親とキャッチボールしているような奴、羨んでいたらしいから」

そよ風のような溜め息を落とすヨシヒロ。

「ま、ここ最近スポーツの上手い奴及び、プロスポーツ選手になるのは親に英才教育を施されたスポーツエリートばかりらしいからね……うーん、悲しいねえ。先鋭化する代わりに公平性が失われるとは……」

「へえー、スポーツ界もそうなってたんだあ。何か世襲政治家みたいだねえ、そういうの」

ノリ力はそう、感想を呟き、飄々と紙コップジュースを飲んだ。

「英才教育受けりゃ誰でもなれる訳じゃないけど、まず必要な条件つつーかな」

「ふうん、そうなんだ……」

呆気になるミヤ。ミヤは複雑な心境になった。

恵まれた環境・先鋭化された環境の影響を受け、大きな結果を残す人間の話はよく聞く。

自分も、科学者の孫と言う、珍しい環境に生まれた存在である。

……しかし、ミヤ自身は祖父の影響を受け、工学・科学に興味を持つ事はなく、それどころか、理系科目・機械の苦手な少女として育った。

他の人は祖先・環境の影響を受けたりしているのに、自分は一体何なのだろう？

祖父の遺志を継ぐ、技術力の高い少女になるべきだったのだろうか？

それとも、科学者の血縁に持たなかった人間に対し、優位に立つのは卑怯なのでならない方が良かったのだろうか？

今更考えても不毛ながらも、ミヤは1人、悶々とするのだった。

——その時である。

センサーキャッチ！ エスパーが出現し、争いを始めたお知らせ。

テット達5人はSボードに目をやり、示された場所を把握する。

「場所は……む？」

テットが、その続きを言おうとした時、コウスケが先にその内容を叫んだ。

「聖アスリート学園だっ！？ あっこは俺達サッカー部が最もポコボコにやれたトコじゃなか！」

「確か、スポーツ選手教育に特化した学校だったっけ？」

ノリカは記憶を巡らし、呟く。

「よし、じゃ早速……」

緊張し、出撃を試みるコウスケ。

「……いや、待て」

「テット、何でだよ！」

「この映像、よく見てみる……。試合しているだけだ……」

コウスケ達4人はきょとなり、テットの言葉を確かめるべく、再び目を液晶画面に向けてみた。

02

サッカーグラウンドにて、テットの言う通り、エスパテロ組織の人間11人が聖アスリート学園のサッカー部1軍と試合を繰り広げていた。

——確かに試合と言えば試合である。

しかし、現在の得点は、エスパチーム〃10点、聖アスリート学園サッカー部〃0点という、通常ではあり得ない点差……。

ゲーム展開はエスパ側が圧倒的。

彼らはサッカーボールごとテレポーションして、ゴール手前に現われ、ボールをゴールネットに叩き込む・サッカーボールを念力で操り、相手とボールを遠ざけるなどと、トンデモないプレーをしていた。

要するに超能力を駆使して反則的に点を稼いでいるのだった。

「くっそお……。超能力なんて無茶苦茶だぁ……」

元サッカー選手息子で、プロサッカー選手間違いないと謳われたこの男、球城ダイスケは息切れを起こし、滅入っていた。

通常なら、相手を息切れにさせて、自分は涼しい顔をして勝利を飾るというのに、真逆の立場を味わっていた。

「どうだ！？ 一点も取れない処か、試合中ボールに触れられない気分はよお？」

悠々とドリブルをするヒデノリが悪態を贈呈し、ダイスケを引き離した。

目が氷結するダイスケ……自分らがやっていた事をやられる立場に立たされるとは……。

その毒々しい言葉を見舞った相手を見やる。

本人は負け犬の一匹如き覚えるような程、律儀では無い。

故に、ダイスケ自身はヒデノリの事など、覚えていない。

だが、平凡な環境に生まれ、特化したサッカー教育を受けられなかった者なのは分かる。

そんな雑兵風情が超能力を得て、自分達を完全駆逐する……。

「ざけんな！ スポーツエリートであるこの俺様達がお前らクズなんかに！」

不条理な試合展開に苛立つダイスケは奮起！

ドリブルするヒデノリを追走！

ダイスケは併走する仲間2人と、3方向同時スライディングで奪おうと突っ込む！

が、相手の超能力により、ボールが突如上昇し、ダイスケは無駄に滑るだけに終わった。

ダイスケが立ち上がるとしたその時！

……には、既に11点目が決められてしまっていた。

黙々とこのコールドゲームを視聴するテット達5人。

「やっぱり来ていたか……。ヒデノリ」

厳然と眉毛をV字にするコウスケ。

「ハハッ、……にしても、凄いなこれ。まるで、大人が子供を甚振っているようだよ」

美男子・ヨシヒロは爽やかな苦笑いを溢した。

ノリカは長い睫毛の瞳でぼんやりとコールドゲームを観戦しながら、コウスケに問う。

「ねえ、これってヒドイものなの？」

「ヒドイ処か、ファンタジーだよ。サッカーは大抵1〜3点取り合っ
て決着するモンだ」

「ふうん。無理ゲーって、奴？ イヤなものねえ……」

ノリカのその言葉はこっそりと子役ダンサー時代の経験も含まれていた……。

コウスケは再度、コールドゲームの映像を見やる。

超能力で相手をあしらい、不気味な笑顔でボールシュートを決めるヒデノリの映像……。

「ヒデノリ……。お前、こんな事やって楽しいのか……？」

コウスケは眉間を狭め、険しい表情で黙り込む。

一方的な試合はその後も続いた。

もはや、ゴールはボールのサンドバック状態。

相手・聖アスリート学園側はのらりくらり走り回り、疲労するだけ。

一瞬とて、相手のボールを奪えない有様。

サッカーエリート連中に徹底的に屈辱を絶望・無力感を与え、ヒデノリ達エスパイレブンは勝利を飾った。

15対0の大大大圧勝であつた！

観客という形になっているベンチの控え選手達はひそひそと「ザマアみる、レギュラーのカス共」と嘲笑に耽っていた。

「っだーーーーーっ！」

人一倍、己をサッカーエリートと自負するダイスケは怒り狂い、拳を地面に叩き落とした。

「くそ！ くそ！ くそ！ くそ！ くそ！ くそ！ くそ！ くそ！ くそ！
そ！ あり得ねえ！ 相手がエスパーではあっても、この俺様達が……親に英才教育を施された俺様達サッカーエリートが負けるだとおっ！！？」

ダイスケに呼応され、憤慨に悶えるサッカーエリートの面々。
当然である。誇り・自信……今迄積み上げたものを崩壊させられたのだから。

そんなダイスケ達を人型の影が覆う。

……勝者、エスパーチームの一同である。

嘲笑堪えた、爆発しそうな憎たらしい顔のヒデノリ達が膝を地に着けた相手を見下す。

ヒデノリは以前自分らを侮辱した相手、球城ダイスケらを、ある言葉が悪辣な笑みを添えて、プレゼントする。

「なあ、お前ら、この試合で俺らからボール取ったこと、あったっけ？ ……あ！ ゴメン、無かったよなあ。わざわざ聞いてゴメンなあ。ハハハハッ！」

ヒデノリ達は馬鹿笑いを撒き散らし、更なる屈辱・不快感を送信すると、食って掛かるかのように、ダイスケ達は吼えた。

「ざけんなクソがあ！ 超能力使えば勝てるの決まってるんだろこのタコ！」

「そうだそうだ！ 卑怯過ぎんだよ！」

「正々堂々と戦えー！ インチキ軍団が！」

聖アスリート学園サッカー部の面々は揃って、猛抗議に出た！

「はあ！？ 何言ってるんのお前ら。テレポーテーションやサイコキネシスを使っちゃいけないルールなんて無いぜえ？」

冷淡な顔を近づけ、刺殺するかのようにヒデノリはダイスケに反論を放射。

確かにその通りではあるが……。と、口籠る一同。

そうしている間に、ヒデノリに次の言葉「辛辣なトドメの一撃が強襲！」

「つーか、お前らだけには言われたくないし。お前らだって卑怯って言えば卑怯だろ？ 何せ、サッカーの英才教育を施して貰える環境に運よく生れたからなあ」

「そうそう、正々堂々するんなら、スポーツ始める時や教育環境が同じじゃないとなあ」

「はいはい、ブーメラン、ブーメラン！」

「今月の“お前が言うな”大賞受賞作だなこりゃ、クハハハハッ！」

最後に、中央のヒデノリが、一歩前に出て、惨めに膝を突いているダイスケの胸倉を掴み、捻る！

咄嗟の事な為、ダイスケは怯え、ビクつく。

寧猛な眼をしたヒデノリらに……。

「俺達はお前らと違い、スポーツを知るのが遅かった……。スポーツをみっちり指導してくれる人と出会えなかった……。何もかも不利な条件……。分かったか！ 努力でどうにも出来ない格差の悲惨さをなあ！」

——ヒデノリ達は無念の日々を思い起こす。

幼少期「父親とスポーツ出来る環境の同年代の少年を見て、指を咥えていた事。」

少年期「努力しても追いつけない。スポーツエリート相手に完敗される日々。」

青少年期「スポーツエリートに負けたままでは悔しいので、何度も挑むが、敗退する日々。」

……特にヒデノリは幼い時に父を亡くしている為、余計に羨ましい・妬ましいのだった。

今、そんなヒデノリがダイスケに頭突きをかまし、掴んだ胸倉が

らダイスケを投げ飛ばす！

ダイスケは地面に叩き落された！

痛みに唸りつも、再起していくダイスケ……。

そこへ、ダイスケ達を囲み、木霊する侮蔑嘲笑のラッシュが飛び交う。

人生最初で最大の屈辱を痛感するダイスケ達であった。

「ち、ちきしょおお……」

喉を潰すかのように、屈辱にのたうち回るダイスケ達……。

ヒデノリ達エスパーは満面で、悪辣で、正直な、歪んだ笑顔に溢れていた。

……その時である。

「お前達、それで満足したか？」

響く電子音声。

「こ、これはまさか……」

「深大寺さん達が言ってた……」

警戒／身構えるエスパーアスリートの衆。

味方により、この声の正体は把握している。

予想通り、Cオライオン、Gバンディッタ、Lシュヴァリエ、ウイザースロット、エンゼクロスが出現！ 5機は燦然と並び立った！

「来たか……TD」

ヒデノリは眉を捻り、ファイティングポーズを形成した。

03

対峙する5つのTDと11人の超能力者。

中央の緑のマシン、Gバンディッタが一步前に出る。

「楽しかったか？ お前ら。スポーツエリートをボコボコにして」

Gバンディッタを通して、コウスケはエスパー達〃ヒデノリ達に訊きたい事があった。

だから、前以てテット達に伝え、こうして主張を始めた。

ヒデノリ達はニタリと邪悪な笑顔で応じる。

「おう！ 楽しかったぜえ！？ そつれがどうかしたかあ？」

「これでもう、満足出来たか……？」

「満足？ 冗談だろ？ まだ足りネエよ！」

ヒデノリは歪んだ顔で空間へ叫んだ！

「ワリイけどよあ。この程度じゃ全然気が晴れないんだよ！」

「そつだ！ そつだ！ 俺らが受けた怒りはこの程度で治まらねえ！」

エスパ―チーム11人は不平不満を吐き散らす。

「そつだなあ。こいつらには2度とスポ―ツ出来な身体にでもしないとなあ」

「そうそう、他人がスポ―ツ出来るのに、自分は出来ない悔しさ位、与えねーと！」

「リハビリさせて、その間スポ―ツ出来ない悔しさとブランクを与えるつても面白れえな。徹底的に凋落させてやる！」

ヒデノリはくしゃくしゃに歪んだ笑顔で、鼻を突き上げた。

「つー訳で、足の1本・2本折らせて貰うぜ！」

エスパ―イレブンはダイスケ達目掛け、突進！ 魔手を伸ばす！

ヒデノリは右腕をキャノン砲に変換。エネルギー弾を放射する。

「う、うわあああああつ！」

ダイスケ達スポ―ツエリート連中は怖れおののき、咄嗟に両腕をクロスし、身構える。

「チツ……」

Ｃオライオン、早撃ちガンマンの如く、瞬時にビームマグナムを構え、発砲。

ビーム弾がダイスケ達へ襲来するエネルギー弾から真つ向激突し、相殺させた。

「やはりこうなったか……。柄にもない実験などするものではないな」

「全くだよ」

隣にレシュヴァリエらが並ぶ。

「悪は所詮悪。改心する事などあり得ないのさ。あるとしたら、元来善人な存在が嫌々悪事をやっているような場合のみさ」

ヨシヒロはレシュヴァリエを通し、自論を述べた。

「……そうだな。よし、戦闘だ！ 流石に相手にとって取り返しの利かない致命傷を与える事は認められん！」

テツトの指示の下、5機のTDは散開！

今度こそ戦線に乗り出す！

04

「うおりゃあ！」

コウスケの操作により、Gバンディッタは腕部に内蔵されたアンカーを発射！

ヒデノリの右腕にアンカーのワイヤーが巻き付き、捉えた！

そのまま、ワイヤーを引き戻し、ヒデノリを引き寄せるメタリックグリーン製の海賊TD。

「く、このっ！」

ヒデノリは左腕を突き出し、腕を日本刀に変身させる！

鋭利な刃と化した腕で、ワイヤーを切り落とす！

が、これもGバンディッタ「コウスケの計算のうち。既に必要なまでに接近していたヒデノリの両脚を自身のから伸びたモノ」アリゲーターハングで掴み、両手でヒデノリの両腕を掴み、押さえつけた！

「なあ！」

「何だよ！」

「お前、さっきの試合、楽しかったか？ あんな勝ち方して楽しかったか！？」

Gバンディッタは真摯な眼差しで、相手に疑問を投げた。

「楽しかったよ！ 今迄勝てなかった相手をボコボコに出来たんだ！ 楽しくない訳がねえ！」

「……そっか。そっだよなあ」

「だろ？」

「……でもなあ」

コウスケはわなわなと齒軋りをする。

「んあ？」

「ずっとそんな勝利ばっかだとどうだよ……？ 飽きて来ねえか？

競技は正々堂々同じ条件でやるべきものじゃねえのかよ！」

「……！」

「他人にやられて嫌な事やってんじゃねえよ！ お前、憎んでる相手と同類になつてんぞ！」

コウスケ、キーボードを叩きながら思いの丈をぶつける！

痛烈な針を受け、ヒデノリは黙り込む……。

エンゼクロスはアクロバティックな空中浮遊をしながら、エスパ―相手にヒット＆アウエーな攻撃を繰り返していた。

「くっそお！ 邪魔すんなゴルア！」

石化Ⅱゴーレム形態となり、タツクルしに来る敵勢。

華奢なボディのエンゼクロスはブースターを噴出させ、∞字を描くように回避。

石化している一同は互いにぶつかり、地面に転落。

ミヤは非常に困った顔をしていた。

「あのー、お言葉なのですがあー、皆が皆、親の影響を受けて、技術を施される訳ではないんじゃない？……？」

科学者の孫娘ではあるが、全く科学的な知識も技術もない少女・科学へ興味を持つ事の無かった少女は疑問を投げかけてみた。

「はあ！？ 何が言いたいんだテメエ！」

「いや……その、恵まれた環境にいるからと言って、優秀な人間になるとは限らないと言いますか……。その……結局はその人次第と

言いますか……」

「だから何だ！」

「恵まれたエリートが嫌いな感情は変わんねーよ！」

「そうだ！ そうだ！ 恵まれた環境の奴がイイ思っている限り、俺達は不平を言い続ける！」

聞く耳持たず。鉾物と化した自身らの肉体の如く、エンゼクロスの一論を弾く！

岩石人間達は攻撃を再開した！

執拗なまでのタツクル・突進のラッシュ！

「あゝん、この人らと会話出来なゝい！」

ミヤ、涙目になるも、現在は戦闘中。

即、戦闘に集中し直す。

「うゝん、しょうがないなあ……」

エンゼクロスの腰から伸びたウイングのハッチが開き、超薄型で細長いミサイルが露出！

それらが発射される！

これらミサイルはホーミング機能を持ち、センサーが認識した標的〃岩石人間と化した異能者を容赦なく爆撃！

激しく飛び交う後、巨大な爆煙が散らばった。

……煙が退いていく。

その中には人間の姿に解除され、気絶しているエスパーの面々が。まさに恰好の餌食でいる状態。

輝く電光の弓矢！

エンゼクロスはトドメのコンバートアローを放った！

全ての敵を射抜き終え、パールホワイトの天使型TDは地面にスツと降りた。

「うゝん、そんなにスポーツ選手になりたかったのかな、この人ら

……。他に夢、無いのかな……？」

ミヤはエンゼロスを通して、素朴な疑問を天へ飛ばした。

反って来る事なき、疑問を……。

Cオライオン、Lシュヴァリエ、ウィザースロットはそれぞれ背中を合わせ、自分達を囲むエスパー達に身構える。

「にしても、凄い殺気ね……。いやあ、圧倒されちゃうわあ。」

「悲しいものだよ全く……。戦つても、彼らの怒りを消すまでのことは出来ない……。ヒーロー番組みたく、ハッピーエンドに出来るかなこの一連は……?」

ノリカとヨシヒロは只ならぬ殺気・怨念に、苦笑いながらも圧倒される。

テットだけは涼しい顔で策を思案……。

「よし、一気にデータコンバートだ！ フォーメーション13!」

「OKえ〜!」

「フフ、あれだね。了解だよ」

Cオライオンはそのまま待機し、Lシュヴァリエとウィザースロットは正反対方向に駆け出す！

ウィザースロットは走りながら脚部ハッチを開き、カードビット8枚を射出！

周囲へカードは広がって、飛び進む！

ちよこまか動き、敵の目を錯乱させる。

「くそ、鬱陶しいな……」

「潰せ！ 切り裂かれるぞ!」

うち1人の指示の下、腕をキャノン砲と化すエスパー連中はカードへ狙いを定め、発砲！

しかし、カードビットは表面で完全防御・側面で弾丸を両断したりと、駆逐し、そのまま敵勢へ突き進む！

「やられるかよ!」

気を昂ぶらせ、身構える超能力者ら。

「へ?」

……だったが、カードビットは自分達へ攻撃をするのではなく、通過するだけだった。

どういう事が理解出来ない一同。

呆気になる彼らは通り過ぎていったカードビットを「こいつ、何処へ行くんだ？」と、見送った。

そんな彼らの背後には既に閃光の弾丸「コンバートショット」が来客していた！

「あ……」

「クソ、フェイクカーッ！」

彼らが連携作戦だったと知った、その時には既に0と1に変換されていたのだった。

反対側の敵陣へ、果敢に飛び込む光の騎士「レシュヴァリエ」！

キャリバーを構え、斬りかかる！

……にしてはまだ距離がある。

攻撃体勢を取っているだけだと思ったエスパー連中だった。

……しかし、レシュヴァリエ「ヨシヒロはその予想に反する事をした。

柄の部分が倒れ、キャリバーの半分が上下反転し、刃の代わりにビームパネルもとい、銃口らしきものが露出！

まごう事なき銃「ライフルモード」へと変形した！

「拙い！ あいつ射撃するぞ！」

1人の超能力者が看破したのはいいものの、既にトリガーは絞られていた。

走りながら、射撃して来るレシュヴァリエ！

慌てて、逃げ惑う敵陣であった。

「やられっぱなしでいられるか！ 困むぞ！」

一同、テレポーションし、左右、後ろ、真上が無防備なメタリックシルバー&イエローの機影へ襲来する！

「フフ、来たね！」

レシュヴァリエは肩・脚のマニピュレーターを展開！

その先端からビームソードを噴き出す！

キャノン砲の腕から放たれる実弾を切り裂く！ 切り落とす！

「く、くそお……」

「ギミック、有り過ぎたるこいつら！」

「ああ、まだ使っていないギミックも沢山ある」

その声の発生主「テット」Cオライオンのハンドマグナム、ショルダーマシンガン、レッグミドルライフルの総射が容赦なく出向いて来た！

その乱射は虚空にオリオン座を描いた。

盛大に轟く銃撃音！

10秒後、その周辺には3機のTDとグラウンドに散らばっているメモリーカードのみが存在していた……。

05

戦闘も残すトコ、Gバンディッタとヒデノリの1戦のみ。

バズーカ砲撃や、アンカーを腕に固定したまま、ナックル攻撃をしたりと、近接戦闘と射撃の両方を行うGバンディッタ！

ヒデノリも左腕の電動ノコギリ、右腕のガトリングで接近戦&射撃線を披露。

Gバンディッタが鋭い碇部を向け、殴りかかる！

ヒデノリは寸前で回避！

ガトリングの雨を至近距離で放つ！

Gバンディッタ、上半身を横へ回し、潜水艦を着込んだような造形の胸部にある、前方中央のタービンを回転させる！

ストームを巻き起こし、相手のミサイルを吹き飛ばす！

そうしている間にヒデノリがGバンディッタの後ろへ回りこみ、電動ノコギリを振り被る！

唸りを上げ、回転する刃！

なんの！ と、Gバンディッタは開いている腕を突き出し、腕内のアンカーをシュート！

ヒデノリ諸共弾き飛ばす！

—— 激しくぶつかり合うGバンディッタとヒデノリ。

肉体強化はされているものの、サッカーの試合を、超能力を使つた後での戦闘。

流石に疲弊し、呼吸が荒くなる。

ヒデノリは地面を蹴り、後退。一旦停止し、荒い呼吸を整え、休息。

「ハア、ハア……」

Gバンディッタも有限な電力で動いているので、今後のペース・セービングを考え、相手と同様動きを止める。

「なあ、お前」

「何だよ、しつげえな」

「さっきの試合ははさあ……あれだよ、いい年した大人が子供を甚振つて勝ち誇つてるようなモンだぜ？ 流石にみつともねえだろ！」

目元を歪ませ、ヒデノリは斜め下へと唾棄する。

「……ああ、んな事は分かつてるよ！」

「……何？」

「でもなあ、あいつらスポーツエリートだつて、同じ事やってるじゃねえか！ 自分らより経験値や教育環境の劣る相手、フルボッコにしてドヤ顔かましてんじゃねえか！ それでいて、“僕は天才じゃありません。努力の人間です”とか、のたまいやがる！！」

「それは……」

「あいつらは他の人より小さい時から、しかも親に本格的なスポーツ教育されてるズルイ立場のクセしてよお！ スポーツマンなのに、正々堂々としてねえじゃねえか！ ムカツクぜ！」

「確かに正々堂々じゃないのは分かるけど……」

口籠るGバンディッタの電子音声……。

コウスケには言い返す言葉が見つからない。

「だからなあ！ 天罰を与えてやってんだよ！ 今迄優位な立場から弱者を虐げた悪人共にな！ その為にはなあ、同じ穴のムジナに

なるしかねんだよおー!!」

猛獣の如く顔を歪ませ、ヒデノリはGバンディッタの背後へテレポート!

「く……」

「終わりだあああああつ!!」

ヒデノリの腕に電動ノコギリが空中へ登り……振り下ろされた!!
「んなろつ!!」

即座にGバンディッタは地面を蹴り、身体を回転! スレスレで回避!

次いで、バズーカの砲身を棍棒のように使い、上から天誅を下した!

「ガハッ!!」

鈍重な鉄槌を受け、ヒデノリは地面に叩き落された!

Gバンディッタにコウスケはバズーカの砲身をヒデノリからゆつくりと放す。

「なあ……虚しただだって、圧倒的に勝ち続けたって。優位な立場の奴らには、そいつら同士で高レベルのゲームさせりゃいいじゃんか。住み分けつつーかさ」

柔和な口調で諭すGバンディッタを見上げるヒデノリ。

「お、お前……」

「でもって、プロの試合見て、『スポーツエリートの癖に情け無いぞ』とかって、文句言えばいいじゃんか。それも結構楽しいって……」

……

ヒデノリは俯き、表情が見えなくなる……。

「うるせえ……」

口籠り、唸るヒデノリ。

思わず、身構えるGバンディッタ。

「うるせー……っ!!!!」

空間に響き渡る怒号!

啞然。ピタリと動きを止めてしまふGバンディッタ。

「嫌だね！俺は……俺は優位な立場に立ち続けたいんだ！勝ち続けたいんだ！弱い奴をボコリ続けてえんだ！」

羅刹と化したヒデノリの顔は一瞥を吐き飛ばし、テレポーテーションで消え去った。

「ヒデノリ……」

Gバンディッタは荒れたグラウンドを見渡す。

ビームなどの焦げ跡……。所々に散在するクレーター。

何とも酷い光景。

これがサッカーグラウンドだったとは思えない程、混沌と化していた。

「……俺だって、スポーツエリートはズリイと思うけどさ……。でもさ……」

Gバンディッタの鋼の拳は握られた……。ゆっくりと、篤く。

そこへ新たな声が来客。

「あ、あのー」

ベンチに身を潜めていた控え選手らが恐る恐るCオライオンらに歩み寄る。

「んん？何か用か？」

「ぶつちやけ、『ザマア見ろ！』って思っちゃいました。球城らがボコられんのを見て」

「君達は……。もしかして、ココの控え選手かい？」

「Lシュヴァリエの問いに、正解を伝えるべく、控え選手達は首肯。はい……。球城らよりヘツタクソな連中つす。……でまあ、紹介

はそこまでで、本題なんですけど……。どうにかして英才教育、潰せないっすかね？」

「ん？何でお前らがそんな事を言うんだよ？球城らよりも下手つつつても、スポーツエリート校の生徒だろ、お前ら？」

Gバンディッタは素朴な疑問を投げかけた。

控え選手勢の中央の1人が息を呑み、頷く。

「……確かに、俺らは親に小さい時からスポーツ叩き込まれてこの

学校に通う事は出来たけど、そのスポーツエリート同士でも熾烈な競争があつて……。でまあ、俺らは負けて控え落ちつす。プロなんかマジ論外つす。だからその、今迄の事が全て無駄になつてんつすよね」

「何つーか、撃ち碎かれたんつすよ」

「もう、サッカー部辞めてリーマンになる為に勉強しようかつて程に」

「努力はしたんだ……。小学校上がる前から親父のスパルタ教育に嫌々ながらもずっと耐えて来たんだ。けど、弱い。……多分、才能の差なんだろうよ」

「いや、親の教育の巧みさかもな。如何に無理強いにならないようにサッカー選手になる努力を継続出来る人間に精神誘導する親の手腕つーか、教育者と相性良かった運つーか……」

5つのTDは黙々と彼らの涙ぐましい独白を聴き入る。

「だから、内心呪つちやつてんすよ。スポーツ選手になれないような奴にスポーツを叩き込んだ親を……」

「要するに英才教育なんか極一部の人間だけを勝者にするだけで、殆どがミスマッチな英才教育押し付けられて人生狂わされたり、英才教育を受けられなかった人間を不利にさせる酷いモノなんつすよ！ 殆どの人間を不幸にするだけなんつすよお……………」

辛気臭い顔を俯かせて、彼らは主張を終えた。

「あゝ、分かる、分かる。中途半端に入り込んでんじやうと余計に何とやらよねえ」

ウィザースロットⅡノリカも親に薦められたものⅡ子役バックダンサーで上手くいかなかった経験がある。その為、自分と重なる部分があり、しみじみと同意。

「……成程。ご尤もだな」

Cオライオン達は悲劇のサッカーエリート崩れ達の叫んだ苦悩を、しかと受け入れた。

「どうにかなんないつすかね……」

「例えば、気楽に子供だけで、大人の介入無くスポーツで遊んで、その中からプロになるっつーにするのは無理なんっすかね……。これなら、以前よりも文句はないし、辛い思いもしないと思うけど」
「残念だけど、今は……。無理だろうな。今は……」

Gバンディッタが弱弱しい声音でムナクソ悪い現状を洩々吐露。

「あんたらなら、何かスゴイ事出来そうだと思って、勝手に色々とブチ撒けました……。すみません」

「いや、気にするな。主張は自由だ」

Cオライオンはそう諭す。

「じゃあ……」

軽く頭を下げる一同はそう言い残し、控え選手もとい、英才教育に呪われし若人達はグラウンドを後にするのだった。

5機のTDの持ち主らは物思うところがあつて、沈黙を続けた……。

直後に雨が深々と降っていくにも関わらず。

6

その日の夜。鳳ラボラトリに寝泊ったノリカ・ミヤは寝室で睡眠していた。

ミヤは慎ましく縮こまって寝ているが、ノリカは布団を蹴り飛ばし、ネグリジエをだらしなく、着崩したまま身体をゴロゴロさせる。案の定、ごろりとベッドから落下。

その音を聞き付け、ヨシヒロが入室。

ドアの先〓床に寝そべるノリカを見て、爽やかに呆れた。

「やれやれ、またかぁ。はしたないレディーだなぁ……」

柔和な表情で彼女を抱え、ベッドへ戻そうと図るヨシヒロはノリカをお姫様抱っこする。

そのまま、ベッドへそつと戻す。

まさに貴公子的振る舞いであつた。

「むにやむにや……。恵まれた環境も、そうでない環境も全部ウザイっつーの！ んにやむにや……」

突如叫ぶ寝言に、ヨシヒロは軽い驚きを見せる。

「寝言か……。ダンスやっていて、辞めた過去と、スポーツエリートについての寝言かな？ 意外と話さないんだよねえ、この娘は自分の事を。被害者面したくないのかな？」

「うん、そうだよ」

ミヤがいつの間にか起きていた。

ヨシヒロはミヤの声に反応し、ミヤに視線を持つていく。

そつとヨシヒロの両手がノリカの身体に布団を被せた。

「おやおや、君の方が起きちゃとはね」

ヨシヒロとミヤはぼんやりと話をし始める。

「成程、金や権力を使って我が愛娘をゴリ押しする親を持つライバルに負けて、嫌気が差し、業界から去ったのか……」

「うん……。まあ、元々お母さんに薦められたものだったから、未練はないらしいけど」

ミヤの口より話されたノリカの過去にヨシヒロは感慨耽った。

「ナルホド。だから控え選手達に共感したのか……」

「うん……」

「ん？ でも、何故彼女は僕を止めないんだ？ 僕は彼女が去った業界へと進もうとしているというのに」

……ノリカは自分の話題で話をしている2人など気付かぬ程、呑気そうな顔で爆睡中。

「多分、他人の夢を奪う権利はないからじゃないかな？」

ミヤは難しい顔をして友の意図を推理してみた。

「へえ」。意外と気遣い屋さんだな。……さて、そろそろ退出するか。長居し過ぎたよ」

「お休み……」

柔和な笑顔でヨシヒロはそつとドアを閉め、女子2人の部屋から姿を消した。

同じ頃、テットとコウスケは近所の模型店で車型競技玩具・コンパクトフォーミュラーを店舗コースにて走らせていた。

テットの青いマシンとコウスケの緑のマシンがデッドヒートの真っ最中。

テットのマシンはコーナーやループなどのテクニカルな箇所で抜きん出る。

反対にコウスケのマシンはストレートで稼ぐ。

接戦の末、ミリ単位の差で青い方〓テットのフォーミュラーが先にゴールラインを通過。

テットのコンパクトフォーミュラー勝った。

「あちゃあ」。俺の負けかあ。今回のセッティング、自信あったんだけどなあ」

2人は各々のマシンを手に取り、走行スイッチをオフにした。

「フツ、技術力では負けられんさ」

「言うなあ。でも、これで俺の3勝5敗。ボロ負けじゃねえ。次は勝つぜ」

「ああ。楽しみだ……」

テットとコウスケは互いに爽やかな笑みを交わした。

2人はノリカが集めるまでは親しい訳でも不仲な訳でもない、只のクラスメイト程度の間柄だったが、共に戦う同士になった際、小学生時にコンパクトフォーミュラーに熱中した者同士であると判明以降、定期的に懐かしのマシンを掘り出し、遊んでいるのであった。本日は気晴らしが目的である。

テットとコウスケは自分のフォーミュラーをボックスへ収納し、もう1つのコースで繰り広げている若手サラリーマン同士のレースを観戦する。

赤いマシンと黒いマシンの戦い。

赤いマシンがスタートダッシュでリードする。

が、黒いマシンは加速。赤いマシンとの差を縮めていく……。

「よし、行けーっ！」

「そうはいくか！ 逃げ切れ！」

と、サラリーマン2人は童心に帰り、熱中・没頭。奏でられる走行音。抜きつ抜かれつの接戦。

その様子を穏やかな目で観戦するコウスケとテット。

「いいよなこういう、不公平の小さいゲームは」

「まあな」

が、コウスケはふと表情を物憂げにしてみた。

「……けど、何でスポーツや人生は不公平ありまくりなんだろうな……」

「ま、トイホビーやカードゲームと比べ、スポーツは生まれながらの体格なども付きまとうからな。その上、教育環境も大きく左右する。人生も同じで多種多様な環境」手持ちカードがあるからな……。全く、運任せの理不尽なゲームだ」

「ホントそれ、運が左右する事なんて納得し辛いんだよなあ」

テットはSボードを開き、現在時刻を確認。午後9時30分近くを回っていた。

「そろそろ帰るか」と、テットは帰りをコウスケへ仰いだ。
闇夜に照る街灯……。

テットとコウスケは無気力的に夜道を歩く。

「なあ、テット……。夜風って涼しいな……」

「まあな……。む！」

テットはあるものを発見し、すっと立ち止まる。コウスケも釣られて停止。

「おいおい、いきなりどうしたんだよ？」

「……あれを見る」

テットが放るように指差したその先を見やる2人……。

やや遠くより走って来る人間「ジャージ姿でランニング中の球城
ダイスケであった。

「球城ダイスケじゃねえか……」

だが、球城は水溜りに足を取られ、水を被って転倒。

しかし、即座にむくりと彼は立ち上がる。

「ふ、ふへへへ……」

球城は不気味に顔を歪ませ、嗤い出す。

「大した事はねえな。何せ俺はスポーツエリートだ。そうだ、エスパ―共は何だかんだでTDがそのうち全滅させる。俺がサッカー選手として輝く未来は揺るがねえんだ……」

すると、彼の腕時計のタイマーが鳴る。

その音を聞くや否や、拳動不審に球城は震え出す。

「くそっ！ タイマーが！ 時間通りにトレーニングメニューをこなせなかったあ！」

上下左右不気味に動き回る目に、何者かに操られたかのように不気味に踊る両手指。

「ヤベエ……。プロへと遠く墮落の第一歩じゃねえか。こうなったら、さっさとトレーニング再開だ！ 怠けた分、取り戻さねえと！ メディアや家族の期待に応えなければならねえんだ……。俺には、プロサッカー選手以外の人生は許されていないんだ！」

一心不乱に球城はぎこちない足取りで再度駆け出した。

そう、既にサッカー雑誌などで注目されている彼にサッカーから逃げる選択行動・サッカーで突出しない事など、もはや万死に値する話なのである。

進んでいくうち、やや遠方の工事中区域を横切る。

そこにあつた迂回指示を担うロボットと一瞬だけ重なった球城ダイスケ……。

そんな球城の姿を無言で見入っているテツトとコウスケ。

「何か……呪われてるって感じだったな……。今思えば、横柄な態度もプレッシャーの捌け口だったのかもな……」

「知ってるか？ 一流スポーツ選手の中で、勝利後に笑顔で緩む奴はそのうちの極僅からしい。球城の奴はどうだろうな……？」

「うへえ、まさにスポーツするだけのロボットだな。つか、英才教

育で幸せになっている奴って、誰なんだろうなホント……？」

物憂げな表情のテット・コウスケは再度歩き進み、夜道へ消え入った……。

「なあ、テット……。夜風って、寒いな……」

EP・04 〈デートとはいかない〉

EP・04 《デートとはいかない》

01

——廃工場。

いつもの通り、ラボには収まらない数のエスパーテロ集団・RP
がこの広い場所に屯していた。

「むむ……やはり、TD5機は厄介だな……」

額を指数本で支え、深大寺は頭を痛める。

「うつす。それに何だかんだで敵対する存在つす。ヤツラは」

唯一帰還したヒデノリは強く首肯した。

「ある程度、こちらの憂さ晴らしは放任するとはいえ、結局我々が
やりたいトドメは差させない！ 美味しい飯の匂いを嗅がせてくれ
ても食わせてはくれないようなモンですよん！ 余計にフラスト
レーション溜まりますよん！ ムキキのキー！」

眉間に皺を集中させ、倉岡は地団太を踏みながら、不満・怒りを
吐露。

「ふむ……報告によれば、まだ新たなギミックを持っているとい
うし、何とも邪魔なロボットさんだ……」

「深大寺さ〜ん、ヤツラがいる限り、我々がこの国を蹂躪し、恵ま
れし者共を没落させることなんて出来やしませんよん！」

倉岡はお絵かき帳に書かれたCオリオンの自作絵を何度も踏み
続けながら、自分らのボスへ現状打破を求める。

深大寺らは黙然と対策を講じる……。

「……仮にあれが遠隔操作式だったとしよう。その場合、あれを操
っている持ち主を探してみよう。取り敢えず戦闘を起こし、その間、
他のメンバーが持ち主を探のだ」

「でも遠隔操作式って、現時点では憶測すよね？」

ヒデノリは怪訝な表情で首領へ確認を取る。

「ああ。だが、博士が言ってたんだ。遠隔操作式ロボットを開発していた知り合いの話を」

「！まさかその博士が作ったものだと？」

メンバー一同、ハツとなる。

「恐らく……としか言っていなかったけどな。まあ、とにかく1回やってみよう。そして、必ずやデータ化された仲間を解放し、我々が理想郷、エスパー格差社会を創設するのだ！」

倉岡・ヒデノリを含む一味は無言で御意した。

02

その後も、戦闘を重ねるTD5機と超能力者達――。

徐々に減少していくエスパー連中。

仲間を減らしつつも、戦いを辞めない。

敵の正体さえ掴めば、一気に逆転出来ると信じて、彼らは戦い続けていた……。

――ある土曜日。

ラボ内の風呂場にて、肌にシャワーを浴びせるミヤ。

バスローブを豊かな胸に引っ掛け、肢体に巻きつけ、台所へ。

「ふあゝ、さっぱり、さっぱりいゝ」

火照った頬。ミヤはボディソープ・シャンプー関連の香りを漂わせる。

冷蔵庫からパックの紅茶と牛乳を取り出し、ミヤは3つのコップそれぞれへ注いだ。

「……にしても、ホントここ、何でもあるよねえ」

ぼんやりとコップに注がれた牛乳を飲みながら、このラボ内を見渡すミヤ。

彼女言う通り、ここには何でもある。

冷蔵庫・厨房・冷暖房・テレビ・パソコン・風呂・居間などなど……。

5人で暮らしても丁度いいほどの環境である。

「お爺ちゃん、いつの間に用意してたんだろ、こんなの」

うとうとミヤは祖父・Dr鳳の事を思い出す。

——13年ほど前だろうか？

両親を事故で失ったミヤは祖父のDr鳳に引き取られた。

祖父であるDrとミヤはマンシヨンの1角に住んでいた。

Dr鳳は面倒見もいい祖父であつたが、研究熱心でもあつた。

「ミヤや。お爺ちゃんと研究所へ行くかい？」

幼き日のミヤはいつも熊のぬいぐるみを抱きしめて、祖父の誘いに対し、こう返していた。

「ヤダ。ミヤ、ロボット嫌い。くーたんと一緒に“マジカル乙女ユーナ”を見たいもん」

熊のぬいぐるみ「くーたん」を抱きしめるミヤは頬を膨らませ、拒否。

……しかし、Dr鳳は怒る様子もなく、そつと小さな孫娘の頭を撫でた。

「そうか、そうか。ロボットは嫌いかあ。うん、それならしょうがない。家で大人しくしていなさい。夜7時には弁当買って帰るから」

「うん。分つたあ。ミヤ、待ってるう」

「うん。じゃ、行つてきます」

「行つてらっしゃーい」

また別の日。

マンシヨン。祖父Dr鳳の書斎。

彼はパソコンのデザインソフトウェアで、TDの原型を設計していた。

エンゼクロスと似ているが、現在の完成品と比べ、芋臭い。

まだまだ、原案段階のようだ。

そこへ小学生低学年ほどのミヤが絵本を持ってやって来る。

「お爺ちゃん、えほん読んでえ」

「ごめんよ。保存したいものがあるんで、保存するまでちょっと待っておくれ」

「うん」

パソコン画面。新たなファイルの中へ設計図を保存する。

「いつつも思っただけど、何作ってるのぉ。どうでもいいモノなら今直ぐ止めて、ミヤと遊んでえ」

「うん、ごめんよミヤ。それだけは出来ないんだ」

Dr鳳は優しく諭す。

「どうしてえ」

「それはね。ミヤとミヤ以外の皆を守る為さ。だけど、大丈夫」

Drは椅子から立ち上がり、用上記のミヤの隣へ腰を降ろした。

「ミヤと遊ぶ事もちゃんとやるよ。そう、誰かを救う為に他の誰かを傷付けては本末転倒なのだからね」

この時のミヤには何を言っているのか良く分らなかった。

とは言っても、寛容な祖父である事に違いはなかった。

ふつと我に帰る女子高生の・現在のミヤ。物憂げな顔をしていた。

「……ゴメンねお爺ちゃん。機械の好きな子にならなくて……」

申し訳なかった。

本当は機械好きな孫娘の方が、祖父にとっては嬉しかったのではないだろうか？

そう思うと、今は亡き祖父に対し、居た堪れない心境となってしまうのだった。

訓練ルーム内。

リフティングしているコウスケ。現在、友人との対立で複雑な心境である……。

そんな時、ドアを叩く音。

次いで、ミヤの「入るよー」という声が。

「んあ？ どうぞー？」

サツと開く自動ドア。

そこへ普段着を着直したミヤが紅茶の入ったカップを乗せたお盆を持って来た。

「瀬戸君。はい、紅茶。テーブルに置いておくね」

ミヤはお盆ごとテーブルに置き、自分は近くの椅子に腰を落とす。

「お、サンキュ！ いったきまうす！」

カップへ手を伸ばしたコウスケは紅茶を口にした。

「……ねえ、ヒデノリ君の事、気になる？」

ピクリと耳を動かし、紅茶飲みを一旦休むコウスケ。

「言うまでもねえよ」

「……だよね」

「あいつの考えも分かるだけに、全否定出来ねえんだよな。けど、さすがにやり過ぎつても間違いない訳で」

「……そうだね……」

コウスケは懐かし気な涼しい顔になり、言葉を続けた。

「俺、小学生の時、コンパクトフォーミュラっつー、車の玩具を競争させるトイホビーが好きでさ。これイイんだよな。生まれ持った体格なんて関係ないし、スポーツや勉強に比べ、親・大人の介入・恩恵が殆ど存在しない。金掛けて沢山パーツ付けても重たくなつて遅いから、金掛けりやイイってモンでもねえ。ある意味正々堂々に近い競技なんだ。……だけど、スポーツや人生はそうはいかねえのは何でなんだろうな？」

「うん……」

ミヤは男児向けトイホビーというものは知らない。見た事が無い。だが、何となく『正々堂々気楽に勝負する事が素晴らしい』と言いたい事は分かった。

ふと、コウスケはミヤが持って来たお盆に目が行く。

カップは自分のと合わせ、3つ。

「あれ？ 残り1個、テットに持っていく奴じゃね？ いいのかあ？」

ハッと立ち上がるミヤ。

「あ！ そうだった！ じゃ、行って来るね！」

いそいそとお盆を再び持ち、ミヤはテットの居るパソコン室へと向った。

その、小動物がちよこまか動くような画に、思わず笑い噴くコウスケ。

「タハハ！ あれが科学者の孫娘かよ。普通なら、5人の中で一番仕切るべき立ち居地だろうによお。……ま、必ずしも能力は遺伝するとは限らないって事かねえ」

パソコンルームにて、テットは黙々とパソコンを弄っている。

画面にはCオライオンと類似しているが、それよりも先鋭的なデザイン的设计図が……。

その机の横へカップがミヤの手より、置かれる。

「紅茶、隣に置いておくよー」

「無駄にご苦労だな」

きよとんとなるミヤ。

「気遣いなど無用って事だ。このラボを提供するだけで十分な貢献だろ」

「そうなのかな……？」

首を傾け、悄然とするミヤはお盆を抱き、ソファーへ腰掛けた。

「あたし、何も出来ない事に情けなく思っちゃって……。だからせめて気配りでもと……」

ミヤはテットが集中している先「パソコンの画面を覗き込んだ。

画面には現在どのTDも使用・搭載していない謎の武器「三角型の銃身3つが四角形に組み合わさるよう設計された三連銃の図面が。更にその三連銃は左右下3方向へ展開する動きを見せる。

所謂アニメーションによるギミックシミュレーションである。

「……凄いね星渡君……。1人で何もかも出来て……」

長い睫毛を下ろし、儚げな顔を作るミヤ。

「お爺ちゃんの孫に相応しいのは星渡君みたいなタイプなのかも……」

テツトは無言のまま、パソコンのキードを弄る。

「だってあたし、TDとか作っちゃう天才科学者のお爺ちゃんの孫なのに、ぜんぜん、機械とか工業とか疎くて……。というか、好きになれなくて。今迄お世話になってた癖に、それ相当の恩返しも何も出来ないなんて」

「フハハハッ！」

「!？」

高く整った鼻を突き上げ、テツトは高笑いをした。

「血筋に翻弄されるとは下らんな。遺伝など絶対的なものではない。親・祖先と関係ない仕事をする人間など幾らで居る。寧ろそちらの方が多い位だ」

つくづくこの男は良くも悪くも事実を論破する。

ミヤの表情が緩み、ほっこりした。

「そ、そうだねっ！ 自分は自分、って奴だよね！」

元氣着いたのか、ミヤは小さく細い腕を使ってガッツポーズしてみた。

そんな時、ステルス衛星カメラから緊急通信が。

「む！」

「あ、反応が！ 一体何だろう？」

2人は各々のSボードを開き、確認に入る。

深大寺らが重大な会話をしている映像……。

「ほう、トップの裏会話か……。重要度が高いと衛星機が判断したのだろうな」

様子をSボード越しに見るテツト、ミヤ。

上半身裸の深大寺はトレーニングルームからDr毒島の部屋に来る。

「どうだね？ 新たな能力は」

「最高です博士。一段と漲るこの力……。これなら、TDに勝てる」

「そうかね。嬉しいよ」

テットらに傍受されている事など知らず、深大寺とDr毒島の会話は続く。

ニタリと口でU字を描くDr毒島は、机に置いているコーヒーを啜る。

「いやあ、今の私が居るのはDr毒島、貴方のお陰です」

「何だね。深大寺君、今更」

深大寺は物寂しい顔を形成。

鼻息を緩やかに溢す。

「昨日、夢に出たんですよ……。エスパーになる前の悪夢の時代を」

「そうかね。可哀想に。あの頃がよほど君の心を傷付けたようだね」

「そのようです……」

深大寺は過去を振り返った。

——それは遡る事、20年近く前になる。

深大寺は極普通な家庭に生まれ、学生生活でも積極的に学級委員・生徒会を務めたりと、リーダーシップ溢れる男であった。

また、正義感も強く、苛めに止めに入るような男でもあった。

その正義感の延長上からか、彼は学生時代から、様々な所業・失態により国民に野次を飛ばされる日本政治に対し、批判的考えを持っていた。

日本の政治は腐っている。自分がこの腐った日本政治を改変させて魅せる。

世襲のお坊ちやまなんか、庶民が大半の国民に忖えられる政治など出来る訳がない。というか、出来ていない。庶民の自分なら国民の気持ち・需要を汲み取れる政治家になって、素晴らしい国家を創れるハズだ。だから、絶対に政治家になるんだ！

……と、意気込み、政治家になるべく日夜勉学に励んでいた。

食事睡眠以外はひたすら勉強と言っても過言では無い程、勉強に勤しむ。

自身の志す日本良化へと導く政治家への夢、果たさんと。

血反吐吐き続けるほどの努力の末、高偏差値大学入試・国家公務員試験まで何とか合格に滑り込んだ。

……しかし、政治家として働き続ける事は出来なかった。

幾ら努力しても手に入らない、政治家必須の3バン〃ジバン（後援組織）・カンバン（知名度）・カバン（選挙資金）は深大寺にはない。

彼の持つ、人柄・リーダーシップ・信頼性で支援金やある程度の知名度を調達したものの、結局、多額の借金を無碍にしてしまった。無謀な挑戦の末の、無残な敗退を喫する深大寺であった……。

この敗退……納得がいかなかった。

憎い……。恵まれた環境におんぶに抱っこの人間が。

そんな人間が優位に立ち続け、不利な立場の人間の夢を奪い、劣等感・理不尽を味あわす現実が許せない……。

それを変えようと働きかける事すら出来ない。

深大寺は悪鬼羅刹の顔で怒り狂った。

そこへ例の如く、派手な色のスーツの営業マンらしき男〃後に味方となる倉岡が現われる。

そして、悪魔の囁きを深大寺の耳元へ贈呈した。

深大寺は倉岡に連れられ、ある研究室へと足を運んだ。

目前には、笑顔で歓迎するDr毒島の姿が。

ペロリと不気味に舌舐めずりをする白衣の老人・その影が深大寺を包む。

「私はDr毒島。不幸な人間を救う、正義の科学者だよ」

「本当に、私を無償で超能力者にしてくれるんですか？」

「勿論だとも！ 私は人々を……特に恵まれない人々を救うべく、無償で技術を提供するのだからねえ」

黙然とテットは映像を閲覧中。

「ほう、向こうのパワーアップの知らせか……」

「それなりの動機があの人らにもあるんだね……」

ハツと、ミヤは祖父の言葉を思い出す。

「誰かを救う為に他の誰かを傷付けては本末転倒なのだよ」と、いう言葉を。

「悔しい思いをしてきた人を救うコンセプト自体はいいけど、だからといって他の人を苦しめるのは違う気がする……」

呟くように主張するミヤ。

「俺も同意見だあ」

コウスケが入室。彼は真摯な表情をしていた。

「世襲のエリートらを懲らしめても、結局不利な立場を味わう対象が変わるだけだ。それどころか、もっと酷い格差を生むかもしれない。それを許す訳にはいかねえ。……けど、それを阻止する事しか出来ねえのかな、俺ら」

3人の脳裏に、以前面識したサッカーエリートになり損ねた連中の悲哀ノテット・コウスケにはプレッシャーに呪われている球城の姿が交錯する。

「何か気の毒だったよね。あの人ら。親の言う通り頑張ったらしいのに……」

「ふむ。そうだな……。改めて考えてみようか……」

「ああ……考えようぜ」

テット、コウスケ、ミヤは黙々と思案の海に潜る。

03

一方、ラボに貯蔵しておきたい食べ物・飲み物の買出しに出ているヨシヒロとノリカ。

2人は現在デパートに居る。

お菓子売り場にて、どの菓子を買おうか選んでいるノリカ。

「えーっと、ミヤはイチゴ味、あたしがブドウ味っ」と

ノリカは籠にチョコレート2つを放り入れた。

ふと、気付くノリカ。

一緒に来たハズの人物「ヨシヒロの姿が見当たらない。

あれ？ 相馬君は……」

周囲を見回すも、それらしき存在は確認出来ない。

「奇遇だねえ。僕もベルセルクジャー、好きなんだあ」

「へえ、お兄さんもなんだ」

「特に5話で5人の心が1つになるのが良いんだよねえ」

男児と青少年らしき会話の声。ひくひくと動くノリカの眉毛と耳。

青少年の方の声に聞き覚えが物凄くある。

ノリカは声の発生源「向かい側へと渡った。

「やつぱり！」

ノリカが向かい側へ移動してみると、食玩コーナーで、ヨシヒロと見知らぬ男児が嬉々と剣王戦隊ベルセルクジャーのプラモ入りラムネを見ながら、トークに弾んでいた。

「うんうん」

男児は渋く両腕を組み、何度も頷く。

「あと、11話も素晴らしい話だったね。自分の事を棚に上げ、被害者面する一般人らにブラックがビシッと説教かますトコとか」

「お兄さん、渋いねえ」。まああのカタルシスは相当だからね」

「少年君、君とはいいいジューズ飲みが出来そうだよ全く」

「嬉しいですねえ、いつか飲みましょうよお兄さん」

「って、何やつとんじゃー！」

ノリカの怒鳴り声に男児は驚き、脱兎の如く、逃げてしまう。

「うわあ、怪人ガミガミババアだー！ 逃げろー！」

両腕を翳し、鼻息を荒げて大憤慨するノリカ。

「だーれがババアじゃー！ あたしゃ正真正銘の現役女子高生じゃー！」

ヨシヒロは呆れ、冷笑。

「ふう、大人げないなあ……」

「戦隊モノで喜んでいるあんたに言われたくないわー!」

この人は分かっているいな……と、ヨシヒロは失望感溢れる目線を送り、鼻で笑う。

「やれやれ……。君、古いタイプの人間だね。ヒーローに感動する心に対象年齢など無いんだよ。そんな事も分らないのかい？ だから、ババアなんて言われるんだよ」

齒軋りし、苛立つノリカ。脳も沸騰していく。

だが、ヨシヒロは寸前で、沈静の一斬を見舞った。

「おっと、ヒステリックに怒るのは止めたまえよ。ここはデパートなんだ。迷惑になる」

「チツ……覚えてるよ、特オタナルシストめ……」

ノリカは般若の顔で齒軋りを繰り返すのだった。

——道路。買い物袋を持って歩くノリカ。

その後方、ベルセルクジャーの主題歌を口ずさみながら、飄々と歩くヨシヒロ。

「希望のツルギは僕らの胸に」 剣・王・戦・隊ツ、ベルセルクジャーッ ノーブレス・オブ・リ्यूージュッ!」

突如、止まる女性の方の足。

ふと、ノリカの視野に入ったもの……。

小さな映画館だった。

その看板の中にノリカは自分の好きな恋愛ドラマ「どろぬウーマン」の映画版があった。

「へえ」。どろぬウーマン、映画化されてたんだ。今度見に行こっかな?」

「なんだ、不愉快の垂れ流し、泥沼茶番劇かあ。僕、ああいうの、苦手だな」

ヨシヒロは小さく嗤い吹くのだった。

ギロリと蛇のような目でヨシヒロを睨み付ける！

「ああん！？　今なんつった！？」

ヨシヒロは恐れる事など微塵にもなく、主張を華麗に謳い上げた。
「恋愛なんて独占欲によるエゴじゃないか。そんな下衆な人間の茶番劇は、僕は苦手だね」

「はあん？　随分とヒネた事言うじゃない。何かトラウマでもある訳？」

ノリカは酸っぱい表情で真相を探りに入った。

「トラウマ……というと、ちよつと違うかな？　そうだねえ」

ヨシヒロはノリカに恋愛を疎む理由を話した。

ヨシヒロの両親は彼が幼い頃より、ケンカの耐えない夫婦であった。

美男子のヨシヒロの親という事もあって父も母も相当な美男美女で、その為か、結婚後でもやたらと異性に好かれ、互いに浮気まがいの行動をしょっちゅうやっていた。

流石に現在では色恋に枯れ、大人しく夫婦をしているが、ゴタゴタ・ドロドロの色恋沙汰を毎日のように見てはうんざりしない訳がないヨシヒロ。

そういう経緯により、ヨシヒロは恋愛を毛嫌いするようになった。反対に面倒な親を無視出来る絶好の暇潰し手段としてヨシヒロは幼い時からずっと特撮ヒーロー番組を見ていた。

エゴと色欲塗れの両親とは逆に、世の為人の為に戦うヒーローに感動を覚えた。

今でもその感動を持ち続けている。

それが相馬ヨシヒロなのである。

「へえ」。色々あるんだねえ。悪い事、言っちゃったかなあだし「気にしないでくれたまえ。僕の心は狭くないよ」

「ってか、あんた俳優志望じゃなかったっけ？　恋愛モノ嫌がつてちや、食っていけないんじゃないのお？」

眉毛を歪に動かし、ノリカは首を傾けながら睨んだ。

「フ、苦手な者・共感出来ないものでも演じきるよ。大体、経験なんて必要でもないと思うよ。例に犯罪したことない人間が犯罪者を演じる事なんてザラだし……」

ヨシヒロは美顔を斜へ向け、鼻で哂って魅せた。

まあ、ご尤もといえばご尤も。

ノリカは呆れ、両肩の力を抜いた。

「はあん。ナルシストと特撮オタクのハイブリッド……忙しいキャラね、あんたは」

ヨシヒロは突如、バク転をし、本人がカッコイイと思っているポーズを取る！

「ヒーローは世の為人の為に動ける素晴らしい人間だよ………実に健全で、人類の指標となるものさ。いや、教科書と言ってもいい……」

「はん、随分言ってくれるじゃない……」

ノリカ、虚勢を張りつつも言い返せず、言葉を詰まらせる。

「僕は恋人1人のみを守る心の狭い人間よりも、なるべく多くの人間を守るカッコイイ人間になりたいものだね……。まあでも、クズへは鉄槌を下された後に助ける主義だけど……」

ヨシヒロは本人にとってカッコイイと思うポーズを新たにとり、美麗に語った。

「それが、あんたのヒロイズムねえ。ムカツクけど、立派じゃん……」

「君はどうなんだい？ 戦いに参加しているって事は、それなりに正義感があるんじゃないかい？」

見透かしたかのような笑いを交え、ヨシヒロは核心を突いた。本人も認めたのか、釣られて笑い出す。

「ふふ、そうね……あたしはただ、ミヤの役に立ちたいだけよ……。そりゃ、エスパーが支配する社会になって欲しくないのもあるけどさ……」

「へえ……」

「あの子、どっちかつつーと、引つ込み思案だからさ……。あたしが居ないとあんたらを仲間に来れなかつただらうしね」

「フフツ、確かに……」

目を閉じ、美男子は風に靡かれた。

そこへ突如、見知らぬ女性の悲鳴とSボードのエマージェンシーサウンドが同時に響く。

「な、何？」

「悲鳴と反応が同時に……？ 確かめて見ようか」

ヨシヒロはSボードを開き、確認。

電撃や火炎を放射する人間「エスパー連中に襲撃され、逃げ惑うカップルらしき男女の何組かの映像を芽にする2人。

しかもその場所はここから近くである。

「間違いないよ。悲鳴とセンサーが反応した場所は同じ……」

ヨシヒロの予想的中。ステルス衛星機の知らせと悲鳴は同じ事象であつた。

04

Sボード画面で放映される映像……。

噴水や洒落たカフェのある場所にて、カップルらしき存在が、容姿が微妙なエスパー連中が繰り出す念力や火炎・電撃放射に苦しめられていた。カップル達は必死で逃げ惑う。

「いやーっ！ 止めてーっ！」

「俺達カップルが君らに何をしたと言うんだ！ 止めてくれ！」
うち1組のカップルは一方的な暴虐に意義を呈した。

しかし、エスパー勢の表情は悪鬼羅刹と化しており、「止めてくれ」という安い言葉程度で止まるとは到底思えない怨念を纏っていた。

「ムツカツクなあ、わざわざ人前でいちやつきやがってえ！」

「リア充爆発しろお!!」

「存在そのものが腹立つんだよ!　まるで自分達がいちゃつく事が神聖であるかのように振舞いやがって!　お陰で恋人持たない人間が否定された気分になぜられるんだよ!!」

「寂しい気分になぜられるんだよ!　どうにかしやがれ!」

「そうだ、そうだ!　いちゃつくんなら家の中でこっそりやれ!　人前でやんな!」

只ならぬ熱量と怨念のオーラで放たれた激昂!

火球や雷の矢を発射し、憎きリア充カップル共を消さんと暴れるエスパー達。

「お、横暴だーっ!」

彼氏の方が不条理を叫びながら、爆発に吹っ飛ばされ、空中へ抛り飛ばされた。

まるで、ペットボトルロケットのように軽い飛びっぷりだった。

壁に背中を預けるヨシヒロ&ノリカ。

近くのビルの壁に隠れ、その様子をSボードを通して閲覧。

「今回はそう来たか……やはり、恋愛は下らないエゴだなあ。この世に恋人など居なければ、こんな事件など起きなかったのかもしれないねえ」

「まだ言うかあんたは……」

「事実だからね」

ノリカは無言で呆れ、肩の力を抜いた。

「……しかし、僕ら、現場の近くに居るけど、このまま戦って大丈夫かな?　エスパー連中に僕らがTD操ってんのバレるのは拙いよな……」

ヨシヒロは現状分析し、危険・リスクを危惧する。

「あんた、ヒイロイズムはどうしたの?　ここから離れている間に死者出るかもよ?」

反対に、ノリカは挑発的にヨシヒロに次に如何なる行動を取るか選

沢を強いる。

確かに呑気に隠れ場を探してから戦うのも拙い。

「……そうだねえ。引き下がる訳にはいかないかイケメンヒーローとして……」

「はん、そうこなくっちゃ!」

両者、不敵に唇を動かし、Sボードを構える。

05

「君達っ! 待ちたまえっ!」

気取った口調で閃光騎士Ⅱレシュヴァリエが舞台の主役と言わんばかりに、光臨!

「ハン、見苦しい八つ当たりは止めな!」

その隣に紫の魔術師、ウィザースロットが出現!

「やつぱり来たな!」

「ふへへ、狙い通り……」

ハッと、眉を顰めるヨシヒロは「狙い通り」という言葉を脳内にしっかりと引っ掛ける!

——何か裏がある。

そう察知するも、現状を放っておく訳にはいかない。

このエスパー連中はこれから本気でカップル共を殺す気のようなので。

故に……戦闘スタート!

レシュヴァリエは5人の超能力者との対戦を受け持つ。

降り注ぐ火炎放射!

それを左腕に固定されたシールドで防御!

散開し、レシュヴァリエを囲み、残り4人は火炎・電撃を放出! 対するレシュヴァリエは両肩・両脚のマニピュレーターを進展させ、今回は先端からビームソードではなく、ビームバルカンを発射する!

迫り来る攻撃を相殺した！

直接戦うのは初めてではあるが、深大寺から強敵であると知らせを受けている一同。

改めて手強さを痛感する。

「やれやれ、君達、哀れだねえ」

Ｌシュヴァリエはキャリバーを下ろし、呆れ出す。

恋人を持たぬ自分らを惨めに思ったのだと判断し、エスパー一同は憤る。

「んだと！？ テメエもしかしてモテる人間か！ その面出しやがれ！ 異性がドン引きする位にぐしゃぐしゃな顔にしてやる！」

ガイコツに皮が張り付いただけのような外見の男、本田が血眼になって憤慨！

見えぬ攻撃Ⅱ念力波を放つ！

「それは勘弁して欲しいなあ。僕、俳優志望なんだよねえ」

騎士TD・Ｌシュヴァリエ、額左端のカッターホーンを畳み、マスクバイザーに変形！

サーチングモードに！

バイザーを通して見える映像……。

念力の流れを捉え、Ｌシュヴァリエは華麗な足さばきで念力波を回避。

そのまま駆け出し、キャリバーで本田を叩き飛ばす！

ドボン！ と、散る水飛沫。本田は噴水へと落ちた。

額に触れ、呆れるヨシヒロ。

「そもそも、僕は君らが恋人を持たない事を哀れんでいるんじゃないんだよ……」

「何イ！？」

どうやら自分らが思っていた感想と違う意味合いで憐れんでいたらしい。

真意を聞かんと、一同は動きを一旦停めた。

「哀れんでいるのは都合のいい他人に縋り着こうとする弱き心に対

してさ！」

「弱い心……？」

「そうさっ！ 都合のいい他人なんか存在しないんだ！ 求めたところで虚しいだけじゃないかっ！」

「シユヴァリエはキャリバーを後ろへ放り、両腕を広げ、高らかに謳った！」

まるで舞台の主役かのように振舞う。

ロボットがやっている為、何とも珍妙な光景だ。

この機体はまたもや舞台俳優の如く、台詞を紡ぐ！

「そんな心捨てて、皆、ヒーローの心を持つとうじゃないか！ 見返りなど、都合のいい他人など求めず、世の為、他人の為！ 素晴らしいと思わないかい！？ 大丈夫！ 恋人なんか居なくても生きていけるよっ！」

おいおい、いきなり何を言い出すんだこいつは？

……と、首を傾げたり間抜けに口を開けるエスパー一味。

「ヒ、ヒーロー……？」

「シユヴァリエは強く首肯。」

「そうさ！ ヒーローのように強い心を持とう！ ヒーローは時に孤独でも、味方より敵が多くても戦う……見習ってみないかい？」

「しけた目でエスパーテロ組織の一味は「どうするよ？」と、顔を見合わせる。」

「……む、無理だな……」

「そうそう、無理無理……って……」

「うつかり釣られ、頷くも、迎合でないと今気付き、ヨシヒロは目を点にした。」

「え……」

「ヨシヒロの希望に反した痛烈な返事がマシンガンの如く、押し寄せて来る。」

「俺はお前ほど心が強くない！ つーか、出来ていたら現実と向かい合っつて、エスパーになんてならねーよ！」

「つか、お前脳みそ何歳だよ！ ヒーローなんてテレビやマンガの世界だけだ！ 現実にはエゴイストしか居ないんだよぉ！」

「現実の人間は弱いんだ！ だから傷を嘗め合う相手を欲しがるんだよ！ 悪いか！」

Ｌシュヴァリエは圧倒され、半歩下がる。

無念……。

訴え虚しく、一蹴された。

「ああ……。そうなのかぁ……。悲しいよ全く。弱き心は悪だなぁ……」

落胆するＬシュヴァリエの隙を窺い、敵連中の１人がこつそりとレポーターションし、投げ捨てられたＬシュヴァリエのメイン武器、キャリバーを手についた！

「ヒーローズピリッツを共有出来ないとは……。嫌だなぁ、多種多様な人間って……」

ヨシヒロはＬシュヴァリエ共々、悄然と頭を落とす。

そういる間に、キャリバーを突き構えにし、エスパーが猛進！

「うぉー！ 自分の武器で潰れるー！」

その声でようやく己へ来る攻撃の存在及び、武器が奪われた事に気付くＬシュヴァリエ。

「うわ……。いつの間かキャリバー盗られてるよ……」

応戦すべく、残る武器＝各装甲のマニピュレーターの展開を試みる。

……これもいつの間に残りのエスパーがＬシュヴァリエのボディにしがみついております、ギミック稼動を邪魔しているではないか！ 絶句するヨシヒロ！

「んな！？ 落ち込んでいる間に！ 参ったねこれは……」

キャリバーを持つエスパーは飛翔し、Ｌシュヴァリエの真上に！ 続いて、垂直落下！ 確実に頭から体躯を真つ二つにする作戦に出る！

「く、くそ……」

「Lシュヴァリエは身動きがもう取れな……。」

「……とでも言うと思ったかい？」

「……い訳でもなかった。」

額部のカッターホーンからビームカッターを飛び出させ、巨大な電光刃を額に構える！

敵のキャリバー垂直降下をビームカッターで受け止め、即座に弾き飛ばす！

次いで、わざと身体を傾け、寝そべるような体勢を取り、Lシュヴァリエは地面に叩き落ちた！

「ぐあああつ！」

落下激突の衝撃でLシュヴァリエから放り飛ばされる4人のエスパ―。

「今だ！」

Lシュヴァリエは両肩・両脚のマニピュレーターを今度こそ広げ、ビームソードを先端から噴出さす！

「纏めて……コンバートスラッシュ！」

地面に叩きつけられた4人の超能力者は起き上がるうとするが、起き上がる前に変換プログラムを打ち込む斬撃「コンバートスラッシュ」の餌食となった！

4人を撃破はしたが、一息する暇もなく、キャリバーで切り掛かる最後の1名が襲来！

「仲間のぉ……仇だぁ！」

大剣は振り下ろされた！

「なんの！」

ヨシヒロは瞬時にキーボードを叩き、対応指令を愛機へ送った！
掴んだ！！ 真剣白刃取り！！

寝そべったLシュヴァリエは「両足の裏」でキャリバーを絶妙なタイミングで挟んだ！

まさかの神業。

衝撃を脳に走らせるエスパ―！

「白刃取りだとおっ!？」

更にしシュヴァリエは両手を地面に着け、上半身を起き上がらせ、そのままブレイクダンスするかのように脚部を捻る!

相手そのものを回転させ、地面に叩き落した!

パラソルへ放り落とされた最後の1人。

「ハハハ……。今度からは容赦なく倒そう……」

失笑を交え、反省するしシュヴァリエは起き上がり、キャリバーへ手を伸ばす。

「くっそお!　せめてのせめてだ!」

パラソルを下敷きになっているエスパーは念力波を放ち、キャリバーを粉碎した!

ブレード部分右半分が動物に齧られたかのように滅却されてしま
う……。

「うわぁ……。壊されちゃったか……」

ヨシヒロは顔を酸っぱくし、溜め息を捨てた。

どうだ!　と、悪ガキのような笑みになるエスパー。

……しかし、彼の前に甲冑らしきものの影が被さる。

「悪いけど、武器がある限り、データコンバート出来るんだよねえ
」

轟く斬激音!

脚部のマニピュレーター先にある電光の剣が目標を切り裂いた!

06

同場所にて、ウィザースロットVSエスパー復讐鬼。

腕をリボルバーやガトリング、バズーカなど、銃器に変身させ、
敵一同は紫の魔術師TDへ一斉掃射!

対して、広がっていくカードビット!

縦横無尽に動き回り、周辺に被害を出さぬよう、怒涛の防御を魅
せるカードの表面!

「も、こいつら、器物破損させる気満々でやんの……。鬱陶しい
ったらありやしないっ！」

苛立ちつつも、ノリカは複雑に指を動かし、カードビットに防御
を託す！

……しかし、負担は大きく、1、2枚ほど破壊されてしまう！
いつもなら5体で戦うところを今回は2体で受け持っている為か、
必然的に1体1体の戦闘負担が加味される……。

そういう状況下であっても、このままではいられない。

そう判断したノリカはカードビット操作をオートモードに切り替
え、ウィザースロット本体を動かす！

腕のシンダーが力チカチと音を立て、回転。

バルカンモードに！

両腕を上30度ほど上げ、閃光小弾を豪雨の如く、発射！

と、同時にサポートアイテム、カードビットを即座に退却させる！
敵の動きを固定させ、こちらが防御一辺倒となっている。と、思
わせて、防御キャンセルと攻撃を同時に行い、極端な攻撃へ転じる
のだった！

ノリカの戦略にしてやられた敵陣はデータ化する弾丸を撃ち込ま
れていった。

前衛が攻撃を集中して葬られる一方で、後衛は散開！

空中に緩やかな曲線を描き、ウィザースロットの真上に移動！

真上からの一斉掃射……逃げる道など地下へ潜らない限り、存在
しない、至高の攻撃場所である。

味方を無駄死に「正確には死ではなく、拘留だが」を無駄にしな
い為に、容赦なく各々の持つ重火器をブツ放つ！！

「フハハッ！ 逃げ道はないぞっ！」

勝った！ そう悟るエスパー勢。

「はぁん、こう来た訳ねえ。だったらコッチはこうするまでよお
！」

ノリカの指がキーボード上でタップダンス！

散開していたカードビット6枚がウィザースロットとエスパー達の攻撃の間に割って入る！

只単に防御をするのかと思いきや、カードビットはそれぞれ均等な位置で停止。

更にそれらを光の線らしきものが繋いでいく。

真上・真下から見れば一目瞭然なのだが、陣形……というよりも、魔法陣を描いたようなものになる！

カードビットが描く魔方陣のようなものは光輝き、上方へ毀れんばかりの光円柱を伸ばし飛ばす！

「カードフォーメーション！ ゲート・オブ・ノヴァッ！」

そのビームタワーは降り注ぐ銃撃・砲撃を呑み込み、相殺した！しかし、相殺した為、更に上に位置するエスパー勢へは攻撃を届ける事は出来なかった。

「あちゃあゝ、8枚全部じゃなかったから、このまま倒せなかったかあ」

相殺出来た事自体は嬉しいが、本来の効力を発揮出来なかった為、ノリカは少々残念がる。

「……まあいいわあ！ まだまだ戦えるし！」

エスパーらは魔方陣形成の、広範囲攻撃に恐れを抱き、新たな戦法に出る！

「接近戦に切り替えるぞ！ それならカードフォーメーションも使えまい！」

「ラジャー！」

5人の超能力者はテレポーターションでウィザースロットの周辺に出現！

今度は両腕を剣やチャーンソウなど、近接戦武器にチェンジ！

一心不乱に切り掛かった！

応戦すべく、ウィザースロットは袖からビームニードルを取り出す！

チャンバラ合戦となる！

しっかり防御は出来るが、中々攻撃に転じ難い状況……。

ノリカは眉をひくひく上下させ、苛立つ……。

「あゝ、何か腹立って来たわあゝ。そもそも、こいつらにはモテる努力本当にしたのかって説教したいんだけどなあ……………」

ニードルで攻撃を受け止めては弾き飛ばすの繰り返しを行う紫のTD。

敵勢の1人、このチンタラした状況に激昂。

「くそ！ しつげえんだよ！」

「こっちの台詞だつーの！ あんたらの不満なんか、他人にや知ったこつちやないんだつーの！ ホント、腹立つんだけど！」

ウィザースロットは憤慨と同時に右腕のニードルを収納し、バルカンモードへ切り替え、目前の敵へブツ放つ！

鉄鋼の剣とチェインソウⅡ両腕をクロスし、防御を取るが、相手は遠く吹っ飛ばされる！

「そもそも何だよ！ ある程度の復讐は許してくれるんじゃないかっただのかよ！」

背後から腕バズーカを撃つエスパーが疑問もついでに投げる。

その答えをノリカは愛機を通し、伝える。

「いや、あんたら明らかに殺す気だったつしょ！？ 流石に殺しは放任出来ないっての！」

「うるせえ！ リア充実を爆発させて何が悪い！」

と、吼えながらチェインソウの腕を振るう相手をウィザースロットは身体を反転させ、回避。同時にニードルで突き飛ばす！

相手は肩を突き刺され、差された部分が0と1にさせられる。

身構えるウィザースロット。

今度は姿を消す敵……。

ウィザースロットはそのまま、待機。

クリアーイエローの魔術師らしい造形の1つとなっている、口元のマスクローブが上Ⅱ目元へ上がり、バイザーとなる！ サーチングモードとなり、見えぬ敵を捉える！

無色の敵一同は標的「紫の魔術師型ロボットヘソード・チェーンソウを振り翳した！

「よし今だっ！」

斬られる……ギリギリのところでジャンプ！ 相手同士を激突させる。

更にカードビットの表面を前にし、エスパー勢を押し競饅頭状態にさせた！

「カードフォーメーション、プリズンド・デス！」

エスパー連中を押し当てたカードビットは一旦離脱し、表面からビームを一斉掃射！

身動きがようやく取れるようになったかと思ったら、トドメの集中攻撃。

何も言い残す間もなく、データとしてエスパーは葬られた。やっとな終わった……。

ノリカはオバサン臭く安堵の息を抜く。

「……にしても、悔しいけど、相馬君の言う通り、恋愛って醜いエゴなのかねえ。あたし、ドラマの綺麗な恋愛、見過ぎだったのかも……。自分自身、経験もないしなあ……」

もやもやするノリカは葛藤の中、脳が噴火し、キレる。

「あゝもう、知るか知るか！ あんたらの理想の人間なんて現実いねえよ！ 恋なら2次元にでもしておけー！ 萌えアニメで萌えゝとか、ブヒィーとか言っておけー！ 他人に八つ当たりすんなやーっ……！」

思いの丈を吐き飛ばし、我に帰るノリカは失笑・自虐した。

「……って、相手葬った後に何言っただろあたしや……。まあでも、戦いながら説得なんて呑気過ぎるかあ。そこまで技術ないし」
ノリカ、脱力し、コンクリートへ尻を落とした。

敵を全て電腦の世界へ封印した。
事件を落ち着かせた。

「あゝ疲れたあゝ。精神的に……」

ノリカは買い物袋から先程購入したペットボトルの炭酸グレープ
ジュースを豪快に飲んだ。

「お疲れさま」

隣のヨシヒロは淡白に労い、自身は己の顎を摘み、思案に浸る。

ヨシヒロは妙に引つ掛かっていた。

「……にしても、妙だ。恋人潰しが、奴らの目指すエスパー格差社会作りに関連するのだろうか……。それに、テツト達3人が今回戦いに現われなかった……。まあ、こちらに関しては僕らだけで十分だと思っただのかな？」

……見ている。

観られている。

そんなヨシヒロとノリカの姿を。何者かが……。

「……見ていたか？」

「ああ、間違いない。奴らは“戦っていたTDと同じ事”を喋っていた”」

「うむ。博士の言う通り、一般人が遠隔操作していたものだったか

……」

「よし……」

ヨシヒロ・ノリカを覗く面妖な影……複数の影。

それが動き出し……。

何かが迫っている事も知らず、休息に浸るノリカとヨシヒロ。

「んじゃ、僕もスポーツドリンクでも飲もうかな？」

ジュースを飲むノリカを見て、ヨシヒロも飲みたくなり、買い物袋へ手を伸ばす。

その時！ Sボードが警告音を発する！

「！！」

ヨシヒロは即座にSボードの液晶画面へ目を送る。

ノリ力は慌てて、ペットボトルから口を離し、ヨシヒロに何が起ったか訊ねる。

「ちょ、何？ また敵！？」

ヨシヒロは目が凍結し、絶句。

「そうか……そういう事だったのか……」

ヨシヒロの言葉が理解出来ないノリ力は具体的な内容を問う。

「はぁん！？ どういう事？」

「ヒャーハツハツハア！ こういう事だぁ！」

挑発的な口調……。どう考えても味方ではない。

考えられる事はただ1つ。………新たな敵。

狭いビルとビルの両隙間からエスパ―テロ組織・RPの仲間が到来！

エスパ―連中は空中を浮遊し、上下の空間を占有。

逃げ場を完全に封鎖している。

……つまりは、散策部隊にヨシヒロとノリ力を発見され、囲まれてしまったのであった！

詰まるところのピンチである。

互いの背中を合わせ、険しい表情をする2人のTD使い。

「う、嘘でしょ……しかも囲まれちゃってるし……」

「成程ねえ……。さっきの戦いは僕らを探す為のものだったか」

美男子の方は爽やかに呆れ笑いを溢す。

「って、笑ってる場合じゃないし！」

2人を囲んだ猛獣の如しエスパ―達が……雄叫びを上げ、飛び掛った！！

EP・05 〈混戦の最中で〉

EP・05 《混戦の最中で》

01

敵に囲まれてしまった以上、ヨシヒロとノリカの採るべき選択は限られている。

1、諦め、降伏すること

←

二人の性格・信念的に不可能。というか相手が応じるとは思えない。

2、真っ向から戦う！

←

出来なくはない。しかし、先程の戦闘でエネルギーを消耗し、武器も破損させてしまった。

手持ちの予備バッテリーに交換すれば再び全開で戦えるが、損傷したパーツを回復修理するには、鉄屑など、金属を取り込み、リカバ―用のデータにするしかない。

武器修復を抜きにしても、今この状況でバッテリー交換を呑気に行えるか？

……大変厳しいだろう。

相手はエスパーで、現在の自分らは丸腰の只の人間。

「さあて、どうしようかな……」

ヨシヒロは半ば諦めの入った口ぶりで失笑。

「どうもある訳ないでしょ！ 戦いあるのみ！」

「けど、この敵数に、現在のエネルギー配分が釣り合うとは……」
「分ってるって！ あたしが暫く踏ん張るから、その間、あんたはバッテリー交換しな！」

「やっぱ、そうなる？」

「それしかないっしょ？」

「まあね……」

ヨシヒロは「やってやるか！」と、眉を釣り上げた。

——が！

「何もさせねえよ！」

ヨシヒロ・ノリカ双方の目の前に敵1人ずつの姿が唐突出現！
テレポーションションで、強引な先手を相手は仕掛けて来た！

エスパ―2人はSボードへ手を伸ばす！

——衝撃音が狭い空間に響く！

ヨシヒロとノリカへ接近したエスパ―2名の首は機械で構成された手に掴まれ、放り飛ばされ、後方の仲間と激突した！

鉄鋼の手に鉄鋼の体躯……。

メタリックブルー＆ブラックグレーの装甲の持ち主。

メタリックグリーン＆ダークブルーの装甲の持ち主。

CオライオンとGバンディッタが助けに来た！

思わず、安堵の息を漏らすヨシヒロ・ノリカ。

「げ！ 味方が来やがった！」

と、敵陣がうろたえた瞬間、電光の矢がエスパ―連中へ降り注ぐ！
パールホワイト＆ピンクのボディの機体……。

「味方は絶対、守るんだから！」

空中からエンゼクロスがビームアロー乱射攻撃して来た！！

「くそ、一旦退避！」

このままではエンゼクロスに倒されるだけだ。

現場リーダーの指示を受け、一斉散開！

封鎖された通路が開く。

「今だ！ 逃げるぞ！」

マグナム乱射で敵を牽制しながらの、Cオライオンの命令。
ヨシヒロ、ノリカは無言で首肯し、狭い通路から脱出した！
眩しい太陽が待ち構えていた。

が、そんな事気にする暇もなく、一心不乱に2人は疾駆！

2人と併走する2機。Cオライオン・Gバンディッタとその上空
から同行する1機。エンゼクロス。

「助けて貰ったのは嬉しいけど、何でギリギリまで来なかった訳え
〜？」

ノリカ、Cオライオンを見やり、半ギレで問う。

「まあ、作戦があつてな……」

「作戦……？」

ヨシヒロは眉を歪な形状にする。

「そうだ。これを好機に、一気に畳み掛ける！ いいか、よく聞け

……」

司令塔Cオライオンはその、一気に畳み掛ける策を手短に説明し
た。

そうしている間に魔手が再び強襲する。

「逃がすかー！」

大きく響く声が後方より確認！

一旦退却した敵陣が再度襲来する！

敵勢は火炎・電撃・バズーカなど様々な射撃・砲撃をお見舞いす
る！

Cオライオンは立ち止まり、後ろへ身を向ける。

「ここは俺に任せる！ Gバンディッタとエンゼクロスは2人が完
全回復させるまで守ってやれ！」

「分った！ 任せろ」

Gバンディッタは走りながら、頷いた。

「……でも、一人で大丈夫？」

「問題ない。そちらこそ気をつける。敵は共通してテレポーテーシ
ョン能力を与えられているからな」

「うん……」

エンゼクロスはチラとＣオライオンの背中を見て、生身の仲間の護衛へと飛び去った。

同時刻。単身、敵勢へ燦然と立ち構えるＣオライオン……。次々と折り畳まれた肩・脚の銃器が暴れんと広がっていく。

「全て撃破だ！」

空間を火球の羅列にせんと、多数の銃口からビーム弾が豪雨を越える勢いで総射！！

３分の１は回避に成功するも、この先手に３分の２が人間の姿をしたデータに変換される！

「よし……。まずまずだな……」

テツトは拳を篤く握る。

……しかし、全滅させた訳では無い。

油断は禁物。現に残党が左右へ回り込んで来た！

Ｃオライオンはガン＝カタで押し寄せる敵陣へ対抗した！

華麗な身のこなしで、標的を乱れ撃つ！

混沌と入り乱れる異能の人間が電腦封印とされていく……………。

02

息を切らし、走り抜けるヨシヒロとノリカ。

バチツとＳボードのバッテリーカバーをはめ込む２人。

走りながら何とかバッテリー交換は成功したようだ。

「よしっ！ これで全回復うっ！」

ニカツと唇を緩めるノリカ。

「さて……、次は……」

周囲を見回すヨシヒロ。何かを探している……。

目的の物……場所……。

——あつた！

「！！ あの中になら！」

ヨシヒロの視線の先「古びた町工場。
この中に金属「愛機の攻撃の要・キャリバー修復材料が全く置いていない訳がない。」

即座に方向転換し、駆け込む！

ノリカもヨシヒロの動きに反応。

彼に追隨した。

「あ、工場！ 修復すんのね！ OK！」

工場目掛け駆け込む！

だが！ バルカン攻撃が突如、押し寄せる。

腕がバルカン砲のエスパー5人ほどが出現！

連射攻撃により、行く手を阻む！

ヨシヒロ＆ノリカ、一旦走行停止。

「ちょ、邪魔すんなゴルア！」

人差し指を突き上げ、上ずった声でノリカは怒り吼えた。

「ま、正体を突き止めた以上、本腰上げて畳み掛けに来るか普通…

…」

ヨシヒロは爽やかに失笑。

そこで、緑の海賊ロボットが間に割って入り、ワイヤーで本体と繋がった碇「アンカー」を発出！

うねるワイヤーが、5人纏めて縛り上げる！

「俺が相手だ！」

Gバンディッタは人差し指を内側へ仰ぎ、挑発！

次いで、ワイヤーを巻き戻しながら、横へ放り飛ばす！

コンクリート製の塀に叩き付ける！ 鈍重な衝撃音が轟く！

「ようし、今のうちい！」

指をバチンと鳴らし、ノリカは目的の場所へ再び駆ける！

「暫くは頼むよ！」

ヨシヒロは颯爽と仲間「緑の海賊TD」へ背を向けた。

再び仲間と共に戦う為に……。

ドア前へ到着！

仕舞っている扉をヨシヒロは、日頃の努力の成果「ヒーロー飛び蹴り」をかまし、無理矢理ドアを開く！

室内へなだれ込む！

息を荒げ、辺りを散策する2人……。

「！ あれ！」

ノリカが指差した先「束になった鉄パイプが横たわっている。

「よし、リカバリーパーツ、発見！」

鉄パイプの束へと駆けるヨシヒロ・ノリカ。

「くたばれ！」

その言葉と共にまたもや、新たな刺客が召喚！

今度の敵4人は全員冷凍光線を発射する！

同時に、超薄型ミサイルが2本、反対方向から出陣！

敵の冷凍光線を喰らい、凍結させられた！

「ぬう、おのれ……」

冷凍ビーム発射能力を持つ4人が喉を唸らせ、向かい側の機影を睨む。

身構えているエンゼクロスの姿がそこにあつた！

「2人共、急いで！」

「サンキュ、流石親友！」

「親友じゃないけど、助かったよ！」

ノリカ、ヨシヒロはエンゼクロスに戦闘を任し、目的へと動く。

しかし、敵は多い。

冷凍ビームを放射するエスパー！

冷凍光線がヨシヒロ・ノリカへと襲来！

「イケメンヒーローを……舐めないで貰いたいね！ ンハッ！」

ヨシヒロは高くジャンプし、アクション俳優ながら、冷凍ビームを跨いだ！

「あ、あたしだってえ！ って、んがつ！」

ノリカは力むが、落ちているスパナに足を引っ掛け、ズツこける。

格好良く避けられなかった。

ダンスで培った能力と咄嗟のアクションの能力は似て非なるモノなようだ。

しかし、幸いにもそのお陰で冷凍ビームを回避した。

舌打ちし、悔しがる冷凍ビームを放ったエスパー。

そこへエンゼクロスのリングビットが出現し、これ以上の攻撃を阻ませる！

その隙にSボードを開き、キーボードを叩く。

ヨシヒロ、ノリカはSボードから赤外線のようなものを放出させ、鉄パイプに照射。

光に包まれた鉄パイプはコンバートアタックを喰らったエスパー同様、0と1に分解されていく。

今回の場合はそのまま、Sデヴァイスが照射しているレンズの方へデータ化された鉄パイプの束が吸い込まれていく。

鉄パイプは姿を消し、Sデヴァイス内の修復データとして、取り込み変換された。

次に、ブレイクパーツ・リカバリーの項目を選択。

キャリバー + 金属データ 〃 ……

カードビット + 金属データ 〃 ……

「NOW RECOVERING」という文字及び、回復度を示すメモリが液晶画面中央に出現。

エンゼクロスは単独で4人のエスパーと対峙。

四方八方から放たれる冷凍ビームを、持ち前の高い機動力で回避していく。

しかし、ここは室内。

得意の空中を使った移動が難しいので、苦戦していた。

ついにはビームに当たり、左足を凍結させられてしまう！

これにより、歩行は不可能となる。

「しまった！」

ミヤは焦燥する。

飛行もこの低い天井では難しい。

その上、左足が凍ってしまつては今まで走り回って回避していた事も出来ないし、片脚のブースターだけ噴出出来ないので、空中移動もバランスが悪くなつてしまつている。

非常に拙い状況である。

「よし！ 畳み掛けるぞ！」

「おうよ！」

4人のエスパーは執拗にエンゼクロスを追い込む！

………ヒュン！

一直線に駆け抜ける電光の弾丸……。

それらは冷凍ビームと激突！

熱弾と冷凍化光線の衝突により、蒸発煙が発生！

相殺された！

「何っ！？」

まさか？ と、エスパー勢が睨んだ先に、ライフルモードのキャリバーを構えた白銀の閃光騎士Ⅱレシュヴァリエが再光臨していた！
間入れず、カードビット8枚全てが右往左往飛び交う！

7枚は敵を翻弄し、1枚は天使型TDの脚部の氷結部分のみを器用に切り裂いた！

脚を動けるようにした！

「！ やつた♪」

エンゼクロスが見向けた先Ⅱ完全復活・MAX充電完了のレシュヴァリエ&ウィザースロット！ と、持ち主、ヨシヒロとノリカが強気な顔でサムズアップを送る。

時間稼ぎへの感謝の意を込めて。

「さあて、大暴れするよおっ！」

「最高のカタルシス、逆転の開始さっ！」

高揚するノリカ、ヨシヒロ！

彼らの愛機、Lシュヴァリエ・ウィザースロットが地を蹴り、駆け出す！

「このお！」

4人のエスパーはテレポーションで1箇所へ集結！ 合体冷凍光線で迎撃！

「フフ、冷凍攻撃の対策は回復中に考案させて貰ったよ！」

ヨシヒロはキーボード上に色白の美しい指で華麗にワルツを奏でる。

Lシュヴァリエは突如、右真横へ移動し、右肩・右脚のマニピュレーターを伸ばす！

端に置いてあるリフトカーを掴み、Lシュヴァリエは身体を回転し、掴んだリフトカーを投げ飛ばす！

リフトカーは氷結化光線の餌食に！

広大な冷凍ビームを、リフトカーを盾にすることで、防いだ！

「んなっ！」

「やりやがったなあ……」

渾身の一撃を無碍にされ、憤るエスパー4人。

その隙にカードビットが彼らを囲み、彼らを押し込み、サンドイッチにする！

相手は動けなくなった！

その時だ！

射撃体勢のエンゼクロス……コンバートアローを1つずつ、お見舞い！

……30秒後、メモリーカード4枚がエスパー達の居た場所へ散らばった。

周辺の敵を全て撃破！

……かに、思えたが。

ゾンビゲームの如く、新たな刺客が今度は6人・わらわらとお出ましになった。

しかも、ヨシヒロ・ノリカに、直接接近！

「とっておきの能力を魅せてやる！」

と、いきり立つ刺客は瞳孔を開き、マインドコントロール波を発する！

これは念力的攻撃であろうと看破したヨシヒロは即座に、Lシュヴァリエのマスクチェンジで念力の流れを捉えたいところだが、今回はそんな時間はなさそうだ。

なので、Lシュヴァリエに手っ取り早い対応をコマンドする。

Lシュヴァリエのキャリバーが発光！

電光を纏う！

次に、スパークするキャリバーをコンクリートへ叩き付ける！

稲妻がの騎馬の如く、駆け抜け、ヨシヒロ・ノリカとマインドコントロールを試みるエスパーの間へ疾駆！

喧しく、激しいスパーク音を立て、一時的にでも壁となる！

この雷及び雷音の壁がマインドコントロール波を遮断！ 電磁波が念力を掻き消す！

マインドコントロールを試みたエスパー達は顔を顰め、舌打ちする。

その隙にLシュヴァリエがコンバートスラッシュを刻み、葬る！

「残念。マインドコントロールは電磁波で？き消させて貰ったよ」

ヨシヒロはからかうような笑顔を魅せた。

反対側。ワイザースロットの戦鬪。

カードビットがワイザースロットへ向って来る！

縦横無尽に動くカードビットが持ち主に切り傷を刻んでいく！

「ちょ、あちゃあ、しまったっ！」

ノリカはマインドコントロールの回避を失敗。

カードビットを相手エスパーに操られてしまった。

物質操作能力者にカードビットをコントロールされてしまう。

しかし、無策ではないノリカ。

「だったら、こうだったの！」

ウィザースロットの、クリアーイエローのマスクローブを上へスライドさせ、目を覆い、サーチングバイザーに！

これにより、相手とカードビットの間に操り糸のような念力波を可視化する！

次いで、ウィザースロットは左腕をビームニードル、右腕をバルカンにし、接近戦に飛び込む！

器用にカードビットの猛攻を回避。

ビームニードル・ビームバルカンの攻撃による電磁波でエスパーとカードビットを繋ぐ操り糸を？き消し、カードビットを開放させた！

「そ、そんなバカな！」

「対策なんか頭に入ってるっての！ 1年間の準備、舐めんな！」

つかさず、カードビットを脚部コンテナに回収。

機械を無理矢理操る能力を持つ相手には寧ろ足枷になってしまうカードビットを格納。

そして、舞い踊るようにウィザースロットはニードルとバルカンで敵を葬っていく！

「こうなったら、本体を操って！」

3人掛かりで、操りの意を伝える念力を飛ばす！

「そんなの、無駄だったの！」

サーチングモードのウィザースロットには敵の念力の流れがハッキリ見える。

四方八方攻めて来るが、お構いなしに機動力とバーニアを駆使してスルリと回避し、最後に3人纏めてコンバートステイングを見舞った！

これにより、第2群は全滅。

戦闘時の興奮を冷まさんと、ノリカは荒い呼吸を整え出す。

「ったく、いつまでも妬んでばっかで……。あたしだってさ、あた

しだつてさ……」

ノリカの脳内に幼き日の子役バックダンサーの自分が浮かび上がる。

——母に放り込まれて始めたものだったが、実力があり、コーチ・スタッフ内の評価も良かった。

おだてに弱い幼少のノリカはまんざらでもなくなり、ダンスに熱中した。

しかし、ライバルに金持ち・権力者の親を持つ者が多くおり、その娘の親が裏交渉をエサに娘にオーディション合格・融通を根回しさせる輩が居た。

そういった連中に貧乏な事務所や制作会社は負けてしまい、その娘らを贖身してしまった。

その反動でノリカは突出が難しくなり、オーディションが合格せず、次第に仕事も減り、次第にダンス・芸能に対し馬鹿馬鹿しくなり、身を引いた。

——胸糞悪い過去なんか放り飛ばし、普通の女子学生として生きて来たノリカであった。

悔しくないと言えば嘘になる。

しかし、今更グジグジ言ってもしょうがないのは重々承知。

被害者面はしたくない。

というか、した所で意味が無い。

忘れるしかないと思うノリカにとって、そう出来ない人間にはつい、苛立ってしまうのであった。

だが、残念ながらのんびり感傷に浸らせ続けてはくれない。

また新たにエスパークチームが襲来。

老化してしまう程に萎えるノリカ。

「つて、げえーっ！ またあゝ。しつこっ！」

「ハハハ、やはり我らがリーダーの予想通りだったか……。まあ、僕らの正体を掴んだ以上、徹底的に僕らを直接攻撃する事に固執するかあ。捕まえれば一気に逆転出来るからねえ」

「あゝあ、最悪っ！」

「さあ、文句はそこまでにして、戦うよ楠さん？」

「はいはい」

かったるそうにノリカは首肯。

ヨシヒロ・ノリカは新たに出現した敵との戦いに臨んだ！

03

一方、町工場前で繰り広げるもう1つの戦い……。

Gバンディッタの背中ランドセルから伸びた、バズーカと両脚の
アリゲーターキャノンを発射！ 発射時&ヒット時に、轟音が轟く
！！

Gバンディッタはバズーカを背中へ畳んだ。目の前の敵を全滅さ
せたのである。

直後、メモリーカードが散り落ちた。

「おし！」

海賊TDは額に飾ってある眼帯型サーチゴーグルを片目にセット
し、サーチングゴーグルを装着。

姿を隠している敵がまだ潜んでいないか、周囲をサーチする……。

——敵の存在は確認出来ない。

自分もヨシヒロらの元へ行つて、援護しようと一歩進む。

そこへ流星の如く、弾丸が通過。

海賊型の進行を妨害。

周辺の屋根に新たな異能者刺客がチンピラ風に立ち構え、出現。

その中にはサッカー部で苦楽を共にしたかつての友「ヒデノリの
姿が確認出来た。

「そのカッコイイロボットさあん、僕チン達を少しでも多く、倒
したくありませんかあ？」

ヒデノリが人差し指を上へ突き上げ、挑発の意を示す。

「……ヒデノリ……」

敵の狙いは戦力の分散だろう。

味方を何人犠牲にしても、結果的にヨシヒロ・ノリ力を捕らえれば、味方を元に戻す事が出来、一気に逆転可能。故に、惜しみなく次々と敵が現われる。

コウスケは重々承知している。

だが、こちらが先に向こうを全滅させればいいだけの話だ。

「おっしゃ！ 乗ってやろうじゃねーの！」

メタリックグリーンの戦機は挑発した相手へと飛び込む！

ニタリと口を歪め、逃げ去るヒデノリ達エスパ―軍団。

明らかに陽動の意図があるように思える。

しかし、多様なギミックの宝庫であるTDに敵はない。

臆する事も、油断する事もなく、Gバンディッタは追走！

屋根から屋根を飛び越えていくヒデノリ達エスパ―。

後ろから警戒心を持ちつつ、屋根と屋根の間を飛び越え続けてい

くGバンディッタ。

……暫し、この状況が続く。

後ろからバズーカで狙い撃てるが、敢えて狙わない。

Gバンディッタにはじっくり対峙したい相手があの中に1人、居るからだ……。

いつの間にやら、港へ到着していた。

客人・Gバンディッタはコンクリート上へ重厚な鋼鐵足を落とす。

緑の海賊ロボットの周辺には血気立ったチンピラ臭い連中「エスパ―」が総勢50人ほど囲んでいた。

突如、天へ差し向けられた人差し指！

ヒデノリによるものである。

「タイマン勝ち抜き戦だあ！ テメエにはこれから1人ずつ戦って貰うぜ！」

コウスケは表情を顰める。

（成程、分り易い時間稼ぎ手段だなあ……）

向こうの消滅進行具合を遅延させる手段……ここで素直に応じて

は敵の思っ壺だ。

こんな要求には応じず、いきなり複数へ攻撃するのがセオリーだ。しかし、その状況ではヒデノリと向かい合えないまま、倒す事になるだろう。

コウスケは苦悩する…………。

ならば、一か八かこちらも要求してみようと考えた。

「ああ、分かった。まずは言いだしっぺのお前！」

Gバンディッタのガンメタルの指は堂々とヒデノリを指差した！
「お前から相手になれ！ 順番なんてどうでもいいだろ？ どうせ皆、戦うんだしな」

ヒデノリは即座に笑い悶える。

「クハハハハッ！ イイゼ、イイゼ！ 確かに順番なんてどうでもいいモンなあ！」

ゲラゲラ高笑いをするヒデノリは身体機械化超能力を発動！
右腕をキャノン砲、左腕をチェーンソウに変形させる。

ロボットと両腕が機械化した人間が対峙…………。

双方の間に海風が通過…………。

それがゴングかの如く、通過後、両者は駆け出した！
アームアンカーとチェーンソウが火花を散らし、激突！
鏝迫り合いする中、両者は鬼気迫る表情で睨み合う！

Gバンディッタは脚部のアリゲーターハングキャノンを広げている。

アリゲーターハングで相手の脚部を掴み、ゼロ距離射撃を見舞う戦術を試みる。

「させるかよっ！」

ヒデノリは片脚を上げ、キャノンを上から踏み付ける！
更に中央から脚部を割り込ませ、もう1つのキャノンを内側横から脚部で押さえつける！

キャノンが明らかに自分に向かないようにする！

「！ 何っ！？」

コウスケ、まさかの戦術に衝撃する！

反対にヒデノリは「やってやったぞ！」と、強気に笑んでみせた！
「だったら、こうだ！」

チェーンソウと衝突中のアンカーを強制射出&そのアンカーが搭載された腕でアップアをかます！

相手を後上へと放り飛ばした！

コンクリートへ叩き落とされるヒデノリ。

「ぐ……やっぱ、手強いぜこいつ……。時間稼ぎ、どんだけ出来っかな俺……」

歯を食い縛り、ヒデノリは起き上がっていく。

「……もう一度訊くけどさ」

Gバンディッタが訊ねて来た。

ヒデノリは眉毛をうねらせ、海賊TDを睨み上げた。

「んあ？」

「やっぱり、優位な立場に立ち続け、勝ち続ける方がいいか？」

ヒデノリに取っては愚問他ならぬ話。

腹を抱え、ヒデノリは失笑した。

「つたりめーだろ。勝つのが嫌いな人間なんかいねえよ。だってよお、どいつもこいつも、少しでも偏差値の高い大学に行きたがったり、公務員や大企業社員になりたがるじゃんか……。皆、安定を望むんだよ。負けて凋落するのなんて誰も望まねえ！」

「……かもな……。んじゃさ、もう1つ質問」

「……もう1つ？」

「誰もが勝ったり負けたりするゲームと予め勝ち負けが決まっているゲーム……。もとい、お前は「負け続ける人生」と「勝ったり負けたりする人生」、どっちがまだマシだと思っかって話」

「それは……流石に後者の方がマシだな。……でも、お前がそれを言うかよ」

一瞥をコンクリートへ吐き落とすヒデノリ。

何せ、相手は自分らに対し、無敗を喫しているのだから。

「TDが無きゃ、俺だつて只のザコだよ……。サッカーとかな……。」「サッカーとか……？！ お前まさか！」

現在、ヒデノリ達エスパー軍が分かっている事は敵TD使い5人のうち、2人の正体がヨシヒロとノリカである事。

……つまりは、残り3人もクラスメイトである可能性は高い。

更にサッカーで敗北経験があるとなると自ずと候補は絞られる。

「おおっと、話の続きは2人だけでやろうぜ？」

Gバンディッタ、ヒデノリの襟元を掴み、力いっぱい斜め上へと放り飛ばす！

飛んでいった同じ方角へGバンディッタは跳躍！

追尾した！

啞然と周囲で観戦していたエスパー勢は「どうする？」と談合。

「やっぱ、加勢するべきだろうか？」

「いや、全滅する時間が長くなるだけだろ？」

「下手に動かず、深大寺さんの指示通り、俺達は時間稼ぎに徹するべきじゃないか？」

「むむ、そうだな……」

——と、結局は「待機」という選択肢を採るのだった。

港周辺には廃工場があり、うち1つの屋根にヒデノリは墜落。

同時に、Gバンディッタが同場所へ着地。

次にGバンディッタはバズーカを叩きつけ、古びた屋根をくり貫く。

海賊型ロボは無言でヒデノリを見つめ、開けた穴へ飛び込む。

ヒデノリも何も言わず、その穴の中へ落下。

廃工場内。

ヒデノリはコンクリート上に降り立つ。

「よっ！ 直接遭うのは久しぶりだな」

この声……電子音声ではない。

聞き覚えのある声。

ヒデノリが先程看破した通り、Gバンディッタの横後ろ方向に、コウスケがドラムの上に座っていた。2人は驚きを一蹴させた、爽快な顔となる。

「コウスケ……お前だったか」

「こっちも驚いたけどな。お前がエスパーになってたなんて」

「ハッ、残念だな。お前なら分かってくれる思ってたのにな」

「分かったいけど、分かっちゃいけないんだよ……」

コウスケは儚げな目を遠くへ向けた……。

哀愁めいた失笑。ヒデノリは脱力する。

「凄いな。お前の自制心は。大人だな」

「そうかあ？」

「そつだよ。俺は悔しい・妬ましいという感情には勝てねえわ」

「エリート共を馬鹿にしたり、恥掻かす程度でも無理か？」

「ああ。その程度で治まるなら、エスパーにわざわざなんねえよ」

コウスケは爽やかな顔をして天井を見上げた。

先程、自分がマシンを通して開けた穴から曇った空を確認する。

「……そつか、なら……戦うか？」

もう何もいう事は無い。ヒデノリは無言で首肯した。

第2ラウンド・スタート！

振り翳されるヒデノリの腕「チェーンソウ！

Gバンディッタのバズーカがブツ放される！

コウスケは戦う前に決意した。

ヒデノリの行い「スポーツエリートに代わってエスパーがスポーツの頂点を牛耳る」スポーツ格差の拡大を放任する訳にはいかない。しかし、ヒデノリの無念を晴らさぬまま、葬るのも、良心が・友人としての情が阻む。

ならば、せめて戦うことで、少しでもストレス発散させてやりたい。

そう考えたコウスケは戦う道を選んだのだった。

ヒデノリとGバンディッタは一旦、後退し、距離を取る。

ヒデノリは両腕を2連バズーカへと変換！

Gバンディッタは背中から伸びたバズーカと両脚のアリゲーター
ハングキャノンの砲口から光を充満させる！

さあ……勝負だ！

両者、最大出力のエネルギー弾を発進させる！

真っ向からぶつかる2つの電光球！

じりじりとGバンディッタ側が圧倒し、遂には敵の攻撃を切り裂いた！

瞬時にヒデノリは光球に包まれた！

「ハハ、負けるって、やっぱ気分ワリイな……」

ヒデノリは涼しげに笑った。

「そうだな。他人を負かせ過ぎないようにしないとな……」

コウスケは柔和な表情で0と1へ分解されていく友の姿を見届ける。

「んじゃ、ちよっくら眠るわ、俺」

「ああ。次に目覚める時には格差が小さくなっているかもな。おまえらのお陰でエリート共をビビらせられたからさあ。行き過ぎた英才教育により、極僅かの人以外を不幸にしまった。これ以上そんな人間を生み出さない為に、英才教育を撤廃し、正々堂々平等な環境下で、楽しくスポーツをやるようにしましょう！……みたいな？」

コウスケは照れ臭そうに頬を掻く。

「ハハ、そうなればいいな……」

「させるさ。俺にはGバンディッタっつー、頼もしい相棒がいるかな」

「おっ、そうだな。そいつがあれば何か変えられるかもな」

「変えてみせるさ……」

「そいつは楽しみだな。おっと、そろそろ消えちまいそうだ。……」

「じゃあな。親友！」

「ああ……。またな！」

2人は実に爽やかであり、儂げな表情だった。

その2人のうち、1人は消え、メモリーカード内に眠る……。

コウスケは一息着き、友人の眠るメモリーカードをポケットに仕舞った。

そして、端整な顔をグイと上げる。

一転、戦意の強い顔つきに。

「さあて、残りは要求を破棄して、纏めて倒すとすつか！ もうちょい頑張ってくれよお！ Gバンディッター！」

キーボード操作に呼応し、メタリックグリーンの海賊TDは再び戦火の中へと！

04

一方、こちら道路。

Cオライオンはやかましい程に展開していた身体中の銃器を綺麗さっぱり折り畳む。

そして、西部のガンマンの如く、指でカラカラとハンドマグナムを回し、両腰ホルスターにマグナムを収納した。

同時に、メモリーカードが雨の如く、コンクリートへ次々とガラガラ落ちて来た！

つまり、目の前の敵を全滅させたのである。

喧しかった空中が一気に殺風景となった。

パチパチパチ！

緩やかな拍手の音がこの静かな空間に響き渡る。

「お見事。流石司令塔といたところか……」

Cオライオンは声に反応！

早撃ちガンマンの如く、素早くガングリップを引き抜き、声の方角へハンドマグナムの銃口を向ける。

その先……。

威風堂々と闊歩する男の影！

ボス〓深大寺である。

「ほう、ボスのお出ましか……。俺達もそこまで倒して来たか」

「うむ。現時点で1013人中、621人を君達は撃破した。私以外の残った仲間が君の味方を現在交戦中だ……」

Ｃオライオンは初手として、揺さぶりの1弾を発射。

深大寺は余裕綽々と、テレポーションへ瞬時に回避。

「フ、良いのか？　ボスが俺1人を相手して。正体の判明した方を集中して狙うべきだと思うが？」

深大寺は落ち着き払い、ネクタイを締め直す。

「いやいや、ボスというのは一番厄介な敵と戦うという宿命があつてだね……」

深大寺は今迄の戦いを通し、司令塔であり、最も厄介な敵がこのメタリックブルーのマシン、Ｃオライオンであると看破していた。

ガン〓カタの構えをし、戦闘体勢に入るＣオライオン！

「いいだろう……。俺はもう、あんたに敗れて何も言わない……」

「勝負といこうではないか。パワーアップした私が君を潰そう」

テットが魂を託し、動かすマシンの目前には以前尊敬した人物。金コネを持たずして政界へ昇りつめた経験のある男が立ちほだかる。

その深大寺正十郎に対し、現在幻滅という感情はない。

説教するつもりもない。

自分には理解出来ない、彼にとって思うところがあるだろうからだ。

しかし、肯定はしない。彼の目指すヴィジョン〓格差はあるままで、立場が変わるだけの変革は正しくない。——だから、もう何も言わず、ただ戦う。

張り詰める壮絶な空気……。

並大抵の人間を窒息させる程の重圧……。
両陣営ボスの、頂上対決が始まった！！

EP・06 〈真の敵とは?〉

EP・06 《真の敵とは?》

01

両腕をクロスし、深大寺は唸り始める。

「最初から全力でいかせて貰おう……。ぬうつ！ おおおお……！」

身構えるCオライオン。

深大寺から只ならぬオーラを察知する。

「む……これは……？」

変貌していく……。

変体していく……。

人肌から爬虫類的肌へ……。

肌だけではない。骨格・筋肉・神経……あらゆる身体部位が変異する。

「……ほう。これが例のパワーアップか」

青い狩人TDは「見上げた」。

深大寺の新たな姿「魔竜形態」。

全長5メートル。周辺のビルと同じぐらいの高さ。

車道・4車分を軽々と独占する横幅……。

主にティラノレックスをベースにし、プテラノドンの翼を背中に持ち合わせ、更に剣のようなツノを頭部に3本装備。

ゲームに出てきそうな巨大モンスターそのものである。

その魔竜、獣らしい咆哮を上げ、口から火炎を放射した！

人間形態のエスパーが掌から放っていたそれとは比にならぬ、巨大な火球！

メテオの如きそれがCオライオンへと迫る！

両手のマグナムを構え、発射！

まずは敵攻撃の威力分析を試みる！

マグナムのビーム弾2発程度では巨象と小動物との差と同様、呆気なく弾き飛ばされる。

…… 今までにない高威力の攻撃だ。

ならば！ と、ショルダーマシンガン・レッグミドルライフルを加え、総射！

複数の光が1直線に駆け抜ける！

どちらも流星の如く、激突！

今度は相殺！

威力の程度が判明したのだった。

しかし、敵のデータが1つ分かったのも束の間、空中へ羽ばたく魔竜は上空から火炎の弾丸を次々と吐き飛ばす！

まさに、流星群である。

「チツ！」

斜め上へ照準を回すメタリックブルーの狩人型ロボット！

今度は胸部に巻きついたベルトライフルも動員し、乱れ撃つ！

火球が町・建造物を呑み込まぬよう、空中にある内に粉碎していく！

爆発！ 激突！ 激しい音と攻撃の相殺合戦！

その末、全てが空中爆散！

と、同時に魔竜が足を突き出し、急落下！ Cオライオンを踏み付けに来た！

そう、易々潰されるほど、反応に鈍いテットではない。

星の狩人・Cオライオンはコンクリートを蹴り上げ、後退！

更に念を押して、両脚部のライフルを棒高跳びの如く、コンクリートを弾かせ、後退する勢い・距離を稼ぐ！

魔竜は道路を踏み付け、巨大な足型を作った！

獰猛に唸る魔竜。踏み潰そうとした対象に逃げられたからである。Cオライオンは後方へ飛ぶまま、各種銃口を魔竜本体へと向ける！

一斉総射！ 魔竜全身へオリオン座を刻まんと、光弾の豪雨を見舞う！

魔竜のボディに直撃！

「さて……。どれほどのダメージを負ったか……」

テットは敵本体の強度を確かめた。

爆煙が退いていく……。

その中央に無傷の魔竜・深大寺の姿を確認。

「……頑丈だな……。あの鱗、相当なようだ。だが、策が無い訳ではない！」

Ｃオライオンは各種銃器を折り畳み、突進！

「ンガアアーツー！！」

ヨダレを垂らし、雄叫びを上げる魔竜。

鋭利な爪を持つ腕を振るう！

その腕は大きく、勢いもある！

しかし、小さいボディのＣオライオンに回避は決して難しい訳でもない。

寸前で、体軀を反り、小さな隙間に潜り、回避。

次いで、マグナム砲身下に置かれた隠し武器「アーミーナイフ」を飛び出させる！

ハンドマグナムの先へ伸びたナイフを、自身の真横に位置する魔竜の手の甲へ突き刺す！

だが、鱗は堅く、ナイフも浅くしか入っていない。

しかし、逆に言えば“浅くは入った”。

ならばと、Ｃオライオンは更に力を加え、完全に突き刺した！

「さて……。内部への攻撃はどうだ？」

魔竜は悲痛の雄叫びを空間に響かせた。効果アリ。

相手が苦悶中である隙に、突き刺したまま、真つすぐＣオライオンは駆け抜ける！

魚を捌くかの如く、魔竜の鱗を抉っていく！

魔竜は悶え、苦しみの咆哮を響かせる。

ある程度は決り進んでいく……。

しかし、腕間接部でつかえる。

筋肉が緊張しており、硬くなっている部分な為、切り裂く事に限界があったようだ。

「チ、ここまでか……」

魔竜の腕を蹴り、突き刺したナイフを引っかく！

次いで、今まで使っていなかった武装の、右腕シールドを折り畳まれたスナイパーライフルを展開していき、ゴーグルを目元にセツト！

右腕部スナイパーライフルの反対の左手に持つマグナムを連結させ、射撃準備完了！

……ターゲット、ロック・オン！

決り開かれた内筋肉部へ精密射撃を放つ！

一閃の光弾が飛翔！

ピンポイントヒット！内部攻撃を成功させた。

「グウォアーツ！　グォーン！」

尻尾をバタバタさせ、悶える魔竜。

着地するメタリックブルー＆ブラックグレーの狩人型TD。

「よし……。内部から攻撃は効果的だ」

手応えのある攻撃。突破口を掴んだ。

敵が痛み悶えている間にスナイパーライフルの精密射撃を露出された筋肉へ容赦なく撃ち込んでいく！

更なる痛み！

唸りを上げ、更にもがく魔竜！

その拳動は激しく、大きくなり、長い尻尾を周辺に振り回し、ピルを叩き潰していく！

Cオライオンにも荒ぶる魔竜の尾が迫る！

「クッ」

足の裏と下へ伸展した脚部ライフルでコンクリートを蹴り上げ、襲来する尾を飛び越える。

Ｃオライオンはそのまま、魔竜の挟まれた筋肉へ射撃を見舞う！
一気に攻め込むＣオライオン！

コンバートショットを相手に完全に撃ち込むまで、遠くから精密射撃を続けるほうが堅実のようではあるが、悶え、動きまくる相手な為、その戦術は続きそうにない。

その為、やや接近しての乱射攻撃を試みた。

が！ 相手〓魔竜は鱗を裂かれていない、もう片方の腕を伸ばし、
Ｃオライオンを捕らえんと掌を向ける！

そうはいくか！

空中待機中のＣオライオン、胸部のベルトライフルを展開！

ヌンチャクの如く、魔竜の掌へ叩く！

双方弾かれる！ が、魔竜の指２本がベルトライフルの先端を掴む！
捕まる訳にはいかない。Ｃオライオンはベルトライフルを胸部から
パージする！

更にベルトライフルを自爆させ、その間に２丁のマグナムで相手の
眉間へ牽制乱射！

目元と掌に負ったダメージに、悶え狂う深大寺魔竜！

カウンター攻撃をくれてやったＣオライオンは誰も居ない道路へ着
地。

無言で新たな策を思案するテット……。

Ｃオライオンを退却させる。

真っ直ぐ道路を、ひたすら逃げるＣオライオン……。

テットはチラと、後方を確認。

理性を取り戻し、魔竜は追撃して来る！

「……よし！」

テットの意図通り、敵竜は追尾して来た！

走りながら、次の手〓右腕に固定されたシールドをライフルモ―
ドにし、ゴーグルをツインアイにセット！ 進展したライフルから
トリガーグリップが出現し、それを掴む。

スナイパーモードに！

一方、追撃しながら、口内に火炎を充満させる魔竜・深大寺！
真っ直ぐ逃げる青いロボットをピンポイントで狙わんとする！
そして、火球放出！

青い機影目掛け、猛進降下！

「これを待っていた！」

Cオライオンは急ブレーキをかけ、真後ろへ向く！

長く伸びたスナイパーライフルの砲身が火球中央へ狙いを定める！
が、そのスナイパーライフルを放射する訳ではなく、レフト＆ライトの、シオルダーマシンガンとレッグミドルライフルをスナイパーライフルと同方向へ伸展！

こちらの4つの銃口が電光を放つ！

4つの砲身からの連射が火球と対決！

只ならぬ勢いの総射が数秒足らずで、火炎の弾丸を打ち消した！
消滅した火球の先にはガツトリ口を開いた魔竜の姿を確認！

——— 今だ！！！！

Cオライオンのゴーグルモニター……魔竜の口内に狙いを定める！

「……フィニッシュだ！」

ズン！ 射撃がぶれぬよう、一層強く踏み込む青い鋼鉄の足。

上斜め25度！

計算された射撃が駆け上がった！

……しかし、標的〃魔竜は次弾を作らんと、口内に火炎を溜めていく……。

間に合うか……！？

間に合う？

それは違う。

結果として、内部へ攻撃を与える事が狙いだ。

ビーム弾は魔竜の開いた口へ突撃！

蓄積されていく火球へと飛び込む！

しかし、ド真ん中へは進まない光弾……。サーチングゴーグルで判明した、最も強力なエネルギー中心部の中央を避け、まだ中央に

比べ微弱な側面の火球を貫き、喉へ突き刺さる！

「ングオオオーツ！！！」

クリティカルヒット！

今まで以上に激しく悶える魔竜！

しかし、念の為、Cオライオンは可能な限り、魔竜の口内へ射撃の雨を放つ！

攻撃を喰らう一方の魔竜は次第に身体が縮まっていく……………。

鱗が人肌になっていく……………。

吐血し、片腕に切り傷を負った深大寺が、膝をついた。

「く……………」

彼の身体は徐々に0と1に崩壊していく……………。

抵抗プログラムを打ち込まれていたのか、データ化の進行速度は通常よりも遅い。

しかし、負傷&データ化進行と、苦しい状況に変わらなかった。

「戦略で俺に勝てると思うな」

Cオライオンがスナイパーライフルを構えたまま、深大寺の前に冷然と立つ。

言うまでも無く、チェックメイトである。

「ふむ、やられたよ……………」

今にも消滅しそうな、しけた顔で深大寺は座り込んだ。

戦意などナノ単位にも無い様子。

「嫌なものだな……………。何をやっても、結局恵まれし者が優位に立つのは……………」

Cオライオンは蒼天の空を見上げ、冷然と呟く。

「？……………まあそうだな。我々RPが勝利しても、優位に立つ人間が代わるだけだ。かといって、他に現状良化するアイディアは私には浮かばない……………。恵まれなかった人間がルールを作る立場に回れば、少しはマシになると賭けてみたんだ」

「……………そうか。中々良策は浮かばなかったか。ならば、少し休んでみればいいさ。データの世界〃ヴァーチャル無人島生活は孤独では

あるが、意外と楽しいかもしれないぞ」

「ほう、ならば、快く向おうかな？」

「そこでじっくり考えればいいさ。自分がどうするべきかを……。
答えを導き出すのはあんた自身だ……」

「……だが、最後に1つ、言わせてくれ」

深大寺は最後に問う。

所有者の顔も年齢も分からぬ青色の鉄機へ。

「何だ？」

「現実には恵まれた者勝ちだ。私は死んでもこの事実を許す気は無い」
「奇遇だな。俺も“肯定は”しない……」

枯葉が散るかのように、深大寺は失笑した。しかし、何処か爽やかでもあった。

「フ、君は最後まで誰の味方なのか分からん奴だな……」

「俺は誰の味方でもない。不条理や最悪の事態を潰す……それだけだ。特定の人間など、救う価値など無い……」

「フハハ、君はこれから何をしてくすんだろうな……」

もはや原型など留めていない、0と1の全身タイツを着込んだ人影のような姿の、深大寺に突き刺さるメモリーカード。

ヴァーチャル無人島と称されし場へ誘われた……。

—— 深大寺は目を覚ます。

聴こえる漣。肌が認識しているもの〃砂浜。

海辺に深大寺は寝そべっていた。…… どうやら、ここがデータの
世界らしい。

ふと、腕を見ると、完全に修復されている。

原理は分からない。深大寺は理系の知識には疎い。

それでも、これから暫く無人島暮らしのようなことをする事だけは分かる。

取り敢えずは砂浜で昼寝することにした。

今、この世界では昼かどうかは知らないが。

そもそも、朝昼夜という概念がココにあるのかすらも不明だが。
深大寺は今迄に積もりに積もった疲れを睡眠という形で破棄し始めるのであった……。

コンクリート上に落ちた深大寺の眠るメモリーカードを凝視する
Ｃオライオン。

「疑似無人島暮らしを楽しむか否かは本人次第……か」

青&黒のＴＤはメモリーカードを掴もうと、両手に握るマグナム
をホルスターに収納しようとする。

が、亀裂が走り、マグナムのナイフとレッグミドルライフルが割れ
落ちる。

……戦闘で負担を掛け過ぎ、限界を来したようだ。

02

場所を移し、森林公園で戦闘を繰り広げるＬシュヴァリエとウィ
ザースロット。

ゾンビの如く、次から次へと湧いて来る超能力者の刺客相手に、
長期戦を強いられていた。

最も回復値が高い２機を持ってしても、しんどいものがあつた。

ヨシヒロは挑発的に人差し指を内側へ踊らす。

「来なよ！ このヒーロー、相馬ヨシヒロとその愛機、Ｌシュヴァ
リエが君らの怒りの捌け口になってあげようじゃないかつ！」

閃光の騎士は屈辱・無念・怨念を浄化せんと聖剣を振るつた……。

バツバツと斬られていくエスパー達……。

ノリカ、ウィザースロットへ襲来する敵陣。

「俺達は勝ち組共を貶めないと気が済まないんだよ！」

「恵まれた環境だけのヤツラを潰して何が悪い！」

彼ら、異能復讐者は修羅の形相で、攻撃……。

カードビットとニードル攻撃を駆使して、応戦するウィザースロ

ツト。

「あゝもう！ あたしだって恵まれた奴に潰された事、あるっての！ でも、気にしないようにしてるっつーの！ 忘れるしかないじゃん！ いつまでも妬み・恨みと、グジグジ言ってんじゃないっての！ 前向け！ 前へ！」

ノリカはいいい加減ブチ切れ、手早くキーボードを叩く！

カードビットは陣形を作り、今回は巨大蛇のような形となる！

「カードフォーメーション、カードバイパー！」

真っ直ぐ一列になったカードはそのまま、直進！ 敵の攻撃を大蛇の如く、唸りながら、回避し、高速で巻きつくように相手を切りつけていき、あっと言う間にデータ化という名の毒を噛み与えた！ 次々と、周辺の敵をメモリーカードへと拘留していく。

戦っているのはこの2名の操る2機のみ……。

居ないのである。

居たハズの味方機、エンゼクロスが……。

03

Dr毒島は自身の研究室で、失望の真っ只中に居た。

「やれやれ、まさか、深大寺君まで……」

Dr毒島、椅子に腰を降ろし、コーヒーを啜る。

彼の目はまだ曇っていなく、舌舐めずりを行う。

「……しかし、まだ全滅した訳ではない。たった5機で、どこまで踏ん張れるかな？ そろそろ疲弊の色が見えるハズだが……」

Dr毒島製の衛星カメラ……。それぞれの戦闘を撮影している。部屋にある巨大なモニターにて、全ての戦況を眺めているのであった。

「いえ、“全滅する前に”勝ちます」

——この部屋にはDr毒島しか居ない。

その筈だが、謎の電子音声が耳に入った事実。

Dr毒島はコーヒークップを机に戻し、不機嫌な顔を形成。

エンゼクロスが目の前に出現していた！

Dr毒島はいきなりゆっくりと晒し出す。

「アッハッハ！ 君は何を考えているのかね？ こんなトコに来てどうする？ 仲間と共に戦わなくていいのかい？」

「大丈夫です。王手を掛けに来ましたから」

Dr毒島は怪訝な顔をしてみせた。

「……どういう意味だね？」

眩しい純白なボディを持つ天使型ロボットは穏やかながらも、核心めいた口ぶりで返答。

「ここにあるからです……。超能力を遮断する装置が」

「何を根拠に……」

Dr毒島は頬に皺を増やし、失笑。

エンゼクロスは首を左右へ1回ずつ移動させる。

「……それはあり得ません。だって、それが無いと貴方は飼い犬の 에스パーに噛まれますから……。頭のいい人がそんな配慮が出来ない訳がありません……」

ミヤはテツトの作戦指示を受け、今、ここに愛機を投入させた。

……それはヨシヒロとノリカの正体を散策部隊が発見した時のである。

鳳ラボラトリにて、その事を知るテツト・コウスケ・ミヤの3人。

「大変！ 助太刀しなきゃ！」

ミヤはキーボードを叩こうとする。が、

「待て！」

テツトの強い声色の指示にビクツとなり、愛機の出陣を止めるミヤ。

「これはヤツラを全滅させる又とない機会だ……」

「えっ？」

「どういう事だよ？」

ミヤとコウスケは意味の言及を求めた。

テツトは全て語った。

ヨシヒロ・ノリカの姿を敵に発見された場合、敵は全戦力を駆使して、ヨシヒロ・ノリカを捕らえんとし、王手を掛ける事を。

テツトは逆にこれを利用した策を述べた。

- 1、ギリギリのところでヨシヒロとノリカを助ける。
- 2、暫し、執拗に現われ続ける敵兵と戦う。
- 3、しかし、手数が少ないこちらは持久戦になると不利。
- 4、なので、ある程度のところから敵を倒さずして、勝利する必要がある。

「って、倒さず勝つって、どうやるんだよ！」

「至ってシンプルだ。Dr毒島の持つ、エスパー達有能力停止装置を奪う事だ……。ステルス衛星機を通し、その存在は確認してある」「ホントかよ!？」

「でも、それをどうやって奪えば……」

「忘れたか。これからヤツラがヨシヒロ達を執拗に攻めて来る事を」「コウスケ、ミヤはきょとんと沈黙。」

「敵は総動員でこっちへ潰しに来るという事は、逆にDr毒島の方が無防備になるという事だ……。チャンスなんだよ、これは」

ナルホド！ と、コウスケとミヤは脳に衝撃を受けるのだった。

……そして、現在。Dr毒島研究所内。

エンゼクロスはアローをDr毒島へ構える。

「ンフッフッフ……アッハッハッハ！」

唐突に背中を曲げ、笑い悶えるDr毒島。

「そうだねえ。正解だよ。持っているとも。キャンセルを！
Dr鳳君の孫娘さん！」

「……」

“自分自身を特定された”。ミヤは背筋が凍った。

全滅を防ぐ為に、念の為散開する指示を受け、公園の女子トイレ内に潜伏してエンゼクロスを操作していたミヤ。

そんな彼女の居るトイレのドア前にDr毒島がテレポーションした。

彼はドアをサイコキネシスで粉碎し、ミヤと無理矢理対面した。

「ひゃっ！ やはりあなたも……。超能力を……」

ニタリと不気味な笑顔を浮かべ、舌舐めずりをするDr毒島。

「自分の造ったものを、自分に使わないなんてオカシイだろ？」

「で、ですね……」

「そして……。更に強力な能力を……。自身に注ぎ込むのだよ！」

Dr毒島の身体が膨張していく。

深大寺の魔竜化に似た現象……。Drの場合は機械的な軟体動物のような存在へと変化していく！

膨張・変貌していくDr毒島の身体はやがて、トイレそのものを破壊するのだった。

その衝撃にミヤは吹っ飛ばされる。

地面に叩き落され、痛みに耐えながら、上半身を起こしていくミヤ。

「……たたたた……。あれは……！」

衝撃の物体を目にするミヤ！

機械化された蛸……。というよりは、インベーターのような存在が触手をくねくね動かせ、上空に浮遊している。

これがDr毒島の変身体である。

「驚いたかね。孫娘さん。これが私のもう1つの姿、ゲノ・ベーダーだよ……」

呆然と変わり果てた科学者の姿を見上げるミヤ。

「ゲノ……ベーター……」

驚いているのも束の間、ゲノ・ベーターの触手が襲来！

ミヤの身体を拘束した！

強く縛られ、悶えるミヤ……。肉感溢れる太股・肢体が激しく攻め立てられる！

「んぐっ……あぁっ！」

「ふっふっふ、詰めが甘いよ孫娘さん……」

「い、いつから……私の正体を分かっていたんですか……？」

ミヤ、苦しみながらも、ゲノ・ベーターへ問う。

「簡単さ。私は君のお爺さんと知り合いだからねえ。君のお爺さんが作れそうなものくらいお見通しなのだよ」

「も、もう一つ。どうして、正体を掴んでも今の今まで攻めて来なかったのですか……？」

「ふむ……君は勘違いしているようだ……。私は深大寺君達にチャンスを与える「提供者」であって、「仲間」ではないのだよ……。彼らの戦いは彼らで決まなくてはならないのだ」

複数の触手に絡み着かれ、身動きの取れそうに無いミヤは無言で聞き入る。

「……しかし、私の大事な防犯グッズを奪おうとなれば、話は別となる……。つまりは、そういう事なのだよ」

縛り上げる痛みに耐えるミヤ……。

傍から見ればそうだろう。

しかし、実は逆転する為の抵抗をしている。

彼女は咄嗟に両腕をクロスし、Sボードを抱きしめた。

そして、現在は触手の縛り上げに歯を食い縛り、抵抗しながら、Sボードの操作に乗り出しているのであった……。

狭い空間内でミヤの小さな指が逆転すべく、あくせく動く。

——そして！

エンゼクロスはDr毒島研究所から姿を消し、触手の真横に颯爽登場！

アームアローを前方に畳み、シザーモードにして、一気にバツサリ触手を切断――！

コンクリートへ落下するミヤ。

触手がクツシヨンとなり、痛手は負わなかった。

即座にミヤは纏わりついた拘束力の無い触手の先端部を払い除け、立ち上がる。

切断され、一気に半分ぐらいの短さになった触手をうねうね動かすゲノ・ベーター。

「ふむ……やるではないか。流石Dr鳳の孫娘……」

「あの……」

ミヤは穏やかながらも、メカインベーター化した科学者を睨み上げる。

「何だね？」

「お爺ちゃんと比べるの、止めて貰えます？」

「何故だね？ 高スペッククロボットを作った博士の孫なんて誇らしい事じゃないか。君はその恩恵を享受しているのに、比較されるのを拒むとは……。随分と贅沢な話だ。深大寺君達はそういった優れた血統を羨んでいるというのに……」

「私はお爺ちゃんが嫌いな訳じゃありません……」

「では何故？」

ギョロつと見開くゲノ・ベーターの8つの目。

高圧的にゲノ・ベーターは詳細を追求した。

「科学者の血縁関係に生れなかったけど、私よりも優秀な技術力・頭脳を持つ人が居ます。その人と自分を比べて見ると、“科学者の孫のくせに……” って思っちゃいました。……でも、生れた環境と本人の資質が都合よく合致する事など、殆どないので、周りの人間と比べて卑屈になるのは止めようと思ったんです」

「ほう……偉大なお爺さんの事など忘れるというのかね？」

ミヤは真摯な眼力を持って、凜と主張する。

「違います……。私は私だという事です……。誰かの比較対象では

ないんです」

「フツハハハ……」

巨大なインベーダーは触手を奇怪に踊らせ、おどろどろしく笑い狂う。

「クハハハハッ！ それは逃げというモノだよ。人間は比較され、競争して生きていく。そんな考えは通用しないのだよ！」

切り取った箇所から、にゆるにゆると新たに触手が生え出す！

触手を再生させ、再び、触手が強襲！

エンゼクロス、純白に塗装された鋼鉄の翼を広げ、再飛翔！

高機動力を駆使し、触手を回避しては、切断！ 回避しては切断

！

と、いう動作を繰り返す！

Dr毒島の主張……。

ミヤは一理あると思う。

（こんな時、星渡君ならどう言うかな？ 色んな屁理屈捏ねて、言い返すんだろうな。……でも、あたしは星渡君じゃない。お爺ちゃんでもない。……だから、あたしの言葉で！）

ミヤは大きく潤んだ瞳を強く閉じ、顔を赤化！

「あ……あたしは！ ……5位でも1位になったと思ひ込みますっ！ それでいいんですっ！！」

はわわわ……。

自分は何を言っているんだろう？

更に顔を真っ赤にし、あたふたするミヤ。

そうしている間に、触手がエンゼクロスを掻い潜り、ミヤへと再び押し寄せる！

「しまったっ！」

ミヤは身体を縮こめる！

……だが、それじゃいけない。

皆戦っている。誰も助けに来る余裕はない。

自分がエスパーキャンセラー装置を奪う為の活路・陽動となって

いるから当然だ。

だから、自力で勝たなければならない！

仲間の為にも！ 祖父の為にも！

ミヤは大きく潤んだ瞳を、凜と開眼！

「エンゼクロスッ！」

エンゼクロスのツインアイカメラが発光！

ウイングハッチミサイルとリングミットを同時発射！

まずはミサイルを触手の群へ撃ち込み、威嚇混乱へ誘い、その隙にリングビットで破壊されなかった触手を拘束！ 触手攻撃を封じた！

一気に畳み掛け、エンゼクロス本体は猛ダッシュ！

ゲノ・イーバーへ飛び込む！

………触手はもう動かせない。

無防備なゲノ・イーバー本体へと飛び込む！

「ぬぬ、こう来たか。だが、詰めが甘いよ孫娘さん！」

頭部ハッチが反転し、キャプチャーが出現。先端から紫電が駆ける！

ゲノ・イーバーは射撃手段もやはり用意していた。

………しかし、苦手なりに1年みっちり訓練して来たミヤの敵ではない。

左右ジグザグに動き、敵の攻撃をすり抜けていく！

「ぐ、おのれ……」

ゲノ・イーバー、自分の攻撃を事如く回避する現状——焦燥に駆られる。

終いにはキャプチャーがビームアローに貫かれた！

この破壊により、キャプチャーの中「内部メカを露出させる。

——もはや、チエックメイトまでのカウントダウンが迫った状態。
エンゼクロスは小刻みよく、閃光の弓矢を連続で撃ち放った！

……同時刻。森林公園。

多勢に無勢の相手にそろそろ疲弊の色が見えていく。レシュヴァリエとウィザースロット！

レシュヴァリエはキャリバー・ライフルモードのトリガーを絞った！

数発発射！ 的確に3人のエスパーを0と1に分解！

そして、騎士TDの真横から攻め入る新たに4人のエスパーが！
彼らは腕を剣やノコギリに変え、斬撃を試みる！

ヨシヒロはキャリバーをライフルモードにしているので、そのまま射撃で応戦しようとする。

鉄鋼の指がトリガーを引く。……が、ビームの弾丸が放射されない……。

エネルギー切れである。

「んなつ！？ 参ったね、もうエネルギー切れか……。参ったね。」

もう手持ちのバッテリーは1〜2本しか無いというのに……。

言葉の通り、ヨシヒロの手の中にはバッテリーが1〜2本握られている……。

ウィザースロットも同様、両腕のバルカンがカラ吹き「エネルギー切れ。」

そんな事お構いなしに、まだまだ沢山居るエスパー共が飛び掛る！

……その時である。

崩壊していく……。剣やノコギリと化したエスパー連中の腕が。

戻っていく……。鋼や鋳物のボディが人肌に……。

エスパーであった人物達はこの突然現象に困惑。

「どうなっているんだ？」

「あれ？ もう1度やっているのに、腕が剣にならねえ。」

混乱の泥沼に溺れるエスパー一同。戦いどころではなくなつた。

きょとんとした顔で見合わせるヨシヒロとノリカ。

「これって、まさか……」

「やったようだね。君の親友……」

2人は二カツと笑み合う。

時を同じくして、港。

ヨシヒロ達側のエスパーと同様、能力が発動出来なくなった事に違和感を覚え、悶える超能力者達の姿があった。

「おっしや！ 鳳の奴、成功したようだな！」

廃工場壁の小さな穴から苦悩するエスパー勢の様子を確認するコウスケ、二カツとガッツポーズをする！

リモコン「超能力沙遮断装置をDr毒島研究室内で、押し終わるエンゼクロス……。」

ミヤは重い安堵の息を降ろした。任務を無事、全うした故に。

「全エスパー」は能力を失い、「只の人」となった……………」

ぐったり横たわるDr毒島。

彼の身体は無傷である。

——どうやら、変身後のダメージを元の体に比例させないよう設計されたものようだ。

しかし、老体を使つての戦闘……………」

相当くたびれたようで、暫く身体が動かぬほどの疲弊を持ったようだ。

「参ったよ……。やはり、罪滅ぼしもエゴだと、神に嘲笑されたか……………」

大の字に伏しているDr毒島へゆつくりと歩むミヤ。

「どういう意味です？ それ」

「私は金持ち生れのエリートで、順風満帆に生きてきた。しかし、相対的に自分より恵まれない人間を蹴落として来た……。歳を取つてようやく、彼らへ申し訳なく思つたのだよ」

「それで、恵まれない人達に超能力を……………」

「そつだよ。だが、殴る側と殴られる側が代わっただけ。善行にはならんかったよ……。それでも、彼らが満足してくれるのなら……………」

と、思ったのだがね……」

ミヤは黙り込んだ。

D rの言葉に肯定も否定もし辛かったからだ。

「えっと、ところで君、名前は何だったかね？」

「ミヤです……鳳ミヤ」

「ミヤ君か……。しかし、この作戦、君が企てたモノではないのだろっ」

「はい。それが何か？」

「その人物と対面したかったものだ……」

そよ風のような失笑をD r毒島は寝そべったまま、溢した。

縄で縛られた「元」エスパーの群集。

レシュヴァリエらの手によって、拘束されたのだった。

大多数とはいえ、異能の力を失った只の人間を捕らえる程度、T Dには造作もなかった。

例え、エネルギー消耗が激しい状態であってもである。

04

——ズシン、ズシンと鈍重な音を立て、鋼の巨人が歩き進む。

その機影がある場所へゆったりと歩んでいく。

その先……それは日本の大学でトップを誇る、大学の1つである。そのキャンパス内の人間達は突如襲来した巨大機影に恐れおののき、学内から逃げていく。

ベンチに座って雑談に弾んでいる男子生徒2名のみを除いて……。

「……で、兄さんも選挙に出馬する事になったのさ」

「菅田君のお兄さん、凄いなあ。尊敬しちゃうよ」

「いやあ、尊敬する程の事じゃないよ。政治家家系の金・コネを有効活用しているだけさ。ま、僕も大学卒業したら兄さん同様、金とコネで楽々と政治家コースだけどね」

「菅田君、羨ましいなあ」

「光井君、航空会社社長の息子の君がそれを言うかい？」

「言うよ。大企業だって、何時潰れるか分からない御時世なんだし」
「とか言いながら、沢山の資産はあるんだろ？」

ニヤケ顔で菅田は光井を肘で小突く。

「まあね。ぶっちゃけ、ウチには働かなくても一生遊べる資産はあるかな？ アハハハ！」

政治家一族の1人「菅田と、航空会社社長の息子」光井の、超お坊ちゃま2人がゲラゲラと笑い、手に握っている缶ジュースを飲むとする。

――が、この2人の背後に襲来する1つの巨大な影！

全長4メートルそこの巨大なロボット1機と、その機体の肩に乗っかり、コントローラーらしきものを持っている人物を確認。

突如、巨大ロボットが来たという、とんでもない状態を目の当たりにし、ジュースを溢し、咄嗟にベンチから離脱する2人。

「うおおー！」

「ロ、ロボット！？ こんなモン、ウチの工学部、造ってたっけ？」

「いや、流石に学生の立場で、こんな巨大な物を作るのは無理だよ
菅田君」

「じゃ、じゃあ、何これ？」

「教えてあげるですよーん！」

巨大ロボットの肩に乗り、コンローラーを持つ男……。ド派手なゴールドのリクルートスーツを身に纏った胡散臭そうな男がいやらしく口を開く。

「これぞ、私目の傑作、クラオカ丸ですよーん！ お前らにはあゝ、エスパー仲間解放の為にいゝ、人質になって貰うのですよーんだ！」

菅田と光井を覆う影が大きくなっていき……。

「うわあーっ！！」

エリート育ちの大学生・菅田と光井は巨大な鉄鋼の手に握り締め

られた！

「ぐふふのふ」。私、エスパーの力を失いましたが、失うだ〜いぶん前からクラオカ丸を造っていたのですよ〜ん。超能力でチャチャーッとね！でもって、この大学の近くの廃墟にコイツを隠しておいてたんですよ〜ん！」

「エ、エスパー……？」

ハツと菅田は思い出した。

政府を襲撃したり、スポーツエリートに暴虐を加えようしたり、最近話題の厄介者。

エスパーテロ軍団の一味。

しかも、ジャックしたテレビ映像に映っていた1人ではないか！「そうか！お前はジャックされたテレビで、えげつない紙芝居やつてた奴！」

「その通りい〜！私、倉岡と申しま〜す」

にたにたした顔で自己紹介する倉岡。

位置的に彼の顔は影となっており、一層不気味であった。

「……にしても〜。お前ら〜。さっきの話、聴いちゃいましたよ〜ん。祖先の金で一生遊んで暮らせるとか、コネで楽々就職とか、いい御身分だよん……」

突如、何を言い出すんだこの人は？

クラオカ丸に握り締められた菅田と光井は怪訝な顔をする。

「わったくしはねえ〜、金持ちや世襲のエリートに対し、悔しい思いをした事があるんですよえ〜。あ〜、今思い起こすだけでも、腹立たしいつたりやありやしませんよん！」

途端にクラオカ丸の肩に座っている倉岡は表情の読めない顔で、立ち上がる。

「かー！冗談じゃないですよん！業績に大差無いのに、学歴エリートやコネ持ちの方が出世するんだよん！こいつらも、社会に出たら自分より不利な条件の奴を見下し、ずけずけと良い席座るのかあよ〜ん。あ〜ヤダヤダッ！！私はねえ、純粹に努力して功績

を残した人は尊敬するよん。けど、優位に立って功績残すのは許せないよおん！」

すると、いきなり菅田達へ倉岡は唾を吐き始めた！

「カーペペペ！ 唾ペペペのペー！ お前らなんか、唾塗れにしてやるもんねーだ！」

唾液の豪雨を顔に放射され続ける菅田と光井。

唾を掛けられて嬉しい人間など、普通は存在しない。

嫌悪100%を顔で表示する2人であった。

「うわ……。小学生でもこんな事しないぞ！」

「俺達があんたを蹴落とした訳じゃないだろ！ 言い掛かりも大概にしてくれ！」

正論と言えば正論である。

カチンと来た倉岡は更に激昂する。

「何ですとぉー！ さっきからずけずけとぉー。立場全然分かってないよん！ おゝ前らなゝんか、ここの校舎に顔を引きずらせてえゝ、顔面崩壊させちゃうおゝんだ！ 皮膚が抉られ捲くつた血塗れの顔……。たゝのしみですねゝん！」

クラオカ丸の2人を掴んで腕が上がっていく。

壁に引き摺られ、顔面皮膚が引ん剥かれ、血塗れのグロテスクな顔にさせられる……。

想像するだけで、おぞましい。極端に青褪める菅田と光井。

「うわぁー！ 止めてくれーっ！」

「金なら幾らでもパパに出させる！ それか、ウチの社員にして、好待遇な環境を与えるよ！ だから！」

恐怖の渦中……。裏返った声で抵抗を訴える菅田と光井！

「むゝだ、無駄ぁ！ 私はねえゝ、お前らなんかに飼い馴らされたくないんだよゝん！ 寧ろ、お前らを支配するんだよゝん！ 深大寺さんの分までお前らを討伐しちゃうモンねゝだ！」

クラオカ丸、校舎の壁目掛け、2人を握った腕をスウィング！

が、その時……輝く一閃が駆けた！

電光の弾丸が横一列に並び、クラオカ丸の腕を通過！

菅田&光井の握る手が切り離された！

更にややオールバック気味に髪を逆立てた青少年が、鋼鉄の巨大な手に捕らえられた2人を蹴り飛ばす。元々、ゴロゴロと転がって行っているのだが、蹴りを入れる事で菅田と光井をこの場から、より遠ざけた。

倉岡は頭を掻き、ショックを受けた。

「ムキキのキー！ おんのねえ」

クラオカ丸から降りた倉岡は鼻息を荒くし、齒軋りする。見やつたその先……。

破損跡のあるメタリックブルーのメインボディーが光の反射で輝く。

威風堂々とマグナムを向けたCオライオンが立ち構えていた！！
「お前は世襲エリートが嫌いだからな……。こういった所へ来ると容易に予想出来た……」

「むむ？ 人間の声？ まあさか……！」

真横から響いた声に、うねった眉毛の顔を向けた倉岡。

両腕を組み、仁王立ちしたテツトの姿がそこにあつた！！

「お前1人だけ、一度も確認出来なかったからな……深大寺を倒した後、探してみたのさ」

「くうう……お見通しですかよん……。んんっ？ チミはそついやどつかで……？」

脳内の記憶を逆再生していく倉岡。

……あつた！

以前、自分はこの男Cオライオンの操縦者に相当する人物を勧誘していたのだつた！

「ぬぬぬのぬー。星渡テツト君でしたか……。こんな事になるなら、踏ん張って勧誘しておきゃ良かったですよん……」

テットはアンニユイなフェイスで、失笑。

「無理だな。他人の感情は戦略程度で制覇出来ん……」

苛立ち、齒軋りする倉岡は自慢の愛機、クラオカ丸の肩から飛び降りた。

「こうなったら、勝負ですよん！」

「最初からそのつもりだ……」

……と、言った割に、何故かＣオライオンは消え、データとなつて、テットのＳボードへと帰還される。

「ちょ！ 言ってる事とやってる事が違いますよん！ お前、私を舐めてんのかですよん！」

テット、スカした笑みを持っている……。

「戦うさ……但し、相手は……」

テットの持つＳボードからデータの信号が放出される。

何だ、一旦戻しただけか。

と、思われたが、違う……。

Ｃオライオンとは似てはいるが、異なるシルエット……。

そのシルエットが０と１から、実体となっていく！

「こいつ、テンペストオライオンだ……」

【Ｔオライオン】……Ｃオライオン同様、メタリックブルー＆ブラックグレーのボディカラー、クリアブラックのセンサーパーツを持つ、後継機に該当する機体。

武装は従来のマグナムを強化した、三連銃・デルタマグナム。

シオルダーには背中からバインダーが伸びており、その先にシールドライフル？がマントの如く、垂れ下がっている。頭部にイヤホンのような形の小型ピストルを装備。

更に、胸部は巻き付いているベルトライフルではなく、チョッキのようにピストル２丁を左右対称に羽織ったような造形となっている。

脚部の折り畳み式ミドルライフルも、銃口を二連銃口＝ツインライフルとなり、総じてグレードアップされたＴＤである。

ムンクの叫びの如く、両頬を押し、絶叫する倉岡。

「ゲッゲッゲーツ！ ここに来てニューマシンですかよん！ 最悪だよんホント……」

テツトは自信たっぷりの顔でTオライオンに親指を向ける。

「こいつは俺「だけ」で作ったマシンだ。予備戦力及び、他人の手を借りたマシンを使えばなしというのが癪なので造っておいたモノだ。さて……お互い、自分の造ったマシンで勝負といこうじゃないか」

「な、成程……そういう演出ですかよん……。よくまあ、造ったですよん」

「丁寧に説明してやるよ。こいつ、Sボードは物体をデジタルデータにしたり、その逆も出来る。つまり、他の金属を取り込み、修復や製造が可能だ。その応用で、新たに作成した設計図を基にあらゆる金属を取り込み、新たなマシンを造ったという事だ」

余裕綽綽の顔で説明するテツト。

恐れ驚く倉岡は、思わず、1歩2歩、後ずさりする。

「ななな、なんつー裏技だよん。こいつ頭回り過ぎるよん。……けど、私負けませんよーん」

「勝負だっ！」

Tオライオンとクラオカ丸「テツトと倉岡の対峙……」。

クラオカ丸、先手必勝と言わんばかりに突進！

Tオライオン、操縦者同様、落ち着き払いながら、デルタマグナム、ツインレックミドルライフル、ショルダーバインダーシールドライフルを一斉総射！

速攻！ クラオカ丸の片脚を滅砕！

まともに歩けなくした！

こちらの方が先手必勝をもぎ取った！

「んげのげーっ!?」

倉岡、げっそりと青褪める。

……かと、思いきや、舌を出し、おどける。

「なぐんちゃってね！ 足なんか只のカッザリだよぐん！ ハイ、フット・パージ！」

もう片方の鋼鉄脚部を切り離し、その切り離された箇所からバーニアが噴出！

クラオカ丸は飛翔した！

「ほう……」

Ｔオライオン、射撃角度修正／上斜め３０度。再度一斉総射！

「同じ手は２度も喰らいませんよん！ おりゃ！」

今度は両腕をパージ！ 切り離された箇所にはキャノン砲が！

「喰らえですよん！ はい、ポチつとドカーン！」

倉岡は勢い良くコントローラーのボタンを突いた！

クラオカ丸、上空よりアームキャノン２問を発射！

熱光球がニューマシン・Ｔオライオンへと押し寄せる！

「うりゃ、うりゃ、うりゃーっ！」

興奮しながら操作する倉岡。

止む事なき、連続ビーム球攻撃！

Ｔオライオンはデルタマグナム２丁を突き出し、１つの四角形を

３つの三角形に「デルタマグナムの三連砲身を外側へ稼動させた！

そして、チタンシルバーの指がトリガーを絞る！

デルタマグナムの銃口より、無数の閃光弾丸が飛翔！

敵の攻撃を全て撃ち碎いた！

「ぬぬぬ、おんによれえ！」

脳から憤慨に包まれる倉岡は無造作にコントローラーを弄る！

クラオカ丸の胸部ハッチがオープン！

ガトリングが唸りを上げ、無数のミサイルが降り注ぐ！

「フッ、俺達に早撃ち勝負を挑むとは……。魅せてやれ！ Ｔオラ

イオン！」

テットは余裕綽々のまま、Ｔオライオンを操る。

デルタマグナムを構え直す嵐の星狩人！

度重なる弾丸の激突！ 激しい銃声音・爆発音が空間を支配する…

…。

爆煙が晴天を汚す……。

「や、やったかよん……？　とか言っちゃうとやってなかったりするのかよん……？」

巨大な煙が邪魔をし、Ｔオライオンを確認出来ない倉岡は煙内中央を凝視。

時間の経過に連れ、爆煙は引いて行く……。

そこには悠然と立つ、無傷の新鋭オライオンの姿を確認してしまつた！

「んげつ！　あれだけ撃つて、ノノノ、ノーダメージッ！？」

驚愕！　眼を疑う倉岡。

「違うな。全て撃ち落としたんだ……」

テツトは無表情で倉岡の間違った解釈を訂正。

「おんによれえ〜！　こうなったらあ！」

怒り狂う倉岡は新たな操作を実行！

クラオカ丸はＴオライオン目掛け、急降下！

「はいー、自爆スイッチ・オーン！　こうなりや、道連れにしてやるよ〜ん！」

クラオカ丸のコンデンサの色がグリーンからレッドへ変わる。

自爆モードになった！

Ｔオライオンは一步も動かず、待機……。

テツトは操作を一旦止め、沈黙する。

そうしている間に、Ｔオライオンの目前に自爆寸前のクラオカ丸が襲来！

そんな時だつた。

片方の三連銃・デルタマグナム外側砲身にある、３つのアーミーナイフが展開！

更に砲身がフレキシブルに広がっていき、実質、３つの爪＝デルタクローとなる！

そのデルタクローがクラオカ丸のアームを掴み……空中へ放り投

げる！

次いで、両手に握るデルタマグナム、ショルダーバイナードとレッグミドルライフル？をライフル展開！ 頭部イヤホン＆バストアーマーのピストルも銃口を向ける。

最後に額のゴーグルをツインアイにセット！ 確実に照準を定めた！

ターゲット…… ロック、オン！

フィニッシュを決めるべく、ネオ・オリオンショットが発進！

目標場所〓 敵機全身にオリオン座を刻み、貫いた！

大爆散！！！！

虚空にて、敵機クラオカ丸は跡形もなく散華した……。

画鋏に刺され、空気の抜けた風船の如く、表情がしおれていく・

萎えていく倉岡。

土下座体勢になる。

「ああ、怖い夢だったですよん……」

「ま、流石にやり過ぎだからな、お前らは」

土下座体勢の倉岡を見下ろす2つの影。

Ｔオライオンとテットである。

倉岡、体勢を変え、コンクリートへ座り込む。

「……でもやつぱり、恵まれた奴が勝つなんて納得いかないよん……。正直裏切られた気分だよん。チミも実は恵まれし存在。TDなんてモンを造る環境に居たねんてねえ」

「俺は……まあ、スカウトされたようなものだ。Dr毒島を止めようとして半ばで死んだ科学者の孫から未完成のTDを作ってくれてな。実質は殆ど俺がデザインし直したもので、Ｔオライオンに至っては完全自作だ」

「スカウトされた事は尊敬するよん。血筋だったら、ブン殴ってやるトコだったよん」

テツトは両腕を組み、両眼を閉じた。

「……まあ確かに、環境・他者など、あらゆる方面で生まれながらの恵まれし者ばかりが、あらゆる頂点にのさばるのは迷惑ではあるな。夢も希望もない……。ある連中が言っていた。『英才教育で幸福になるのは教育者・教育分野との相性が良かった極一部だけで、相性の悪い英才教育を押し付けられた者や、英才教育を享受出来なかった者を苦しめるだけ』だとな。これなら英才教育の無い中の競争の方がまだ気楽で、公平だ。敗北にも納得しやすいだろう。それか、本人がやりたい教育を全員に提供出来ればいいんだけどな」

「言えてるよん……」

「……まあ、仮に英才教育を享受出来るエリートを皆殺しにしたとしよう。だが、そうしたら、また別の連中がエリートになるだけだ。……いつその事、全ての子供を親元から切り離し、施設で教育させれば、チャンスは平等にはなる。だが、今度は実施する期間と対象者の年齢における世代間格差が生じる。結局何やっても格差なんてもんは湧いてくる……。ムナクソ悪いがな……」

「そうかよん……。チミはかなり考えているんだなあ」

倉岡は物憂げに橙へとなる空を見上げた。

「まあ……。生まれながらの恵まれし者を全員殺して良い社会になるのなら、とつくに殺しているさ……。TDの力を手にしようとした時、考えたんだ。この力を何かしら有効活用出来るんじゃないかってな」

テツトは不条理・鬱憤を嘲笑う。

哀愁を加味するかのように、鴉の鳴き声が木霊する……。

「しかし、チミ自身は悔しくないのかよん？ 私は君を優秀な人間だと思う。だけど、社会に出たら金持ち・コネ持ちの連中より冷遇や搾取されるかもよん。君は私や深大寺さんと同じような結末があるかもだよん……」

「……そうかもしれんな。俺には今のところ誇れるものとして、口ポツト開発がある……。それが、撃ち碎かれる事があるかもしれない

……」

倉岡は真剣に、テツトの語りを聞き入る。

「だが……俺は恵まれた環境で優位に立つ、ズルして勝ったセコイ奴ら如きに負けたとは思わん！俺の勝負も勝利も俺が勝手に決めるまでだ！」

テツト……彼は猟奇的で、勇猛な笑顔を惜しみなく示していた。彼はまだ社会に出てもなければ、最終学歴も決定していない。しかし、自分はエリートにはなれないだろうとは予想出来る。だからといって失望して生きていくのも癪だ。

ならば、何にも屈しないでいよう……。

他者程度の向かい風などに、揺らぐ事などないでいよう……。全てを嘲笑い、己に誇りを持つ。

——それが、星渡テツトなのである。

「皆、勝手にぼざけばイイんだ……。自分の事をカッコイイだの、賢いだの。主張は自由さ。「不利な環境の割に自分はここまでやれた」と、胸張れる事だけあれば十分じゃないか」

テツトの溢した爽快な表情に呼応してか、気持ちのいい風がそつと吹く。

「そうかよん……。私、“チミみたいに生きてみたい”よん……」
倉岡はしけた面で溜め息し、重い腰を上げ、ゆっくりと立ち上がった。

「それじゃ、出頭でもしますかよん。どうせ逃げても無駄だし」

「そうか……。じゃあな……」

テツトはそう言い残し、夕暮れに消え去る倉岡を見送った。

——その遠くでクラオカ丸の手に握られたままの菅田と光井。2人はそろそろ脱出したく思い、この場に居る唯一助けてくれそうな存在「Tオライオンの使い手へ声を上げる。

「あ、あのー！ すいませ〜ん！」

この声は……？ と、反応するテツト。

クラオカ丸の手部に握られたまま寝そべっている政治家一家の1員
「菅田と航空会社社長の息子」光井であった。未だに身動きの取れない彼ら。

そこへ、テットとTオライオンが淡白に歩み寄る。

「あ！ 助けて下さい！」

「僕達、抜け出せないんです！」

「見れば分かる……」

テットは冷然と現状の感想を呟いた。

「ですよねえ。だから、助けてくださいよぉ」

菅田が媚び諂うような口調で頼む。

……しかし、テットの顔に親切心的な柔和さは微塵にも感じられない。

無言でSボードを操作。威力微調整を開始。

Tオライオンはデルタマグナム2丁を構え、菅田&光井に銃口3
×2＝6門を向ける。

休む間も無き乱射！

自分達へ放たれた射撃の嵐「テンペスト」に怯え、バイブレーション
といい勝負の震え行つ菅田と光井であった。

こ、ここ殺される……

かと、思いきや、破壊されたのは自分らを拘束していた巨大ロボッ
トの手のみであった。

「あ……。巨大ロボットの手を壊してくれたんだ……」

途端に気が抜ける2人。

風船が萎むかのように、緊張・恐怖が解き解されるのだった。

「な〜んだ、そうするんなら、最初から言ってくれれば……」
にやけながら、菅田と光井は上半身を起こす。

が、2人の額にTオライオンのデルタマグナム2丁の銃口がピタ
リと触れた。

「え……？」

硬い笑顔ながらも、焦燥・畏怖の汗を垂らす2人。

「あのー、拳銃、仕舞い忘れていますが……？」

「わざと仕舞っていないんだ」

テツトは高圧的に向こうの勘違いを訂正した。

菅田と光井、無理のある笑顔を振るわせたまま、その意味を問うた。

「……そ、それはど、どどという意味でしょうか……」

「お前達は勘違いをしている。俺はエスパーが蹂躪する社会を潰すのが目的であって、お前らエリートを救う為に戦っていた訳ではない……」

「オライオンの腕の向きが、移動し、トリガーが絞られた！

轟音……銃声音が轟く！

菅田と光井の間を三連ビーム弾×2が通過し、コンクリートに巨穴を穿った！

奇声を発し、2人は腰を抜かした！

遂には小便までも漏らしてしまう。

じわじわ湿る股間……。

20歳になったばかりの彼らにとってトラウマレベルの羞恥となった。

「エスパーテロ発生の元凶は、お前ら生まれながらに恵まれし者だという事を忘れるな……。お前らは祖先の恩恵で生きる以上、妬まれる覚悟を背負わなくてはならない」

「は、はいっ！」

「そ、そそその通りで御座いますっ！」

2人はバグったロボットの如く、何度も何度も身を振るわせ頷いた。

「だが……」

テツトは高い鼻を突き上げ、話を続ける。

「お前らが妬まれる覚悟を背負っても、妬まれる要素を破棄しても、苦しめる敵が現われるなら……。迷惑なだけの存在があるなら、俺がそいつを潰す」

放心状態。

菅田と光井は丸く口を開け、呆気に囚われた。

無音の空気が漂う…………。

ようやく、デルタマグナムを腰ホルスターへ収納するＴオライオン。

テットは愛機・Ｔオライオンを回収し、それ以上何も言わず、夕陽へ消え入った…………。

05

自首した倉岡ら以外〓深大寺らはしばらくの間、データ内で過ごし、改めて考えた結果、彼らも自首して刑務所生活を選んだ。

超能力を失った彼らは囚人としての生活を始めた。

テットらはＴＤを自分らが所持・使用していると民間にバレるのは面倒だと考え、自分たちは直接警察へ通報しなかった。

自分達の素顔を見た人物全てには釘を刺しておき、口封じ。

当面は謎のヒーローロボット・ＴＤがエスパイテロ組織を成敗したという事に落ち着くのであった。

その後、テットらはＴＤを操って世襲や英才教育の撤廃〓チャンスの平等化を働きかける運動の協力を仰ぐ。

テレビ・インターネットを通してその旨を発信した。

……しかし、この程度の事で社会が良化するかは分からない。

何らかの効力があるかは疑わしい。

無駄かもしれない。

だが、何か一矢報いる事が出来るかもしれない。

無駄じゃないかもしれない。

どうせ世の中は不公平だ。

どうせ同じ結果を平等に与える事は出来ない。

だけど、競争自体はゆるやかになってもいいハズだ。

英才教育という重荷ぐらいは破棄してもいいだろう。

少なくとも、英才教育をプレッシャーに感じ、苦しむ人・英才教育を受けられず、不利な状況の人間をなくせるだろう。

誰かが言ったように、気楽に・お遊び感覚の競争……。

青臭い事この上ない理想ではある。

だが、あるべき……かもしれない社会像への訴えに一役買えると思ひ、やらないよりマシな、「働きかけ」を試みた……。

E
N
D

EP・06 〈真の敵とは?〉（後書き）

ここまでで、話は一段落終了します。
ご感想・質問など、お待ちしております。

EP・07 〈龍帝の目覚め〉（前書き）

エスパーテロ組織の野望を阻止したテット達は日常へ戻る。

しかし、行き過ぎたこの時代の格差はなくなる事はない。

ある日、エリートお坊ちやまの【辰巳ガセイ】がテットの前に来る。彼はTD1つを高値で買い取り、エスパーから己の身を守った男である。

そんなガセイはテットに提案する。

「若者が不遇なこの時代を変えるべく、上の世代を一掃しませんか

？」

……と。

EP・07 〈龍帝の目覚め〉

プロローグ

深大寺率いるエスパーテロ組織による、エスパー格差化計画は謎の人型ロボット・TD5機によって阻止された。

あれから1週間が経過。

そのTDを密かに遠隔操作していた高校生・テツト、ヨシヒロ、コウスケ、ノリカ、ミヤの5人はいつもの日常〓学生生活へと戻った。

「ああ……。イイなあ……」

コウスケが教室の窓からうつとりとした表情で下〓グラウンドを眺めていた。

「な〜にがっ？」

ハキハキとした耳に残る声。

ノリカがドン、とコウスケの肩を叩き、コウスケの隣へ割り込んだ。

「うお、楠かよ……」

「何見ていたの？」

勢い良くコウスケの左側へやって来たノリカとは反対にミヤがひよっこりと顔を突き出し、コウスケの右側へ立つ。

「んあ……。まあその、何っつーか……」

途端に頬を紅潮させるコウスケ。

ニタリと胡散臭い魔女のような笑みを浮かべるノリカ。ノリカに勘が働いた。

間違いないわ。好きな娘を見ていたのだ。と。

「ぶっちゃけな。誰に惚れてんの？」

「んなっ!？」

凶星だった為、思わずよろけるコウスケ。

「え？ そうなのノリカちゃん？」

「いやあ、このリアクションが何よりもの証拠じゃん？ ま、あたしの勘に間違いはないし。さあ、大人しくぶっちゃけな！ 誰？ 誰に見とれてたの？」

ノリカは顔を近づけ、尋問という猛進をした。

この勢いに圧倒され、コウスケは恥ずかしそうに・もじもじしながら自白する。

「今……。バドミントンやってる……。泉谷美野里さん……」

生きのイイ魚を釣り上げた開放感がノリカとミヤの脳を満たす。面白いものみつけたと言わんばかりに2人はにやける。

「へえ、泉谷さんかあ」

ミヤはその泉谷美野里なる人物が居るとされるバドミントンコートへと視線を飛ばす。

細過ぎずも、太過ぎずもない健康的な身体に、外側へ撥ねたショートヘアの、少女。快活にラケットを振るい、スマッシュを決める。

実に眩い笑顔だった……。

その姿は太陽光の如く、他者へ元気を与えるような印象があった。

「あの子、バドミントン部なんだよね。別にエースって訳じゃないけど、部を明るくする元気な子って聴くよね……」

ぼんやりと、ミヤは校内評判を呟いてみた。

「そうそう、あの笑顔がイイんだよねあ」

「ふん、確かあの子彼氏は居なかったと思うけど……」

ピクリと耳を立て、コウスケは即座に首をノリカの方へ回す。

「何！？ 本当かそれ？」

ノリカは自信満々に鼻息を噴出し、親指を突き上げ、サムズアップ。

「モチ！ ノリカ様の情報網舐ないでよあ」。この学校の同級生女子・全ての彼氏持ち云々は知ってたんだから！」

「な、何故……？」

コウスケとミヤは疑問で寒くなった。

「……まあとにかく、このノリ力様に任せな！ あんたの恋、成就も玉碎もさせてやんよ！」

ドン！ ノリ力は両脚を大開きし、両腕を組む。

己が神と言わんばかりの上から目線態度だ。

「玉碎は勘弁してくれ……」

じとつとした目でコウスケは憤ましく訴えた。

そう、わいわい騒ぐ3人を遠くで大人びた目線で眺めているのが、イケメンと美男子の2人。

テツトとヨシヒロである。

「……だつてさ。ま、痛い目見なきゃいいけど……」

ヨシヒロは軽く息を捨て、その場でサクツと宙返り。

「イケメンヒーローツ、宙返りっ！ ……つとぉ」

テツトは両目を閉じ、両腕を組んで、冷笑。

「下らんな……。他人に幻想を持つなど……」

「へえ、ご尤もだねえ。でもそれは……他人そのものを信じるべきではないという事かな？」

ヨシヒロはわざとテツトと視線を合わせず、天井へ呟くように問いを口にした。

「……他人に任せるべき時は他人に任せるべきだ。だが、その場合他人が失敗する事を覚悟しなくてはならない。そして、他人の失敗を委託した人間が補うようにする……それが、巧いチームワークというものだ。だからこそ、他人に依存・幻想を持つべきではない。その場合だと他人の失敗・自分の思い通りにならなかった点を許せなくなる……」

「フツ、ナルホドね……。僕と楠さんの失態から相手を一気に畳み込むようにしたのも、そういう考えから出たものなのかなぁ。いや、はや、参ったねえ」

「……フツ……。頭の回る奴にしか勝利はないさ……」

「だといけどねえ」

ふと、テツトは窓の外へ視線を持っていく。

「……そう言えば、【ヤツ】はどうなっただろうな？」

「ああ、？000を買い取った【彼】かあ。調べてみるかい？」

「……いや、調べるまでも無い。なに、ふとヤツを思い出しただけさ……」

晴天だった空が段々と淀んでいく――。

EP・07

01 「龍帝の目覚め」

ここは西洋の何処かか？

いや、日本の敷地だ。

高貴な洋風の巨大な建造物――それは学校。

それも、有名私立ボンボン校に相当するソレである。
その体育館。

平均的なものよりも、大きく無駄に綺麗な体育館内。

ヒュッ！

バスケットボールが緩やかな弧を描き、バスケットゴールの網を揺らし、通過。

「く……、くそ……」

歯を食い縛り、無念に短髪の男「バスケットボール部エースの児島は顔いっぱいの汗を床に落とし、敗北を認めた。

目の前に居る、涼しい顔をして立っている少年に。

年齢は児島と同じの高2だが、年齢の割に童顔な部類。

しかし、背は175センチそこらで、幼い印象でもない。

その童顔美少年はクスリと唇を歪める。

「あゝあ、だから言ったじゃないですか。僕と戦うと屈辱を味わうだけだつて……」

嘲笑をわざと堪えてやっていますよ。と、云わんばかりに胡散臭い笑い堪えを交え、この童顔男子高校生は膝を付き、雪辱に凍結した児島を見下ろす。

彼は児島とは対称にあまり汗を掻いていない。

よほど児島より上の実力でバスケット勝負に勝ったと、試合を見なかった者でも分かる様子である。

「うゝん、僕、その気になればプロスポーツ選手になれる実力あるんですよ。でも、スポーツ以外に取り柄のない人達が可哀想だからスポーツは嗜み程度にしているんですよ。では、ここで失礼します。二度とスカウトも勝負も申し込まないで下さいね。貴重な時間を取られたくないので」

トドメに鼻での笑い・一瞥を贈呈し、童顔美少年は体育館を後にした。

そして、広大な校舎内を歩いていく。

途中、スーツ姿の中年男「本校教諭と遭遇。

「おお、辰巳君かぁ。聴いたぞぉ、この前の試験全て最高点だった？ いやぁ、教師として鼻が高いよぉ」

「いえいえ、僕は幼い頃から勉学・スポーツ・幻術においての英才教育を受けていた身ですから、この位の結果当然ですよ……。それではさようなら」

「おお……さようなら」

テキパキと澄んだ声での物言いに思わず圧倒された教師はそのまま、【辰巳^{タツミ}ガセイ^{ガセイ}】を見送った。

「ふむ……。辰巳ガセイ……。世界を股に掛ける大企業の一族だけの事はある……。か。成績優秀・スポーツ万能・爽やか美男子……。まさに完璧超人だな。彼は今まで何人に嫉妬された事だろうか？」
教諭が脳裏で呟くうちに、ガセイの姿は縮小。

関係者駐車場へと到着した。

「坊ちやま」

この時代の最も高級車であるとされるシュトラールという車前に20代前半そこのメイドが淑然と待機しており、ガセイが到着するや否や、丁寧に挨拶をし、後部ドアを開け、ガセイを車内へ乗せた。

メイドはシートベルトをセットし、ハンドルを握った。

高級車「シュトラール」は動き出し、この学園を後にした。

「坊ちやま、今日は如何でしたか？」

運転しながらメイドが後部座席で眠たそうな顔をしているガセイへ話題を振る。

ガセイは退屈そうな表情のまま口を動かす。

「いつも通りだよ……。あらゆるものに勝利する日常。まあこんな事恵まれた環境に居れば出来て当たり前。呼吸のように簡単な話です」

「そうですか……。そんな日々は退屈でいらっしゃいますか？」

「うん。そうですね。だけど……」

「だけど？」

「そろそろ、退屈では居られない事をやる時になりました……。そう、大革命です……。そうですね？」

「は、はあ……」

意味がよく分からないが、仕える主人の言葉。迎合しなくてはと頷いてみるメイド。

「アケミさん、貴方には言っていないせん。【彼】に言ったのです」
ガセイが問い掛けた先はメイドのアケミではなく、電子端末。

その電子端末——。

それはSボードと全く同種のものであった。

こちらはシルバー&レッドのカラーリング。

テット達5人の誰も所持していないタイプだ。

そのノートパット画面には竜人口ボットのようなものがあり……。

02

一方その頃。岩鉄高校では部活動を行う時間となっていた。

ノリカとミヤは家庭科部で菓子を作り、その菓子を食している。

料理の腕を磨きたいとか、真面目な理由はなく、ただ単にお菓子が食べられるという理由をだけで入部したこの2人は残る部員と共
にのんびりと所謂「スーイツタイム」を満喫していた。

—— コウスケの恋愛手助けを何とか言って置きながら、それを
忘れて……。

コウスケもその事は忘却していて、彼もサッカー部に励んでいた。
友、ヒデノリは自首し、刑務所へと離れた。

ヒデノリの居ない部活をココ最近は送っている。

正直、サッカーで秀でる事など不可能である事は重々承知である
コウスケ。

ではあるが、退部したいとは思わなかった。別にヒデノリの分までやらなくてはと気負っている訳ではない。ただ、サッカー自体は好きなので続けたい。それだけの理由であつた。

体育館舞台では演劇部が芝居衣装を身に纏い、演劇を行っていた。物語はギャング強盗モノ。

ヨシヒロは強盗団の一員を演じる。

「僕、警察役が良かったんだけどなあ。でも、強盗役もいい経験。まあいいや」

と、さっぱり決断し、ヨシヒロは体当たりで強盗を演じている。実に楽しそうに演技をしているヨシヒロ。気楽に物事を考えられ、何事にも楽しむ。

「こういう人間が生きていく上で得なのかもしれない一例」であつた。

そしてテツトはというと、彼は実は技術部に一応所属している。理由としては部活に所属しておいた方が色々なロボット大会に出場出来るし、他者と切磋琢磨出来るからである。

……しかし、本校の技術部は名ばかりの実質帰宅部のようなもので、各自勝手に好きなマシン作りに励めという放任的な体制。

その為、テツトは今日部室へは足を運ばない。

鳳研究所でやりたい事があつたからだ。

テツトは通学鞆を肩へ回し、下駄箱へと向つていた。

その途中の通り道。

進路相談室がある。

そこで張り出されている求人票を閲覧している学生2人。スリッパの色が緑なので3年生と思いき2人が求人票を見終え、絶望的な溜め息を振り下ろす。

「あゝあ、何処もヒデエな」

「何処も激務薄給の上、採用枠マジ少な〜」

「やっぱ進学だよなあ。それも少しでも偏差値高めの」
「だな」

「……でも、どの道就職はしないとダメなんだけどな」

「嫌だなあ。俺、今大学4年で就職活動している姉ちゃんがいるんだけど、メッサ大変そうでさあ。もう百社ぐらい応募してんだけど内定1個しか貰えねえってさ。その1個の会社もな〜んか、ヤバそうなのトコらしいし」

「うわあ〜。そういうの訊くと一生学生でいなくなるなあ」

「まあな。でも今思ったんだけど、今って少子化じゃん？ 何で就職の競争率、高けーんだろ？」

「！ 言われてみれば……。同年代の人間の数が少ないほど、ライバルが少なく、競争率下がりそうなのになあ」

「上の世代が降りないだけさ。まだ働かないと生きていけなかったりするからな。大人数の上の世代が席を譲ってくれないから、その分、若者の席が無い。それだけの話っすよ」

テツトは思わず、2人の会話に聞き入って、ぼそつと話に割り込んだ。
「んだ。」

高校3年生2人はテツトに注目。

「スリッパが青、お前2年かあ」

「ナルホド、上の世代がつかえているのかあ。お前よく知っているなあ」

「知っておきたくない現実ではあるが……。まあ他にも産業機械化により、必要な人材が減っている

のもあるだろうが。何にせよ、生きていける分の金を手にして生きて生きたいものだ」

「そうだなあ」

3年らは苦い顔で失笑。

どうしようもない事なので、笑う以外無かったのである。

「話割り込んですんません。んじゃ……」

テットは会釈にも届かぬ微小な頭下げをし、淡々と足を動かした。物思いに浸りながら、テットは歩む。

——やはり、格差というものは付き纏うか。

英才教育撤廃を謳っても何も変わらなかったこの世の中。

——いや、この程度で何も変わらないのは分かっていた。

かといって、暴虐的な……テロ活動的に訴えても意味が無いと看破している。

桁違いの戦闘能力を誇るTDを駆使し、無理矢理力づくで国民を従わせたという。

ある程度は従ったとしても、拒絶する存在は確実に出る。

英才教育の撤廃を突き詰めれば、家族破壊・全人類施設などで血縁を完全別離した制度にし、教育機会完全均等化するしかない。

テット自身はそういうシステムにしたいのは山々だが、従来の生態系を大きく逸脱する事から、反対派が多数出ると予想。

結局、国民が受け入れなければ如何なる施策も無意味。

無意味な事はやってもしょうがない。

だから、諦めるしかない。

……しかし、そうは言っても格差はあるより無いに越したことは無い。

生まれ育つ環境も、世代間も……。

ダメモトでも何か出来ないだろうか？ と、考えるのを破棄まではしたくないテットであった。

浮かない顔で歩んだ後、鳳研究所へ到着。

ここの鍵を所持しているのはテットとミヤ。

ミヤは無論、親族ゆえの理由だが、テットはこの開発設備が気に入った為、ミヤが

「別にいいよ。せつかくのお爺ちゃんの研究所、使ってあげて」と、予備鍵をテットに譲渡。

以後、テットは自由にココへ出入りしている。
室内に入り、一旦ジューズでも飲んで休憩でもしようとテットは思った。

ピンポン！

妙なタイミングで鳴った呼び出し。

ヨシヒロかコウスケだろうか？

……いや違う。

2人はまだ部活の時間だ。

ノリカとミヤでもないだろう。

ミヤは鍵を持っているのだから、勝手に鍵を開けるだろう。

俺がここで機械弄りに熱中していると承知している為、鍵を自分らで開けず、呼び出す可能性は極めて低い。

ならば、残る選択肢は……“アイツ”だ。

あまり会いたくないアイツ。

インターホン前へとテットは少し歩む。

ゴクリ、と息を飲む。

これは恐れではない。

緊張と警戒。

それらを持ってピンポンを鳴らした人間とのコンタクトを図る。

「やあ、お久しぶりです」

サラサラな髪に幼さ残る顔立ち……。

超エリート学校・学応高等学校の制服を着た、如何にも育ちの良さそうなこの青少年。

——それは。

「……辰巳ガセイ……」

「いやあ、助かりました。貴方が売ってくれたこの……」

スツとポケットより、シルバー&レッドのSボードを取り出すガセイ。

「TD?000、【リンドヴルムカイザー】をお陰でエスパーさん達からこの身を守れました。因みに彼らはきつーくお灸を据えさせた後、刑務所へ送りましたけど」

「そうか……。だが報告感謝しに來ただけではあるまい。用件を言え」

「察しがいいですねえ。……ではズバリお答えしましょう」
テツト、無言で目元を厳然と構える。

ガセイはニタリと口が裂けそうなほど、魔物の如く、唇を歪ませる。

「僕ら若者の敵、上の世代を一掃しませんか？」

「何……？」

テツトは驚愕に凍った。

「それはつまり……勝ち逃げ既得権者や年金生活者をデータの世界へ送るという事か？」

「ご名答。彼らが存在し、席を譲らない限り、若者には不遇な未来しかありません。そう、つまり金持ち・エリート・庶民・バカ、どの若者にも共通する敵です」

黙考するテツト……。

03

立ち話も何なので、近場の喫茶店へと移る。

ガセイとテツトは同じテーブル席へ向かい合い座った。

「僕の奢りです。好きなものをどうぞ」

「カフェオレにでもしておくか」

「そうですね。では僕はアイスレモンティーを1つ。以上をお願い

します」

「畏まりました」

ウエイトレスは注文メモを記入し、調理場へと去った。

注文の飲み物を待つ間となる。

ガセイはサラサラな揉み上げを指で巻いて遊び出す。

「いやあ、不憫でならないんですね。僕の家系がやっている辰巳コンツェルンの若手社員が」

「大企業の社員……一般的に見ればいい御身分に思えるが……？」

「そうでもありませんよ。年々激務薄給となっています。ウチの会社だけじゃなく、どこの企業にも言える事です。それだけでなく、今のご時世での若者冷遇と来たらありません。採用枠を狭められ、就職そのものが、難しく、例えなれたとしても地獄の激務が待っている。これはよろしくありません……」

「成程。だから上の世代を一掃すると。……だが、貴様のようなエリート様には関係ない話じゃないのか？ 貴様の場合、辰巳コンツェルンを次いで、貴様の実力で楽々と業務をこなせるだろうに」

「いいえ。僕一人が上手いっても無意味です」

「どういう意味だ？」

「正直邪魔なんですよ……。爺様・父様らトップを牛耳る存在がね。屈辱なんですよ。いつまでも、祖先の支配下に置かれるのは……頭角を現せられないのはね」

ガセイは全指を交差させた手に口を隠し、不気味な笑みを交え、そう述べた。

「僕にはコンツェルンで働く兄や姉がいます。彼らは優秀ですが、その価値に見合った評価を受けていません。それが居た堪れないのです」

額に指をあて、悩まし気な所作をするガセイ。

やや大げさな素振にも見え、テットには胡散臭く思えた。

——しかし、ガセイの云う事は一理ある。

現に不遇な若者は多く存在している。

「だからこそ、“この”技術がうつてつけなのです。……そう、データコンバートシステム。人間をデータで造られた擬似空間へ転送・転換させるシステム。要するに無人島創って移民させ、人口の均衡を測る訳ですよ。如何です？」

「悪くない……と、言いたいのが問題がある。どう世に促すかだ。受け入れさせるかだ……」

「問題ありませんよ。僕達の持つ……貴方が僕に売ってくれたTDがあればね」

「恐怖政治か？ それで巧くいけば苦労は無いが……」

皮肉めいた笑みでテツトは両腕を組む。

動じる事はなく、ふふふと、気品のある笑いを溢すガセイ。

「いいえ。もつと……別の手段ですよそれはまさにブロックバスター的な……」

余裕綽々。ガセイに渾身の策がある。

「ブロックバスター……。沢山の意味を持つ言葉だが、この場合、街一つ消し飛ばす爆弾のようなという意味合いか……。いいだろう。見せて貰おうか？」

ガセイの策を見物せんと、テツトは背もたれに背を預けた。

04

賢い奴は二度と同じ失敗はしない。

必ず対策を考えるものだ。

あらゆる業界の頂点に立つ存在なら尚更。

——とある高級料亭にて、辰巳会長と城戸総理が豪華和料理を食しながら、重要な会話を行っていた。

「いやあ、総理。上手くいきましたなあ」

ほろ酔いしている総理は洒落たこの店専用のおちよこにある酒を啜った。

「うむ。例のエスパイテロの片棒を担いだDr毒島……彼を逮捕し、

彼の残したエスパー化プログラムを我々は入手した……。これで如何なる敵が現われても悪阻るるの足りんだろ。一応はエスパー共の野望を潰してくれたあの謎のロボット・TDも我々世襲エリートをわざと甚振られるのを放置した……。100%我々の味方とは思えん」

「うむ。警戒するに越した事はありません」

「……しかし、幼稚ながらも試してみたくなるものだな……。己の身体に搭載した“超能力”を」

「ほお、総理はまだ使っていないかったですか。私は使っていますよ早速。歯車……いや、社員に喝を入れる為にね……」

「それは素晴らしい。特に若い奴はしごくべきですからなあ。あいつらは甘ったれている上に無能だからいかん。一日でも早く上の世代の為に身を粉にする歯車として完成されねば」

「当然ですとも。個性も感情もこの世に必要ない。ただ、ベルトコンベアーのように繰り返すだけでいいのだ。人生というのは……」

「ハハハツ、そうですね。ですが、辰巳会長、あなたの考えは少し狭量だ。歯車は若い男だ。そして……」

「若い女は愛玩奴隷……ですかな？」

皺の多い頬を笑いにより、更に皺を追加する辰巳会長。

その通りだ。と、云わんばかりに城戸総理は嬉しそうに首肯する。

【辰巳会長】……。

辰巳コンツェルン最高責任者にして、ガセイの祖父に相当する。

年齢もとくに定年退職してもいい頃合なのだが、自分より下の人間があてにならない・権力放棄などではつまらない為、今も尚居座り続けている。

【城戸総理】……。

総理とは言っても、数週間前に退陣して1政治家になっているが、愛称として総理と呼ばれている。

辰巳会長と城戸総理は学生時代からの仲で、互いが困った時助け合って生きてきた盟友である。

世間一般として非合法な方法であつても助け合つて来た……。

彼らは居座り続けるつもりだ。

支配し続けるつもりだ。

自分より上がいない。下しかない。

この“イイご身分”は辞められない。気分が良い。

それに長年エリートとして生きて来た2人は自分より若い人間など、全てにおいて劣つて見える。

馬鹿にしてしまう・自分が作り上げてきた政権・企業を任せたくない。

故に、彼らは居座り続けるつもりだ。

05

夜7時ごろ。

多くの人間は適当にテレビを見ながら夕食を行う時間帯。

そう、日本各地の殆どが様々なチャンネルのうちから選んだ番組を暇潰しや、日課的な感覚で視聴している……ハズだった。

その画面から唐突に“機械的な龍の咆哮”が響き渡った！

多くの視聴者は夕飯を吐くなど、仰天する。

現在、この夜7時に龍の咆哮が聴こえるような番組などの局も放送していない。

しょうもないクイズ番組や歌番組・バラエティ番組しか存在しない。

——そう、場違いなのである。

この龍の咆哮が。

日本全国のテレビ画面が鉄鋼の龍人に支配された。

メタリックレッドのメインボディに、ゴールドのアーマー装飾、ダークグレーのボディフレームを持つ、成人男性ほどの前兆を誇るこの機影。

「初めまして。僕は未来の世界からやって来たロボット、【リンド

「ウルムカイザー」です。僕は歴史的に義務付けられた輝かしい未来への導きをここにこへ光臨しました」

何じゃこりゃ？

龍のロボット？ 特撮番組なんてこの時間帯にやってないだろ？

……などと、困惑する視聴者達。

テレビ局は大荒れ。

あらゆる機器がジャックされ、放送中断状態とされている為、苦悩の沼でもがくしかない状態。

そんな事など、無視し、某所スタジオをジャックした竜人型TD・Rカイザーは流暢に電子音声を発した。

「皆さん、僕の仲間をご存知ですよ？ そう、エスパーテロリストの野望を打ち砕いたヒーロー、Cオライオンをはじめとした5機のTDです。僕はその同種に当ります」

「ちょ！ 何これ！？」

晩飯を吹き飛ばし、向かいの父親へ吐いた飯を付着させてしまったノリカはテレビへ急接近。まじまじと見入る。

同様にコウスケも目を疑った。

「こ、こいつは……………」

食卓へ箸を置き、食事を中断するヨシヒロ。

「Rカイザー……………」。（やはり、彼が……………」

ミヤは思わず、茶碗を手から滑らせ落としてしまう。

「ど、どうして…………？」

「今の世の中って大変窮屈ですよねぇ。そう思いませんか、お爺

さん？」

Rカイザーが顔を向けた先へカメラは走る。

椅子に座った庶民的な服装・風貌の爺さんがそこに居た。

「そうじゃのお」

「具体的な要因は何だと思えますか？」

「そうじゃのお。1つは年金が少ない事かのお。もう1つは孫が就職で苦労している事かのお」

「それを解決手段……実はあるんです」

「ほお、それは何かのお？」

「あなた方高齢者が別世界へ旅立つ事です。年金など必要としない楽園の世界へ……」

「何を戯言を。そんな世界ある訳……」

「ありますよ。まずは体験して見て下さい」

そう言うや否や、Rカイザーは鉄鋼で出来た獰猛な口を開き、口内のジェネレーターブレスキャノンを爺さんへ直撃放射した！

強大な熱線に飲み込まれる爺さん。

この熱線を浴びた爺の身体が0と1に分解されていき、Rカイザーが投げた携帯電話のようなものへと吸い込まれていった。

これだけ見れば竜人型TDが老人を殺害したかに見える。

だが、現実が違う……。

Rカイザーは器用に翁を吸い込んだ端末を操作し、端末の画面をテレビカメラへと近づけ向ける。

——そこには先程消失したと思われた爺さんの姿があつた。

彼は旅館らしき場所におり、館内を徘徊している。

誰もいない。

困惑に包まれるが、これが竜人口ボットの云った「楽園」なのか？ と、判断し、マサージチェアーでくつろいで魅せる。

現実世界に居た時の不安そうな顔とはうって違って、開放感に満ちた表情をしている。

「ま、お試しはここまでにしておきますか……」

Rカイザーは端末機のある1つのスイッチを押し、端末機を横へ向ける。

その端末機から光が放射され、0と1の人影が形成されていく。その人影が段々と翁の姿となっていく。

突如の強制送還。

爺さんは尻餅ついてちよんとする。

「あ、あれ？　わしは誰もいない旅館でくつろいでおったのにお
」

「すいません。お試しですからさっきのは……。で、どうでした？
さつき居た世界は？」

「いやあ、最高じゃったよ。飯も食べ放題で、マッサージチェアーもある。至れり付くせりじゃよ」

「気に入ってくれましたか」

「モチロンじゃよ！　あれがお主の言っておった楽園でいいんかの
？」

「そうですよ？」

「お金は発生せんのか？」

「モチロンです」

改めて驚きに震える爺。

こんなオイシイ話あっていいのか？

困惑に回る脳であった。

そんなサンプル爺さんを放置し、Rカイザーはテレビへと再度向く。

「彼のように高齢者の皆様には年金生活を辞めて、こちらの世界で自由に極楽生活して貰います。大移民です。そうする事で、若者の就職座席の増加・年金負担破棄と、誰に取っても幸せな日本にします。それをこれから開始しようと思います。詳しい場所・日時はまた後程お知らせします。では……」

光反射し、眩く誇張するメタリックレッドのボディを持つ、Rカイザーはそう言い残し、姿を消した。

——実質、ガセイのSボードへデータ化帰還した。

日本全国が驚愕の嵐に包まれた。

テットは自分の部屋に入室し、インカムを耳へ装着。

これでヨシヒロ達と通信可能にする。

案の定、ヨシヒロ達の通信が来た。

「ちょ、これどーなってんの？」

「何で辰巳ガセイが……。テット、理由知ってんのか？」

ノリカ・コウスケからの通信。

「ああ、俺は今日奴と会った。奴は今放送した内容の計画を俺に伝えた……」

「あのお坊ちゃま、大胆な事するねえ」

「あたし達はとうするの？」

ヨシヒロが呟き、ミヤはリーダー「テットに今後の動向を尋ねる。

「反響次第だ……。国民が許可肯定すれば、俺達はこの計画に加担するつもりだ。つまり、まだどうとも言えん」

「そっか……」

「まあ、大勢がそうしてくれって言ったらそうするかもだモンなあ」

「細かい話はまた明日、学校でしょう」

テットがそう纏め、4人は納得し、通信を切り、各自インカムを耳から外す。

眉を顰めるテットは顎を摘み、思案に耽る。

「辰巳ガセイ……」

豪勢な洋館——辰巳家屋敷。

ワイングラスをカーペットへ投げ捨て、辰巳会長は憤慨する。

「何だこれは！？ ふざけた話だ！ 姨捨山かつ！」

メイドが「落ち着いて下さい、ご主人様」となだめながら、飛び散ったワイングラスの回収作業をする。

「おやおや、どうされましたお爺様？」

ひょっこりと不自然な程爽やかな笑顔を持ってガセイが祖父の部屋へと入室。

彼の後ろポケットにはSボードがある……。

「おお、我が孫ガセイよ。下らん戯言が公共電波に乗っていたのだよ」

「へえ、知りませんでした。僕、ずーっと勉強していたもので……。お爺様の会社で役立つ為に」

「おお！ 感動的な事を言ってくれる。しかし、今私は機嫌が悪い。勉強に戻りなさい。我が社の未来の担い手になるべく」

「ええ。お任せを……」

（よくもまあ、言えたものです。誰にも担わせないクセに……）
表情と内面で正反対の態度を取るガセイは祖父に礼をし、退出した。

わなわなと震える辰巳会長。

感情の高ぶりで、肩腕が白骨竜に一瞬変化し――。

ボタンとドアを閉め、ガセイは自分の部屋へ戻った。

「ふふふ、知ってますよ爺様。Dr毒島から奪った薬品で肉体改造した事を……。楽しみです。爺様と戦うのが……」

ガセイは愛機が眠るシルバー&レッドの端末「Sボード?0000」を握り締め、空間をも歪ませそんな邪悪な笑顔を形成した！

EP・07 〈龍帝の目覚め〉（後書き）

新展開です。

新たなキャラクターを迎え、ストーリーはヒートアップします。

EP・08 「己にとって邪魔なものこそ、悪か？」

EP・08 「己にとって邪魔なものこそ、悪か？」

01

「お待ちしてりました星渡様方。お車にお乗りくださいませ」

Dr鳳研究所前にリムジン車があり、ガセイのメイドが車のドアを開ける。

「行くぞ」

テツトの指示により、ヨシヒロ達4人はリムジンへと乗り込んだ。リムジンはメイドにより、運転され、テツト達は移動していった。ヨシヒロ達4人は初めて、所謂高級車に乗った為、各々興奮していた。

「スゲエ、俺初めて乗ったよリムジン……」

「広いし、いい匂いがするねえ」

下品にもノリカはこの空間の匂いを鼻の穴をひくひくさせ、嗅ぐ。「何か場違いな気がする……」

もじもじと身体をくねらせるミヤをヨシヒロは冷笑する。

「ハハハッ、乗れと言われたんだ。場違いではないよ」

「まあ、そうなんだけど……」

4人はざわざわと話し、盛り上がる。

反対にテツトは無言で過ぎ去っていく背景を眺めている。

テツトは思い起こしていた。

……ガセイとの出会いを。

それは半年前の話。

CオライオンらTD5機は無事完成。

試運転も何度か重ね、試行錯誤の末、完成に至った。

しかし、5機だけでは不十分ではないか？ 戦力は多い事に越した事はないと考え、ここから新たにマシン開発をした。

元々、Dr鳳が作ったデータコンバートシステムにより、Sボードで作成した設計図と金属をデータとして取り込めば新たにマシン・武器開発する事は難しくない。

敵のエスパー連中もまだ仕掛けて来ないので、こちらはまだ準備しておいていいだろうと判断したテット。

しかし、金属データの採取に困った。

今まではDrが残した部品・材料やスクラップや廃工場から採取していったのだが、極端にスクラップあたりの金属が消えていくのはさすがに不自然だし、知られては困る存在に知られるのは拙いを考えていた。

そんな時に予期せぬ来客が来た。

そう、それが辰巳ガセイである。

彼はあらゆる事業に手を出している大企業グループ・辰巳コンツェルンの一族。辰巳グループに技術提供をした事があるDr鳳の元へ用があつてここへ来た。

しかし、生憎Drは逝去。

なので、孫娘のミヤに話を振った。

「え？ この技術を買いたい？」

「はい、グループをより一層進化させる為にです」

「うーん、そう言われても……」

買い取らせていいのやら分らぬミヤは脳を洩くする。

というか、どんな技術があるのかよく分らない。

だが、テットは考えた。今までDr鳳が辰巳グループへ技術提供を全てまではしなかった理由を。

恐らく、「碌なことにならなそうだ」とでも、判断したのだろう。

優れた技術は使い方・使うタイミングを間違つと社会を悪い意味で狂わし兼ねない。その点を懸念しての事だろうとテットは考えた。

だから、このガセイの言うとおりにするべきではない。

それに現状エスパーと戦う戦力が少ない。

そこでテットは策略を図った。

「今はそれどころではない。長い話になるが、聴いてくれ」

「はい？ 何でしょう？」

テットはガセイに世襲エリートを復讐を目論むエスパー軍団について話を伝えた。

「……ほう、そんな野望が……。恐ろしいですね。僕も狙われるという事じゃないですか。何せ、大企業トップの血族にして、エリート学生ですからねえ。成績優秀・スポーツ万能・容姿端麗……妬まれる要素満載です。ああ、困った、困った」

サラサラの髪を靡かせ、美顔を悩ましげにするガセイ。

実に仰々しい挙動。

「けっ、嫌味かよ……」

コウスケは顔を歪め、不貞腐れる。

「な〜んか、感じ悪いよねえ、あいつ」

コウスケに耳打ちするノリカも同じような感想を持っていた。

「……そこでだ。お前には俺が指定するモノを買い取って貰おう」
「それは？」

楽しそうに小悪魔めいた笑顔で、ガセイは己の顎を摩った。

「対エスパーロボット、TDのうち、リンドブルムカイザーを購入し、己の身だけを密かに守れ」

その要求の意図が汲み取れない一同。

真っ先に要求を突きつけられたガセイが意味を問う。

「護身出来るマシンを得られるのは嬉しいです。しかし、何故密かに己だけを？」

「俺達の仲間だと思われたくないからだ。お前以外の俺たち5人は庶民だ。ヤツラを説得できる可能性を考慮しておきたい……。ダメモトでもな」

「そうですね。いいでしょう」

「あともう1つ、鉄・アルミ・ジュラルミンなど、あらゆる金属や半導体を提供しろ。それがリンドヴルムカイザーの購入費だ」

「金属？」

「材料だ。これ以上の説明が要るか？」

「……いえ。分かりました。提供しましょう」

あつさりと承諾。

交渉成立となった。

「うわぁ、あつという間だな……。にしても、辰巳ガセイだっけ？」

「はい、何でしょう？」

「お前金持ちらしいけど、まだ高校生だろ？ 材料出す金なんて持ってたのか？ 親からせびると編に勘ぐられないか？」

「いい質問ですね。答えましょう。僕は中学校の時からエリートのたしなみとして株をやっているのですよ。それで、高校生にしてかなりの自己資産がありましてね。幾らか知りたいです？」

「い、いや……。遠慮しておく」

コウスケは苦い表情で拒否。

金額を聞いてしまえば、余計に金持ちエリート様の嫌味を聞かされる気がしてならなかった。

「へえ、君、可愛くないねえ」

左右平手をひよいと翳し、ヨシヒロは呆れる。

「当然ですよ。僕、何でも出来ちゃいますから。学校へ行けば部活の勧誘ラッシュ。街を歩けば芸能界のスカウト。ふう、うんざりしちゃいます」

いつもポーカーフェイスのヨシヒロが、眉間・眉をひくひく震わす。

ヨシヒロは本格的に演劇の道へ進むのは高校卒業し、大学進学してからと思っではいるが、高校時代に芸能事務所からスカウトぐらいは貰っておきたいと思っている身。

しかし、今のところそういった経験はないので、スカウト経験者には嫉妬心が蠢くのであった。

「そ、そうかい……。た、大変そうだね……」

「こいつ、口開きや、8割近く自慢と嫌味言う奴ね……。ウザッ！」

「聴こえてるよ、ノリカちゃん」

「聴こえるように言っただつっの」

「ははは、構いせんよ。有象無象の負け犬の遠吠えに嫌悪する程、低品質な心臓は持ち合わせていないもので……」

余計に癪に障ったのか、般若の如き羅刹の顔芸をノリカは行う。

「こんの……」

「ノリカちゃん、落ち着いて……」

「古いギャグマンがのやり取りはそこまでだ。辰巳ガセイ、用件は済んだ。帰れ」

テツトが冷然とそう促し、ガセイはゆっくりと腰を上げる。

「そうですね。ここでおいとましましょうか」

ガセイは背を向け、入り口ドアへと歩む。

——が、途中、わざと足を止める。

「あ、そう言えば……。僕、ロボットコンテストには出た事無かったなあ。色んなスポーツの大会で実績出したり、塾へ行っていたりしていたから……。でも、もし出場していたら、どの位の成績でしただかねえ。ふふふ……」

肩を震わせ、嘲笑を堪えるように背を丸め、この研究所から姿を消したガセイ。

研究所内・不快指数低下。

ガセイが消えた事で、気を楽にするヨシヒロ達4人。

「つたく、金持ちエリートってムカツクなあ」

コウスケは怪訝な表情で耳の穴を穿る。

「つてかさあ、何であんな奴にRカイザーあげるって言っちゃった訳え？ 戦力増強なら内の学校の誰かでもイイジャン？」

ノリカの質問にテツトは不敵な笑みで応じる。

「戦ってみたからさ。金持ちエリートと庶民が、ほぼ同じ条件で始めるモノ。TD操作における対決となると、どういふ結果になる

か楽しみじゃないか」

「！！　そ、それが狙いだっただのかい？」

「ああ、だが俺は負けるつもりは無いけどな。皆だって見たいだろ？　恵まれた環境におんぶに抱っこのカスを庶民生まれがブツ潰す逆転劇をな！」

その言葉が皆の心を太陽の如く照らす。

「でも、向こうは戦ってくれるのかな？」

ミヤは御尤もな素朴な疑問をぶかりと浮かべる。

「理由ならもうあるさ。奴はこの研究所全ての技術を欲しがっている。それを濫用しようとした時、俺達が阻止する。奴はともキナ臭いからな」

「はあ……」

何となく納得してみるミヤ。

「ま、理由などなくても無理矢理戦わせるけどな。……とは言っても、エスパー討伐した後の話にはなるが……」

それは狩人の如く、反逆者の如く、狡猾で猟奇的な表情だった。

恵まれた環境に生れた人間が何もかも上手くいく世の中であっていい訳が無い。

少しでも庶民の逆転勝利という事実が庶民に対して夢・希望を与えられるのではないか？無論、自分自身、金持ちエリートのクソ野郎を撃破してイイ気分になりたいというのもある。

だからこそ、「敵」には「同条件の武器」を持っていなければ困る。

それだけの話である。

長々とテツトはこれまでの流れを回想し終えた時には辰巳邸・敷地内へとリムジンが到着しようとしていた。

Rカイザーが指定した場所日時。

ドーム内を埋め尽くすのは高齢者〓そこには大勢の高齢者が来場していた。

あらかじめ指定されたレーンに沿って、並んでいる。

ここに集まった高齢者達は皆、元の資産も少なく、貰える年金も少ない人々であり、生活が厳しい環境で、更に病弱化により、家族へ迷惑をかけたくないという理由からデータ世界への移住を決断した。

また、デヴァイスを通して、家族と接する事が出来るのだし、いかとも思えたのでデメリットはないと思えた。

Rカイザーを操りし者〓ガセイは来場の様子をステルスサテライトを通して確認した。

……… 1LDK・アパート1部屋分ぐらいの、一軒家の子供の部屋にしては広過ぎる、流石お坊ちやまの部屋と言わんばかりの大きなガセイ自身の部屋で。

「ふふふ、目論見通り。大多数が来ましたね」

ガセイはさらさらの頭髪を？き分け、にたりと笑む。

「……大金稼いで逃げ切った高齢者は極僅か。殆どは少ない年金での生活を強いられている。理由としては働き、稼いで年金を納められる若者の減少だ。故に脱出したい人間は多い。大勢集まるのは必然ではあるな」

ガセイの向かい側のソファーに腰掛けている人物〓テットはコーヒーを啜った後、結果に対する理由を淡々と述べた。

この部屋に本日招かれたのはテットだけではない。

テットの左右には男子2名、女子2名が存在。

ヨシヒロ、コウスケ、ノリカ、ミヤである。

「……で、星渡君、結局じーさんばーさんらをデータにしちゃう訳？」

かったるそうに耳の穴を穿っているノリカは司令塔に指示を仰ぐ。
「ドームに來ている人達は希望者だ。望み通りにするべきだ」

「ま、拒否していないのなら、そうなるよねえ」

ヨシヒロは一人、すファアに座らず、ストレッチしながら話の流れに納得。

「ふん、OK」

ノリカも納得し、スレンダーな脚をクロスし、シルバー&パープルのSボードを開く。

6人はそれぞれのSボードの操作ボタンに指を近づける。

ドームステージにて、6機のTDが出現。

館内を埋め尽くす高齢者達は一斉に注目を送る。

「皆さん、お待たせしました！ 苦痛な現実からお別れしましょう！ 皆さん、順番にいきますよぉ！」

紅の竜人・Rカイザーの電子音声が響き渡り、高齢者は列を正していく。

「ではまず、一番目の貴方から……」

Rカイザーは手前の爺さんに身体の向きを合わせ、ブレスキャノンの搭載された竜の口を開く。

そこへ突如、爆撃の一閃が！

6機のTDへピントインで襲来して来た。

「な、何だぁ!？」

Gバンディッタは襲撃を放ったであろう場所へ見上げた。

「ちょ!?! 嘘でしょ!?!」

ウィザースロットは驚き、身構える。

信じられないものがドームの天井を突き破り、襲来したのである。その姿は所謂、モンスター。

蠅タイプ、烏賊タイプ、食虫植物タイプの気色悪い巨大獣。似ている……。

以前戦った魔竜やインベダー!! 超能力で身体変化した深大寺達に。

「ど、どうして? Dr毒島は捕まったハズだし、エスパーテロリ

ストは全員逮捕されたハズなのに……」

エンゼクロスは疑問の渦に包まれる。

「勝手にDr毒島の技術を手にしたのだろう。つまり、それが出来る存在……権力のある存在が奴らの正体だな」

「権力者の上、僕らの邪魔をしに現れた……。となると、正体が絞られて来るねえ」

Lシュヴァリエは薄々感付いていく。

しかし、謎のモンスターの威嚇攻撃が、彼らの推測タイムを邪魔する。

目からの光線攻撃。

6機のTDにスパークという目暗ましを与える。

「君達、いかなあ。お年寄りを排除するなど。これでは姨捨山状態ではないか」

中央の蠅モンスターがくちやくちやと細長い口を動かし、主張を開始。

「フ、よく言えたものだ。そんな世の中にしたのは誰だ？」

不敵に嗤い、ビームマグナムを巨大モンスターへ照準を合わせCオライオン。

「ふむ。誰かの所為にしたがるのは良くないなあ。誰の所為でもない事態だつてあるのだよ」

「……どうかな？ タクティクスε！」

Cオライオンが叫んだ矢先、Rカイザー以外のTDの動きが瞬時に変わる。

Cオライオン、Lシュヴァリエ、Gバンディッタが一斉射撃！

3頭の巨大モンスターへ威嚇射撃を放った！

蠅・鳥賊・食虫植物モンスターはたじろぐ。

その隙へエンゼクロスとウィザースロットのカードビットが飛び出す！

「避難して下さい！」

エンゼクロスが避難誘導を担う。

ドーム内の高齢者達は出口へ一斉に駆け込んだ。

Cオライオンらが放った威嚇射撃を巨大モンスターは弾き始める。反撃を始める。

それに伴い、下部に居る老人達へビーム弾などが降下。

危ない！……と、思われた寸前に巨大カードが防御。

ウィザースロットのカードビットが縦横無尽に動き回り、カードの側面で見事に防御！

一般人への被害を防いだ！

Rカイザーは淡々とこの様子を眺めている。

「ほお、モンスターさんはこの場で戦っちゃいますかあ。オカシイですねえ。彼らは高齢者がデータ化されるのを阻止しに来たハズ……。おっと、今は推測している場合ではないですかね？ さて、僕は……。威嚇射撃にでも加わりますか」

ガセイはくすくすと余裕めいた笑いを溢し、シルバー&レッドのSボードのキーを叩く。

緑青に発光する竜人TDのRカイザー。

獰猛な口を開口し、ジェネレーターキャノンを大放し！

上斜め30度。

蠅モンスターへと飛翔した。

「ぬうつ！」

自身へ襲来するビーム砲を察知。蠅らしく、素早い動きで回避。

Rカイザーの砲撃は天空へと消え去った。

「む？ 素早いですね……。ならば！」

Rカイザーは竜人。当然竜の如き、鋭い爪や尻尾がある。

テイルユニットが突如分離し、それらが鳥竜・フレスヴェルグへと変形。

翼を広げ、空中へと上昇した。

「バージ・フレスヴェルグ……向こうは逃げ切れますかね？ ククッ……」

ほくそ笑む操作主の目論み通り、蠅モンスターを小型鳥竜が翻弄。

自分より小さいものが自分より素早く動かれる。
これほど鬱陶しいものはない。

蠅モンスターは苛立っていく……。
そうしていくうちに、フレスヴェルグが蠅の大きな羽にピタリと
付着。

「むっ！？　どういう事だ？　まさか……」

「ふふ、想像通りですよ……」

ガセイは涼しい顔で選択キーを押す。

躊躇無く自分のマシンのパーツを自爆させる。

テットですらやむを得ない時でしかない手法をさらっとやって
のけたガセイ。

お坊ちゃま育ち所以か、勝つ為なら捨てるモノは堂々と捨てる手
法を採った。

蠅モンスターにしがみ付いたフレスヴェルグは身体を発光させ、
自爆！

盛大に爆音が轟いた。

「さあて、ダメージはどうでしょうね？」

空間を埋め尽くした爆煙が退いていく――。

片翼を消失し、ふらついている大蠅があった。

手応えアリ。

ガセイは邪悪な笑顔に顔を歪める。

「ぐぐ……。おのれえ……」

不安定に飛行維持する蠅モンスターは下方向を確認。

居ない。先程まで居た高齢者達が避難を完了した事を把握。

「よし……。これでいい……。今日はここまでにしようではないか
……………」

蠅の巨大魔獣は瞬間的に姿を消した。

紛れもないテレポーション。

この能力をも持っているとは間違いない。

Dr毒島の開発したエスパー及び、モンスター化システムのもの

であろう。

残りの烏賊・食虫植物タイプもＣオライオンらと射撃合戦を切り上げ、動揺にレポーターションで消え去った。

——途端に一面が静寂となった。

ガセイの部屋にて、一息降ろす6人。

首をゴキゴキと鳴らすコウスケ。

「はあ、何だっただ、あいつら？」

「威嚇牽制だな。今回の事件により、老人達は怖くてＴＤの元へは来られなくなつた。一番の目的はそれだろう」

「テツト……。けどよお、それがヤツラにとって何のメリットになるんだ？」

「おやおや、君は他人に尋ねてばかりですねえ。自分で考える事は出来ないんですか？ それとも考えても答えが出せないのですか？」

「何い？」

ガセイの嘲笑に、コウスケは顔を顰める。

だが、憤慨まではせまいと踏み止まった。

「簡単な話です。現状を変えないようにする。ただそれだけに意味・メリットがあるんですよ彼らにはね……」

「彼ら……それはつまり、お前の祖父らの事か？」

「……ええっ！？」

いきなりガセイの祖父へと話が向う。

ヨシヒロ達4人はテツトの言葉に驚き、硬直。

「はい。さっきの3体のうち、蠅のヤツは僕の爺様・辰巳コンツェルン会長です」

「ステルスサテライトで確認していたか？」

「ええ。とつくにね」

ミヤは無言で身の毛が弥立ち、驚愕した。

（この人、容赦なく自分の家族を……。何か因縁があるのかな……？）

「ふむ。つまり、高齢有権者なんだね。あのモンスターの正体は」
「ヨシヒロ、その通りだ」

「嫌だねえ、高齢者と言う大勢の精力を利用して若者を搾取。その上、貧乏な高齢者に貧困を強いらせ、自分ら金のある高齢者だけ、のうのうと生きる。要するに彼らにとって都合のいい世の中であって欲しい訳かあ。こんなの、僕のヒイロイズムが許さないねえ」
「ホント」

「さて、爺様達はどう出ますかねえ」
「しらじらしくそうのたまうガセイ。」

「フ……。向こうが仕掛け次第、迎え撃つまでさ……………」

テツトは涼しい顔を作って言って見るも、引っ掛かっていた。
何故、敵の正体が分かっているのに、ガセイは祖父達に奇襲攻撃を過去に行わなかったのかを。

肉親を葬る事へ躊躇するような類ではない。

先程、自爆マシンを平然と祖父へ貼り付けた事が何よりの事実だからだ。

……何か、彼にとって意味のある「スジ立て」があるのだろう。
現時点・少なくとも辰巳会長を倒すまではガセイとは味方ではある。

大人しく、様子を見る事にするテツトであった。

03

同時刻。総理の自宅・書斎へテレポーテーションして来た3人。

辰巳会長とその右腕の安原（63歳）と、城戸総理の3人である。

「おのれえ」

「会長、手強いですねヤツラ。やはり、あのエスパー大群を倒しただけの事がありますよ」

「大丈夫だよ、安原君」

「総理。何か策でも？」

「勿論。シンプル・イズ・ベストなものだ。味方を増やし、敵を減らすのだよ」

実に余裕めいた笑顔で、両手を後ろにクロスさせた総理は次策を述べていく。

「知っているかね？ いつの時代も女の子は大金に弱いのだよ。玉の輿願望と言う奴だねえ。それが、年寄りから貰うお金でもね……」

辰巳会長も勝ち誇った笑みで、頷く。

安原は圧倒されつつも納得。

これなら、いけると判断。

辰巳会長と城戸総理は小さな若き乙女達を巨大な手で捕らえる――。

巨大な手中に閉じ込められた女性達の上空より札束が雨の如く降り落ちていき……。

ショートコント

ミニコーナー 01 《実験！ テット&ヨシヒロはメイドに萌えるか？》

ノリカ・ミヤ・カオリとその他メイドスタッフはこそこそ談合していた。

「ねえねえ、あの2人がメイドに攻め寄られたら、どんな反応するんだろ？」

メイド店員「カオリはにやにやしながら一同に疑問を投球した。

ノリカはノリノリで話を加速させる。

「確かに気になるねえ。あのスカした2人が赤面発情し、崩れるかどうかは」

「あの2人が赤面発情？ 想像付かないなあ」

ミヤは困ったような苦笑いを溢す。

「でも、クラスメイトで顔を知ってるあたしら3人では効果は薄いと思う。そ・こ・で！」

出陣！ メイド店員の1人、身長145？・ロリぶりっこメイド・サユリが鏡の前で自惚れ真つ最中のヨシヒロのペースを狂わすべく、参上！

サユリはわざとずっこけ、ヨシヒロへ抱きつこうとする。

自分のキュートさに自身のある彼女はこれでイチコロだと看破し、実行に移した。

ハッと倒れ来るサユリを察知したヨシヒロは咄嗟にターンし、傾く彼女を抱き抱える。

それはまるで姫を救出した貴公子のようであった。

「大丈夫かい？」

爽やかな笑顔に、白く輝光する歯。まさにイケメンである。

「きゃ、きゃっふっん、申し訳無いですう。サユリ、ドジっ子なモンでえ〜」

「ふふ、下手な演技だね……。まあそれが持ち味なのかもしれないけどね」

げ、バレてる……。と、笑顔が氷結するサユリ。

結局ペースを崩し、赤面・発情などさせられなかった。

「さ、仕事に戻りたまえ、メイドガール。僕はイケメンヒーローポーズ考案に忙しいんだ」

渋々身を引くサユリ。

まごうことなき、作戦失敗である。

悔しがるノリカ・カオリ。

ミヤは「やっぱりね……」と、失笑。

心機一転。

今度はテツト陥落へ攻め入る！

挑戦者は当スタッフ最大爆乳を誇るエリサ。

豊満で弾力性抜群のおっぱいを暴れさせ、無駄に身体をくねくねさせ、テツトの目前へ！

これでどうだ？……と、息を呑む女子一同。

「あのおっくん、ご主人さまぁ〜ん」

妖艶な言い回しで、エリサはテツトをご主人様と呼称した。
「む？」

エリサの存在に気付くテツト。

カオリは勝ち誇った、あくどい顔をする。

「これはいけるっしょ！ エロサ……いや、エリサのパイオツには流石に参るでしょ！」

「うはぁ、楽しみ、楽しみっ！ 鼻血ブーとかやれよぉ〜」

「ノリカちゃん……。鼻血ブーは古いよぉ……」

テーブル席前。エリサは脳内で、

どお？ 早くあたしのおっぱいに興奮しなさい？

と、魔性の笑みを浮かべる。

しかし、テットは平常通りのクールフェイスで、動揺の色も脈動の激化も見られない。

「む、店員か……。そうだ、水のおかわりを貰おう」

テットは淡々と水を飲み切ってカラのコップをエリサの目の前に移動させ、再度Sボードに目を通し、分析を再開する。

己の色香に引っ掛からなかった事がこの上なく、ショックであるエリサ。

彼女は放心状態の中、こう返す。

「か、かしこまりました……。ご主人様……………」

端に隠れて見ていたノリカ・カオリらは顔で目一杯悔しがった。

「くっずれネー、あいつら！」

ノリカはバナナに滑った時並の、盛大なズッコケを披露。

「ああ、やつぱり……………」

柔和にミヤは苦笑いを行う。

カオリらメイド達はわなわなと怒り昂ぶる。

お、おのれえ。

全ての客を萌えさせて来た我々があ。

修羅の獄炎を纏うメイド陣であった……………。

そんな事など知らず、テットやヨシヒロはマイペースに各々のやりたい事をやっているのだった。

テットは心中で呟く。

（やれやれ、楠らめ。馬鹿馬鹿しい事を……。俺は女などという、不確かな存在に幻想・欲望は抱かん……。幻想を抱くのは自分自身だけで十分だ……………）

ぬっとカメラ目線で現われたコウスケ。

「おっす、俺コウスケだ。皆、女子の裸見たいよな？ 俺もだ！
今回はステルスサテライトを悪用……いや、有効活用して女子更衣
室を覗こうと思う！ テットやヨシヒロは興味ないって断ったけど、
俺は見たいからさあ。んじゃ、撮影開始イ！」

コウスケは嬉々とステルスサテライトを使い、ノリカ・ミヤ達が
学校の女子更衣室で着替えをしている映像を撮影した。

室内には数々の下着……。露出された女体の数々があつた。

「あゝあ、また胸だけ大きくなっちゃたあゝ。身長の方を大きくし
たいのにいゝ」

思うように育たない自分の身体……。萎えるミヤの顔。

やや苦しそうにブラジャーを装着する。豊乳が窮屈そうに暴れる
……。

「それ、嫌味？」

ノリカは後ろからミヤの胸を揉み出す。

他、カオリら友人らもミヤの豊乳の爆発しそうな揉まれ具合に注
目。

「うわ、何これちょっと！」

「うらやまー」

「もおゝ、止めてよおゝ」

頬が真紅と化すミヤ。

ノリカはそろそろ勘弁しておこうと、荒々しい乳揉みを停止する。

「っていうか、ノリカちゃんだって結構大きいじゃん」

「そうだけど、あんたには負けてんの！ 自分に無いものほど、憧れるものは無いよぉ」

「そ、そう？……」

3分の1ほど納得はするが、どうも釈然としないミヤであつた。

「いやぁ、目の保養……。保健の勉強になつたなぁ」

鼻の下を伸ばし、コウスケは感慨耽る。

……が、彼の背後に瘴気を纏う般若と化したノリカの姿が迫つて来ていた。

複数あるうちの、彼女のステルスサテライトが更衣・入浴時には男子を監視するよう設定していた。その為、覗きがバレたのだった。そして暗雲に囲まれたコウスケは……。

「んぎゃゝっ!!」

EP・09 〈ノリカ結婚10秒前?〉

EP・09 《ノリカ結婚10秒前?》

01

その日、突拍子もないニュースが流された。

何と、“一夫多妻制導入”を日本政府が掲げたのだ。

理由は「少子化対策。金持ちな奴は沢山嫁貰って子作りしろ」という話らしい。

テツトは朝食の白米を食しながら、このニュースを知る。

「ほう……。こう来たか」

そこへ洗濯籠を持ったテツトの母がテレビをチラと見やる。

「あらまあ、こんな制度作っちゃってえ。こりゃ、モデル男は更にモテ、モテない男は更にモテなくなるわね」

「結婚したい相手が居るが、相手は結婚しているので諦める必要が無くなったからな」

「そうだねえ。厳しい世の中になっていくねえ。あゝ、怖い、怖い」

既に結婚した女であり、今更新たに結婚するなど面倒と思うテツト母は他人事のようにぼやき、ベランダへ洗濯物を干しに行くのであった。

旧校舎階段。

御馴染みである、テツト達5人の学校での集合場所である。

「なぐんで、いきなり一夫多妻制なんか可決したんだろう?」

コウスケ達は疑問の渦中に居た。

そこにテツトが回答の弾丸を放つ。

「金持ちジジイが若い女を沢山抱え込みたいからだろ。要は玉の

輿棒を増やすという事だ。これにより、金持ち老人と女だけは幸福となり、反対に若い男と金の無い老人が不憫な目に遭う」

「ふう、厭なエロオヤジの発想だねえ」。『可愛い女の子は何人でも大歓迎！ オジサン、お嬢ちゃんには沢山お金あげるよあ。』

……だが、ヤローは来んな。死ね！』と、いう話だろ？」

ヨシヒロは美顔を悩ませ、詩を詠うように呟く。

無言で首肯するテツトは話を続行。

「この法案を作ったのは既得権持ちの高齢者だ。この前ドームに襲来したモンスターの招待はヤツラで間違いない。ヤツラは常に自分らだけがいい思いをして逃げ切ろうとしか考えていないからな。こういう政策に出ても何ら不思議ではない」

豪快に組む、スレンダーな美脚。

ノリカは苛立ち気味に両脚をクロスした。

「ハン！ 気に入らないねえ。金をやりやあ、エロオヤジに若い女が群がると思ってるとはねえ。随分、女を安く見られたモンだわ」

「どういう反響があるかは現時点では分からん。しかし、現在は不況。就職が難しい時代。プライドを捨てても養ってくれるジジイに媚びる奴が居ないとは思っていないだろう、連中は」

「うーん、お金が無い……生活が出来ないのなら、プライドを捨てちゃう人も出ちゃうのかな……？」

両頬を掌で支えるミヤは呆然と溜め息を落とした。

「俺は女ではない。だからそんな事は分からん。しかし、この制度を放置すれば碌な事にならん」

「具体的には何だよ？」

コウスケの質問にテツトは応じる。

「若い男・金のない男・モテない男・貧乏高齢者は更に追い詰められ、金持ちオヤジと結婚出来た女も行く行くは年齢差の都合上、金持ちオヤジに先立たれ、金の無い生活を強いられる。一夫多妻制で資産が減るから遺産など必然的に枯渇するからな」

「ナルホド、合法的に女遊びに大金消費して、ポツクリ死ぬ既得権オヤジ共の勝ち逃げシナリオって事かぁ。美しくないなぁ」

眉で波描き、ヨシヒロは顔を渋くする。

勢いよく持ち上がる美尻。

ノリカは燦然と立ち上がった！

「決まりね！ 徹底的にブツ潰す！ それっきゃないっしょ？」

「イケメンヒーローは他人を不幸にする存在を放っておかない。立ち向かうのは当然。いや、必然さ」

「若い・金無い・モテない3拍子の俺としちゃ、容認なんか出来ネエモンな！ やってやるぜ！」

「それ……言って悲しくない？」

ミヤは哀れな小動物を見るような目でコウスケを眺める。

コウスケは凶星ゆえ、ずっこける。

「んだぁあつ！ 痛いトコ突かないでえゝ。遭えて触れないでくれよそこはっ！」

「ご、御免……」

ヨシヒロ、ノリカは思わず笑い出す。

テットだけは冷静なボーカルフェイスをしたまま、和んだ空気を打撃する。

「……しかし、まだ敵の数・勢力は掴めていない。ステルスサテライトで調査中だ。向こうのデータが集まるまでは下手に動かんぞ？」

「ま、そうなるかぁ。それまでじっくり構えておくでしょう……討伐する楽しみは暫く後かぁ」

自分のSボードを見つめ、不敵にヨシヒロは笑んだ。

02

昼休憩が終わり、平常の授業を受講するテット達。
何ら変哲もない数学の授業中。

――のハズだった。

「……え。次は問3だな。ようし、問2は田中が解いたから、その後ろの川元。解いてくれ」

30代前半の男性教諭が川元カオリ「メイドカフェでアルバイトをしているノリカ・ミヤの友人は虚ろな表情をしていた。

「あー、はい……」

覇気の無い声で応答し、黒板へと進行。だが、途中で足元がよるめき、床に倒れ伏してしまう。

思わず、椅子から飛び跳ね、動揺するノリカ。

「ちょ、カオリ!？」

いきなりクラスメイトが倒れた。

クラス内の一同は怪訝な目で倒れた学友に注目する。

「おいおい、どうしたんだ？」

教師が駆け寄る。

既にノリカはカオリの額に手を当て、熱があるかどうか窺う。

「先生、熱あるみたいです。あたし、保険室に連れていきます」

「お、おお、頼んだぞ、楠」

「あ、あたしも行きます。一人じゃ連れていけないと思いますから」

ミヤが拳手。

「そうだな。女子2人で運んでいってくれ」

「はい。運ぶよっ、ミヤ」

「うん!」

ノリカとミヤは友・カオリの腕を肩に掛け、立ち上がった。

保健室……。

「風邪みたいね。川元さん」

保健室のおばさんは熱を測り、風邪であると診察した。

「何か、心当たりある? 楠さん、鳳さん」

「そうですね……」

ミヤはカオリが倒れた原因を考え出す。

「バイトのし過ぎ……かな? 最近かなりシフト入れているって聞いているから」

ノリカが心当たりを自信なさ気に呟いてみた。

「それかなあ。ただでさえ、学業をこなしながら、アルバイトというのはキツイというのに……」

「そうですか……」

知らないところで友達が苦勞していた現実を知ったミヤとノリカは悄然となった。

「あ、ゴメン。これから会議があるから、ここ、少しの間、開けるね。2人は早く教室へ戻りなさい」

「あ、はい……」

保健室のおばちゃんはその言い残し、退室した。

「ノ、ノリカ……」

カオリが意識を取り戻し、ノリカを呼ぶ。

2人は反応し、カオリの居るベッドの方へと急行。

「どうしたの？ 浣腸でもしようか？」

「浣腸って……ノリカちゃん」

「あたし、迷っているの……」

ノリカ・ミヤの脳上に“？”が灯る。

「……実はね。凄くお金持ちのおじさんに養って貰えるかもしれないの」

「えっ？」

「金持ちのオッサン？」

「うん……メイドのアルバイトしている時に出会った人なんだけど……」

その時の事を細かく語り出すカオリ。

——それは昨日の事。

カオリは家の経済的余裕が無い為、アルバイトをしている。

そんなカオリの元へ容姿はガマガエルのような気持ち悪い太った中年男性が来客。

その男は高価な指輪や時計など貴金属を持っており、服装も醜い

容姿に似つかわしい高級スーツを着用している。

どう見ても金持ちのようであった。

この男、セクハラをしつつ、「自分は金があるから君を専属メイドとして高く雇ってあげる。いや、お嫁さんにしてもいいよ。……但し、毎日僕とエッチする事。お嫁さんなら、毎日子作りしないかねえ」と用件を突きつけた。

明らかにいやらしい魂胆での要求。

カオリは無論、断った。しかし、

「君、高校生だよ。お金無いから働いているんだよね。君、お金……裕福な生活が欲しくないのかい？」

と、不気味な笑いで揺さぶりを入れた。

気色悪い中年金持ち男は高級指輪をわざと輝かせ、自分の電話番号を記した紙を残し、カフェを後にした。

「なるほど、気持ち悪いのを我慢して金を選ぶべきかどうかって事ねえ」

ノリカがさらつと要約。

カオリはそれで間違いないと頷く。

「お金は欲しいよ。でも、あんな気持ち悪い人にいやらしい事を毎日されるのは……」

「抵抗あるよね……」

ミヤの意見にカオリは同意を見せる。

「そうだけど、このままバイトと学業をこなして、大学まで行っても、その先に保障された未来は無い……。だから、いつその事……とも思えちゃって」

「そうだよ……」

ミヤは否定意見を言えず、ジレンマに共感してしまう。

「かーっ！ ダメダメッ！ うまい話には絶対裏があるって！ やめときな！」

スレンダーな美脚をクロスし、一蹴。

ノリカにとつてはいけ好かない話であつた。

「大体ねえ、好き勝手遊ばれてポイ捨てされんのが関の山よ、そんなの！ これ、一夫多妻制になつた事を利用しているね、きつと」「どういう意味？」

テツトの話を受けていないカオリにはさっぱり分らない。

なので、ノリカは説明に入つた。

カオリは納得。

勝ち逃げを決めた富裕中高年の玩具にされ、その後、妻を増やされ、自分の取り分を減らされる。金を女に管理されないよにさせる。そして、年老いたら資産を失い、男や子供の面倒を全て自分ひとりに押し付けられる始末が目に見えている事を知つた。

カオリは我に返つて、冷静になつた。

「やっぱり、うまい話はないよね……ゴメン。変なこと言っちゃつて」

「謝る事はないよ、カオリ」

「そう！ 悪いのは他人を玩具のように弄ぶヤツ！ 徹底的にブチのめすべきねえ……」

ノリカの脳内に稲妻が走る。

「あーっ！ そうだっ！」

「ノ、ノリカちゃん？」

突然雄叫ぶノリカに唾然となるミヤとカオリは目をパチクリ動かす。

03

ガマガエルのような顔の中年男がカオリの働くメイドカフェへと来客した。

彼はある少女の隣へと座る。

「うへへ、待ったかい？ ノリエちゃん？」

ノリエと呼ばれた少女は髪型をツインテールにした、ノリカ。今

回はフリフリのロリータファッションでここへ来客していた。

「ごめんなさい。友達の力オリさんから貴方の話を聞きまして是非会ってみたいになりました」

今迄と全く異なるファッションに態度・口調。

ノリエという架空の人物に変身したノリカはこの男に接触を図ったのである。

この様子をステルスサテライトを通して静観しているのは無論テツト達5人。

彼らは鳳研究所に待機している。

「うへえ、何だこの演技。鳥肌立つぜマジで……」

背筋が凍り、寒気を堪えるコウスケ。

そんな彼に同意を示すガセイ。

「全くです。演技力とは恐ろしいものですね」

「しかし、彼女、思い切った作戦に出たねえ。意外だよ」

「そう？ ノリカちゃんらしいと思うけど……」

ヨシヒロとミヤはそう言いながら、クッキーを食す。

テツトはSボード画面を凝視し、ノリカが実行している作戦の全貌をおさらいする。

（この中年金持ちオヤジがモンスターになるプログラムを受けている可能性は高い。そうだとしたら、他の仲間を把握している可能性も高い。要するに潜入調査。もし、予想が的中していれば、大きな情報を手に出来るかもしれない。……まずはヤツがモンスターになるか、否かを確かめなくてはな……。頼むぞ。楠……）

この身を投じて挑んだノリカに今は全てを託すテツトら一同であった。

ノリカもとい、現在ノリエである彼女は話を進めていく。

「あのー、私贅沢大好きなんですよねえ。私の家、あまりお金無いのに、無理してちよつとイイ服、買っちゃうんですよ」

「へえ」。ノリエちゃんは贅沢が大好きかあ」

「はい。とつても。だから、お金持ちの人つてとても魅力的に感じちゃいます」

（んな訳ねーだろ、バーカ……。グロガエルに興味なんか持つかつーの）

心の中で反対の事〃本音を溢す。

ノリ力は演技とはいえ、我ながら嫌なことをしているなと思った。金持ち・コネ持ちを贔屓・融通していた芸能プロダクションの事……。

本人の実力・才能だけでなく、背後も評価に入れるのは気に入らなかつた。

それに、大人の世界の話だが、色仕掛け、媚売りで仕事を取らないと生きていけない芸能人の先輩方を思い出すと居た堪れない。

一層、個人の才能・実力よりも世渡り能力が重視される事に納得がいかない。

おかしくない？

役者つて、演技で評価される職業でしょ？

……と。

——そう思いつつも、会話は続く。

「それに……貴方はお金だけの人じゃないと思うんです。どこの馬の骨かも分からない女を妻にしようとしてくれる心温かい人だと思えます……」

（んな事、微塵にも思つてないし！ どうぜ若い女体狙いだろーが、クソエロオヤジが！）

「そう思ってくれるかい？ 嬉しいなあ」

「そうですか……。だけど、1つ、心配な事があります」

「何だい？ お金なら困らないよお。僕は金融業会のトップに君臨しているんだよ。たとえ、今働いている会社が潰れても100歳まで遊んで暮らせるお金はあるんだ」

「でも、そのお金を無理矢理奪われては大変ですよ。防衛する力、

持っています？ 弱い人と一緒に居たくないなあ。身体も許したくないなあ。」

ノリエはわざとらしい口調で煽りに入った。

「ぬぬ……防衛かあ。セキュリティは堅いし……」

「堅いし？」

男は突如、小声になり、ノリエに耳打ちをする。

「実はね、私はモンスターに変身出来るんだ。自己防衛は万全さ。それに、その力で如何なる存在も屈服させられるんだ……。勿論、君もね……」

一気に情報を漏らすこの男。

下心が優先され、力づくで・さつさとノリエを弄ぶべく、圧倒的力があると牽制に掛かったのである。

……これ wait っていた。

ノリエもとい、ノリカの心中でニタリと計略的な笑みに顔が歪む。「へえ」。そうなんですかあ。見てみたいなあ。遅いモンスター……のす・が・た、その後は遅い人間の時の裸を見ようかな？

あたしの裸を見せた後で。」

後は畳んでいくだけだ。

ノリカは相手を餌付けし、誘導に出る。

「も、もちろんだともあ。そうだなあ、公園にでも行こうか」

「はい……。楽しみです」

ノリエの演技力満点の笑顔。

場所は近場の公園へと移る。

既に日は暮れ、人っ子一人居ない公園。

そこへノリエと男がやって来る。

「ぐへへ……誰も居ない。ノリエちゃんのこのままエッチ出来そうだよ……」

ヨダレを垂らし、下品な笑みに歪む男。

下心が沸騰していく。

「んじゃ、ノリエちゃん、僕のカッコイイモンスター姿、魅せてあげるよ！」

「わあい！　楽しいい！」

（ハン、今日であんたはデータ世界へオネンネだよ）

男が気を高め、踏ん張りを入れる……。背中を丸める。

細胞を転換させていき、人肌から両生類的なヌメヌメした肌へと変貌していく……。

巨大なガマガエルへと姿を変えた。

（フン、顔は変身前と同じじゃん。何このギャグ……）

「きゃー、こわーい！　グロテスクう！」

突然、棒読みをし、怖がる演技をしながら、ノリエは公園から去っていくとする。

「逃がさないよ。身体の隅々までノリエちゃんをぺロぺロしちゃうんだからねー！」

カエルモンスターらしく、長く、弾力性のある舌を伸ばし、ノリエへと迫る！

ロープの如く、捕らえんとする。

……シュッ！

そこへ電光石火の如く、“キャリバー”が長い舌を切り飛ばした！
颯爽と地を踏む、美しき騎士ロボット……。

「シュヴァリエが招来された！」

「ふう、下品だなあ性欲塗れの人間……いや、ケダモノは。ケダモノは退治しないとねえ」

「き、貴様はっ！」

「ふふっ、正義のヒーローさ」

ニヒルに自己紹介をし、「シュヴァリエはキャリバーを構え直し、身構える。」

「逃げたまえ。一般人の少女よ！」

「は、はいつ、そうしますっ！」

（ま、後で戦いに参加するけどね）

無駄に芝居めいたやりとりでノリエは走り去っていった。

「くっ！ 逃がすかつ！」

カエルモンスターはバネのある脚部を唸らせ、跳躍。

Ｌシュヴァリエを飛び越え、ノリエへ迫らんとする。

しかし！ そこへ無数の射撃が襲来し、空中の巨大カエルを弾き飛ばした。

カラカラと西部ガンマンの如く手元に回される２丁拳銃。

獰猛な鋼鉄の竜口……。

ＣオライオンとＲカイザーが新たに登場した。

「フッ……。こちらに仲間が居る事を忘れたか」

「油断大敵。いや、欲情危険ですよ。カエルさん……」

「く、くうっ……」

「へへへ、そういうこった！」

カエルモンスターを囲うようにＧバンディッタ、エンゼクロス、そしてウィザースロットが光臨。

６対１となる。

「ふん！ だから何だ！ これでも喰らえ！」

カエルはべとべとした気持ち悪い液体を吐き出した。

Ｃオライオン、Ｒカイザーは地を蹴り、回避。

避けた事でその後ろにあったジャングルジムへと付着。

じわじわとジャングルジムの鉄格子が溶解していく……。

「成程……。溶解液ですか」

「皆、気をつけろ！」

「気をつけても遅いよーだ！」

次々とカエルモンスターは粘液を吐き飛ばす。

ＴＤ達は身軽に避けるが攻撃へ転じ難い状況……。

「まずはヤツの口を潰すしかないな……」

オライオンはカエルの口内を第一ターゲットとする。しかし、ここで策を皆へ呟けば、相手に警戒される。

自分以外へ溶解液を吐いた直後を狙うしかない。

そして、そのチャンスが今、到来。

エンゼクロスへ溶解液が飛ぶ。

機動力の高いエンゼクロスはアクロバティックな動きで、見事相手の攻撃を空振りに終わらせた。

シールドライフル展開&スタンバイ！

ゴーグルをツインアイ前にセット。

ポインティングショットモード・オライオン。

狙いを定め………発射！

口内への狭い隙間を通過し内部へ直撃させた！

「んぐおあああつ！　口があ！　口があ！」

カエルは悶え、転倒してしまう。

「よし、トドメはウィザースロット！　お前が決める！」

「へん！　言われなくても！」

ウィザースロットはカードビットを発進させる。

カードフォーメーション形成。

ノヴァモードをの準備を整える。

「……気に入らないのよ……」

ウィザースロットの電子音声に反応するカエル。

「な、何……？」

「他人を自分のいいように動かそうとする、力を持つヤツがねえっ
……」

カードの円陣が光の太柱を放ち、カエルモンスターへと照射する。

……何故、下衆なヤツが権力・金を持っているのだろう。

違うか。金や権力を手に入れたから下衆になってしまふ人が出てしまふのだろう。

選ぶ側は選ばれる側より権力がある。

だから、選ばれる側は逆らえない。

それを利用する選ぶ側はどうしても気に入らない。

許せない。

ノリカの怒号を乗せ、プリズンド・デスが巨大カエルモンスターを0と1へコンバートさせていくのだった。

「反省しな。クズ」

ウィザースロットはメモリーカードを投げ付け、0と1の羅列を封じ込めた。

メモリーカードはブーメランのようにウィザースロットの掌へと戻る。

「さあて、後で洗いざらい吐いて貰おうじゃないの……」

「溶解液じゃなくて、情報を……ね」

「Lシュヴェリエが割り込む。」

「ふふっ、そうね」

ウィザースロットの持ち主ははにかんだ。

ミッションは成功に終わったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0368z/>

ブロックバスターオンライン

2012年1月9日23時49分発行